

竹林庵跡
黒川院跡
南淋寺

福岡県文化財調査報告書 第275集

2021

九州歴史資料館

序

平成 29 年 7 月の九州北部豪雨に際して、九州地方では初の大雨特別警報が発令され、福岡県では朝倉地域に観測史上最大の大雨と甚大な被害をもたらしました。それらの復旧・復興が急がれる中であっても、今回埋蔵文化財の発掘調査を実施できましたことは、地元の方々をはじめ関係各位のご理解とご協力の賜物であると考えております。

本報告は、砂防ダム建設工事に先立って令和元年度に実施した、竹林庵跡、黒川院跡、南淋寺の 3 箇所埋蔵文化財発掘調査の記録です。前二者は黒川地区にあたり、南北朝期から江戸時代初めまで存在した彦山座主の居所「黒川院」とその関連施設の一部の状況を明らかにしました。また、南淋寺は朝倉地域屈指の古刹として知られており、歴代住職を中心とした墓所を調査いたしました。

朝倉地域の一日も早い復興を祈念しますとともに、発掘調査および報告書作成にあたってご協力いただいた方々に厚く感謝いたします。

令和 3 年 3 月 31 日

九州歴史資料館
館長 吉田 法稔

例 言

1. 本書は、大黒川災害関連緊急砂防事業等にもなって令和元年度に発掘調査を実施した、朝倉市黒川所在の竹林庵跡、黒川院跡並びに、朝倉市宮野所在の南淋寺の調査の記録である。
2. 発掘調査と整理報告は、朝倉県土整備部砂防課の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真および遺物写真の撮影は各調査担当者が行った。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社に委託した。竹林庵跡の空中写真は、当館岡寺良技術主査が撮影した。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は各調査担当者が行い、発掘作業員が補助した。南淋寺でのレーザー計測については日航コンサルタントに委託した。また、九州文化財計測支援集団の協力を得た。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において実施した。また、豊福弥生氏の協力を得た。
6. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した周辺遺跡分布図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「甘木」「小石原」「田主丸」「吉井」を加筆改変したものである。また、本書に掲載した調査範囲図は、朝倉県土整備事務所が作成した1/500地形図を加筆改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
8. 本書の執筆は、Ⅲ-1、Ⅲ-2-Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ区は岡田諭が担当し、それ以外の執筆と編集は小川泰樹が担当した。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の組織	2
II	位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	調査の内容	6
1	竹林庵跡（黒川院関連遺跡群第28次調査）	6
2	黒川院跡（黒川院関連遺跡群第29次調査）	21
3	南淋寺	45

図版目次

図版 1	1	竹林庵跡と広蔵山（西から）
	2	竹林庵跡と黒川院跡（西から）
	3	竹林庵跡と黒川下流方面（東から）
図版 2	1	竹林庵跡と黒川上流方面（東から）
	2	2・3・4区（上が北）
	3	3区土層断面（南から）
図版 3	1	5区2トレンチ（西から）
	2	同（西から）
	3	1トレンチ（北から）
図版 4	1	同（東から）
	2	3トレンチ（東から）
	3	同（西から）
図版 5	1	4トレンチ（東から）
	2	同（東から）
	3	5トレンチ（北から）
図版 6	1	同（東から）
	2	8区1トレンチ（東から）
	3	2トレンチ（南から）

- 図版7 1 1トレンチ（北から）
2 2トレンチ（東から）
3 3トレンチ（南から）
- 図版8 1 同（西から）
2 7区1トレンチ（東から）
3 同（東から）
- 図版9 1 造成土上面（上が東）
2 造成土土層断面（西から）
3 造成土下層（上が東）
- 図版10 1 同（西から）
2 同（南から）
3 同遺構検出面（北から）
- 図版11 1 同（西から）
2 石垣下部（南から）
3 調査区北壁と5区石垣（南から）
- 図版12 1 9区第一段階検出状況（西から）
2 27・29層上面（西から）
3 同（東から）
- 図版13 1 完掘状況（西から）
2 同（東から）
3 調査区北壁土層断面1（南から）
- 図版14 1 同2（南から）
2 同3（南から）
3 同4（南から）
- 図版15 1 同5（南から）
2 調査区北東壁土層断面（南から）
3 調査区西壁土層断面（東から）
- 図版16 出土遺物
- 図版17 1 黒川院跡遠景（東上空から）
2 黒川院跡全景（東上空から）
3 同（上空から）
- 図版18 1 I区全景（上空から）
2 同（東から）
3 1号溝状遺構（上空から）
- 図版19 1 同（南から）
2 同（東から）

- 3 1号溝土層断面A（南東から）
- 図版20 1 同B（南から）
 - 2 II区全景（上空から）
 - 3 II区北壁土層（南東から）
- 図版21 1 III区全景（西から）
 - 2 調査区西部（北から）
 - 3 調査区東部（北から）
- 図版22 1 P1・2・4・23（西から）
 - 2 P4断面（南から）
 - 3 調査区東壁土層（西から）
- 図版23 1 調査区北壁西半部（南から）
 - 2 調査区北壁東半部（南から）
 - 3 IV区・V区西部（南から）
- 図版24 1 V区調査区壁土層断面1（南から）
 - 2 同2（南から）
 - 3 同3（南から）
- 図版25 1 同4（南から）
 - 2 同5（南から）
 - 3 同6（南から）
- 図版26 出土遺物1
- 図版27 出土遺物2
- 図版28 出土遺物3
- 図版29 出土遺物4
- 図版30 出土遺物5
- 図版31 出土遺物6
- 図版32 出土遺物7
- 図版33 出土遺物8
- 図版34 出土遺物9
- 図版35 出土遺物10
- 図版36 出土遺物11
- 図版37 出土遺物12
- 図版38 1 南淋寺遠景（南東上空から）
 - 2 南淋寺全景（南上空から）
 - 3 南淋寺と調査区（南上空から）
- 図版39 1 I区全景（南から）
 - 2 調査区北壁土層断面（南から）

- 3 調査区西壁土層断面（東から）
- 図版40 1 II区全景(東上空から)
2 同(南上空から)
3 調査前状況(北西から)
- 図版41 1 調査前状況(下段、西から)
2 調査前状況(中段、西から)
3 調査前状況（上段、北東から）
- 図版42 1 1～4号墓（東から）
2 1号墓（南西から）
3 2号墓（南から）
- 図版43 1 同（南東から）
2 3号墓（南から）
3 4号墓（南から）
- 図版44 1 同（南東から）
2 2～4号墓墓壙掘削状況（南東から）
3 下段・中段間の階段、石垣（南から）
- 図版45 1 中段検出状況（東から）
2 5号墓（南から）
3 6号墓（南から）
- 図版46 1 同（南西から）
2 7号墓（南から）
3 8号墓（南から）
- 図版47 1 墓碑（南から）
2 9号墓（北から）
3 墓碑（北から）
- 図版48 1 9号墓隣墓碑（北から）
2 10号墓（西から）
3 同（南東から）
- 図版49 1 同土層断面（西から）
2 11・12号墓（北東から）
3 同（北西から）
- 図版50 1 11号墓土層断面（南東から）
2 火葬墓検出状況（南から）
3 同（南東から）
- 図版51 1 同完掘状況（南から）
2 同（西から）

- 3 遺物出土状況（南東から）
- 図版52 1 12号墓土層断面（南東から）
 - 2 骨壺出土状況1（南から）
 - 3 骨壺出土状況2（南から）
- 図版53 1 上段検出状況（東から）
 - 2 上段検出状況（西から）
 - 3 13号墓（北から）
- 図版54 1 墓碑
 - 2 14号墓（北から）
 - 3 墓碑（裏面）
- 図版55 1 墓碑（表面）
 - 2 15号墓（北から）
 - 3 墓碑（北から）
- 図版56 1 16号墓（南から）
 - 2 墓碑（南から）
 - 3 攪乱中の墓碑（南から）
- 図版57 1 16・18号墓間の墓碑（南から）
 - 2 17号墓（南から）
 - 3 墓碑（表面）
- 図版58 1 18号墓（南から）
 - 2 墓碑（南から）
 - 3 19号墓（南東から）
- 図版59 1 20号墓（南東から）
 - 2 墓碑（表面）
 - 3 21号墓（南東から）
- 図版60 1 墓碑
 - 2 22号墓（南から）
 - 3 墓碑
- 図版61 1 23号墓（南東から）
 - 2 1号積石遺構（南東から）
 - 3 同（東から）
- 図版62 1 積石遺構中の墓碑（三代）
 - 2 同（四代）
 - 3 同（五代）
- 図版63 1 同（六代）
 - 2 同（七代）

	3	同（八代）
図版64	1	同（九代）
	2	同（十代）
	3	同（十一代）
図版65	1	同（十二代）
	2	同（十三代）
	3	同（十五代）
図版66	1	同（十六代）
	2	同（十七代）
	3	上段西区画（西から）
図版67		出土遺物 1
図版68		出土遺物 2

挿図目次

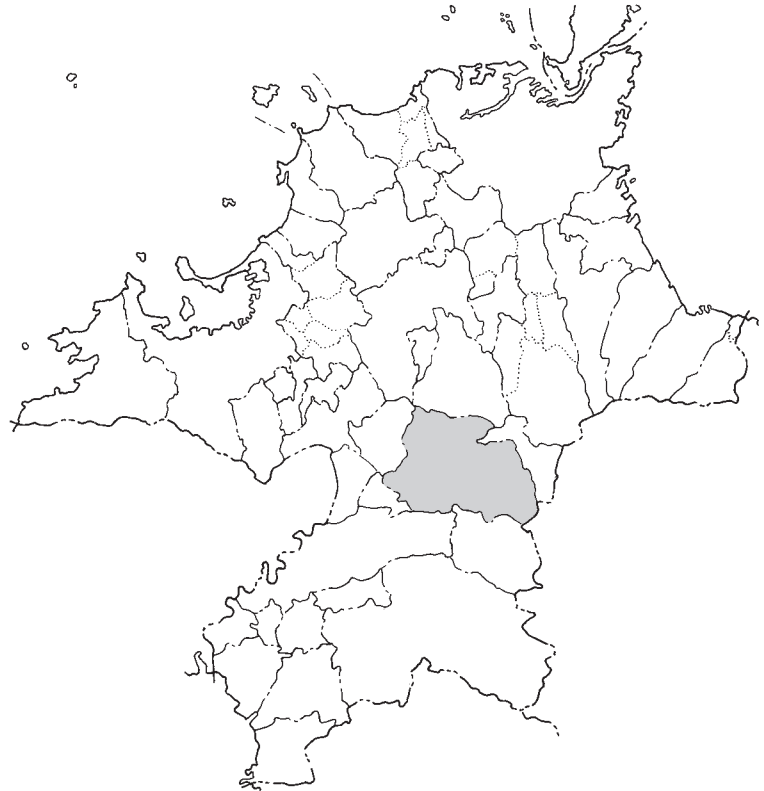
第1図	朝倉市の位置	1
第2図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	4
第3図	調査区位置図(1/3,000)	5
第4図	調査範囲図（1/1,000）	7
第5図	7区土層断面実測図(1/60)	9
第6図	7区平面実測図（1/60）	10
第7図	9区平面実測図（1/200）	11
第8図	9区土層断面実測図（1/60）	12
第9図	出土遺物実測図①（1/3）	13
第10図	出土遺物実測図②（1/3）	15
第11図	出土遺物実測図③（1/3、2/3、1/2）	17
第12図	調査範囲図（1/1,000）	20
第13図	I・II区遺構配置図（1/300）	21
第14図	1号溝状遺構実測図（1/80）	23
第15図	1号溝状遺構出土遺物実測図①（1/3、1/4）	24
第16図	1号溝状遺構出土遺物実測図②（1/6）	25
第17図	包含層出土遺物実測図①（1/3）	26
第18図	包含層出土遺物実測図②（1/4）	27
第19図	その他のI区出土遺物実測図①（1/3）	28
第20図	その他のI区出土遺物実測図②（1/4）	29
第21図	II区出土遺物実測図①（1/3）	32

第22図	Ⅱ区出土遺物実測図② (1/3)	33
第23図	Ⅱ区出土遺物実測図③ (1/3、1/4)	34
第24図	表土その他出土遺物実測図 (1/3)	35
第25図	Ⅲ区調査区壁面土層断面実測図(1/60)	37
第26図	Ⅲ区平面実測図(1/80)	38
第27図	Ⅲ区・Ⅳ区出土遺物実測図(1/3、2/3、1/2)	39
第28図	Ⅳ区・Ⅴ区平面実測図(1/300)	41
第29図	Ⅴ区出土遺物実測図 (1/3、1/2)	43
第30図	調査範囲図 (1/1,000)	46
第31図	Ⅰ区遺構配置図、土層図 (1/150)	47
第32図	Ⅰ区出土遺物実測図 (1/3、1/4)	47
第33図	Ⅱ区遺構配置図 (1/150)	49
第34図	1～9号墓実測図 (1/60)	50
第35図	10～15号墓実測図 (1/60)	54
第36図	16～23号墓実測図 (1/60)	56
第37図	Ⅱ区出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4、1/6)	58
第38図	1号積石遺構実測図 (1/60)	61

I はじめに

1 調査に至る経緯

平成29年（2017）7月5日の九州北部豪雨では、朝倉市黒川設置の雨量計で9時間降水量774mmなど観測史上に残る集中豪雨を記録し、河川氾濫による洪水に加えて大量の土砂・流木で被害は拡大した。最も被害が集中した福岡県朝倉市、朝倉郡東峰村、大分県日田市で死者40名、行方不明者2名、全壊住宅336棟、半壊住宅1,096棟など、この地域に未曾有の自然災害をもたらした。8月8日、これに対して政府は「激甚災害に対処するための特別の財政援助等に関する法律」に基づき、上記に田川郡添田町を加えた4市町村を対象として激甚災害（局激）に指定し、国・県・市町村が連携して復旧事業を進めていく体制を整えた。



第1図 朝倉市の位置

文化財については、重要文化財「普門院本堂」、三連水車で知られる国指定史跡「堀川用水及び朝倉陽水車」（ともに朝倉市）を含む少なくとも26件の文化財が被災したことが7月16日付で報道されており、被災者への対応を優先しつつも、当初から関心が高かった。また、地元の甘木歴史資料館は7月13日の段階で文化財レスキュー活動を開始したことを公表しており、文化財が復旧作業の中で災害廃棄物と一緒に処分されることを危惧して、事前に相談するよう呼びかけ、被害を受けた文化財は同館で一時預かるとした。九州歴史資料館もこれと連携して被災文化財の仮収蔵・修復等を行っている。8月には、朝倉県土整備事務所、朝倉農林事務所、朝倉市教育委員会、福岡県教育委員会の4者で、埋蔵文化財の対応について協議を開始した。9月に「朝倉県土整備事務所災害事業センター」が開所、以後、朝倉市教育委員会、東峰村教育委員会、福岡県教育委員会との間で協議を継続している。

福岡県教育委員会としては、災害復旧事業に伴う埋蔵文化財発掘調査について、主に県事業を九州歴史資料館で担当している。それ以外にも、文化財発掘技師1名を朝倉市に派遣（令和3年3月31日まで）する等の支援を続けており、同様に県内市町村からも交代での職員派遣が行われている（令和2年12月まで）。

今回報告するのは、「大黒川災害関連緊急砂防事業」（竹林庵跡）、「馬場谷川災害関連緊急砂防事業」（黒川院跡）、「八坂谷川2砂防激甚災害対策特別緊急事業」（南淋寺）の3箇所を実施した事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2 調査の組織

発掘作業・整理作業・報告書作成にかかる関係者は以下の通りである。

	令和元年度	令和2年度
朝倉県土整備事務所		
災害事業センター		
センター長	喜多島礼和	北野 靖
災害砂防第二課長	内田正重	
災害砂防課長		内田正重
砂防第二係長	財津憲史	宮本拓郎
砂防第三係長		前原清孝
技術主査	上津原俊洋	上津原俊洋
主任技師	松崎寛次郎	下津浦陽一 嶋田 翔
九州歴史資料館		
館長	杉光 誠	吉田法稔
副館長	安永千里	安永千里
総務室長	中村満喜子	伊藤幸子
総務班長	畑山 智	畑山 智
事務主査	林田朋子	古賀知香
主任主事	古賀知香	田中佑弥
主事	具志堅靖知	具志堅靖知弥
文化財調査室長	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査室長補佐	伊崎俊秋	伊崎俊秋
文化財調査班長	森井啓次	森井啓次
参事補佐	小川泰樹（調査担当）	小川泰樹（整理・報告担当）
技術主査	岡田 諭（調査担当）	岡田 諭（整理・報告担当）

II 位置と環境

朝倉市は、福岡県のほぼ中央に位置する。市域の過半部は山地で、北西から東にかけて古処山地の600～900m級の山々が連なる。このため水量も豊富であり、これまでの江川ダム、寺内ダムに、今後は小石原川ダムも加えて、北部九州の治水と利水に大きな役割を果たしている。また、一方の市の南側には、市境にほぼ沿う形で、九州最大の河川である筑後川が西流し、山地から流れ出た川はここに注ぐ。筑後川の氾濫原と中小の河川の活動によって、市域の南西部には河岸段丘と扇状地が形成されており、ことに小石原川・佐田川・荷原川などによってできた朝倉扇状地は、福岡県内では規模の大きなものとして知られる。全体で両筑平野の一角を占め、人々の生活の場となっ

てきた。ここは、小倉方面から久留米・佐賀方面への道「秋月街道」と、博多・福岡方面から日田方面への道「日田街道」の交差する場所であり、交通の要衝ともいえる。

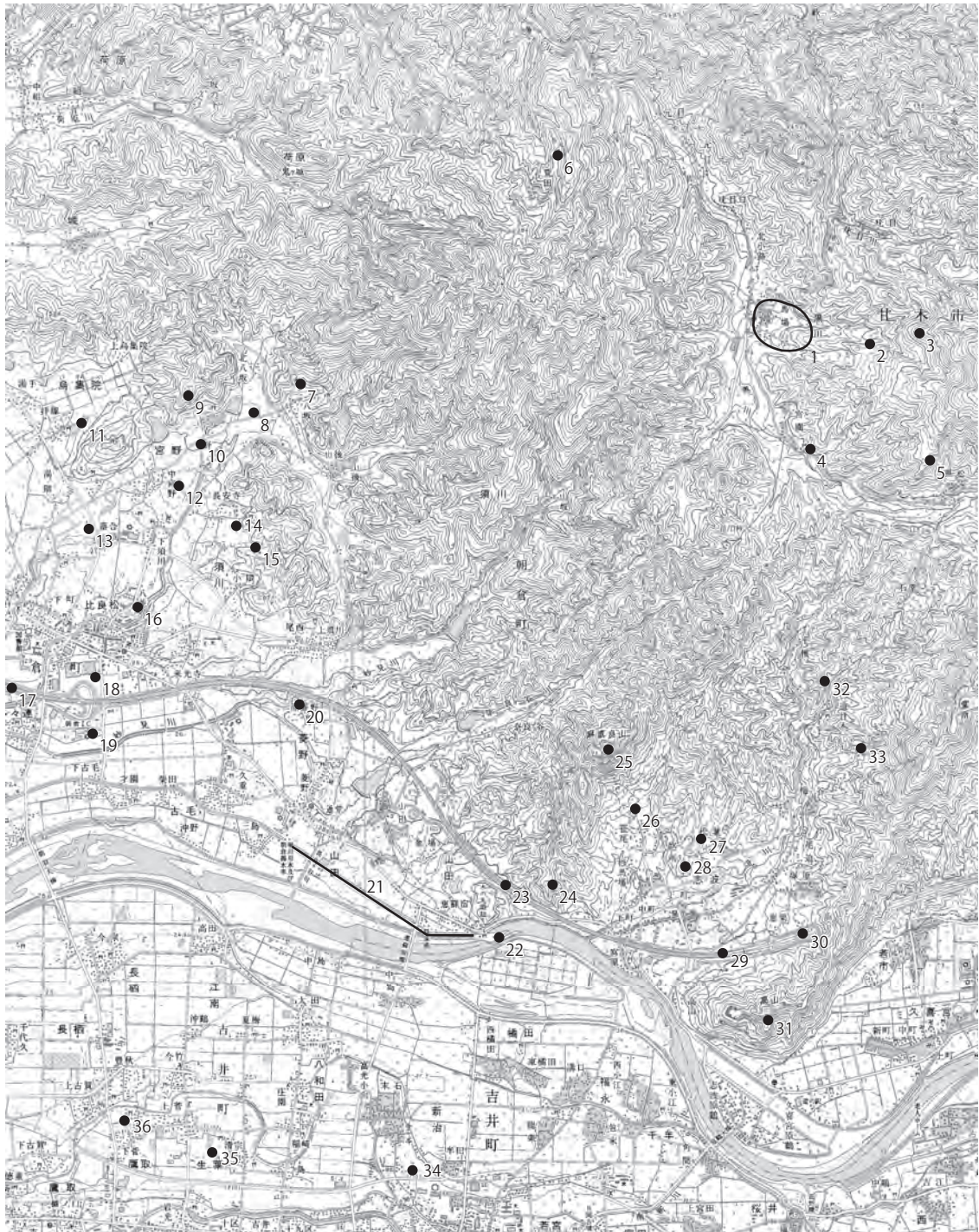
今回の報告で対象となる、中世以降のこの地域の歴史を語るには、まず秋月氏の存在が挙げられる。秋月氏はもと原田姓で、建仁3年（1203）以来秋月を本拠地として活動した国人領主である。元寇、南北朝期を経て、やがて少弐・大内・大友の三つ巴の動乱に巻き込まれていく。結果、戦国末期には筑前の中・南部と、筑後・豊前の一部を領有するに至ったが、豊臣秀吉の九州征伐で敗れ、日向財部に移封されてこの地を去った。秋月にあった城下町については、近世以来の黒田氏の秋月藩城下町と重複するものと考えられ、周縁部にごくわずかに秋月氏時代の名残が伝わる程度であり、実態はほぼ不明な状況である。しかしながら一方で、古処山城、荒平城をはじめ、秋月氏によるものとされる山城がこの地域一帯を始め県内各地に多く残されており、往時の勢力を実感できる。城館は福岡県教育委員会による詳細分布調査が実施され、一部は発掘調査も行われている。今後、徐々に解明されていくものと考えられる。

発掘調査の成果では、平安時代末から中世前半期までは才田遺跡（朝倉市入地）が突出している。溝で囲まれた屋敷地と考えられ、多数の輸入陶磁器を始めとする豊富な遺物が出土した。長湊荘の荘官クラスの居宅跡の可能性が指摘されている。現在の地名に残る大字長湊は、筑後川右岸にあたる。平安時代以来の長湊荘は、これよりはるかに広い範囲をさすものと思われるが、やはり筑後川とともに発展した地区であったようである。今回報告する南淋寺も、元は長湊にあったとされ、貞和2年（1346）、天台宗から曹洞宗に改宗する頃に、水害に悩まされることを理由に八坂山麓の現在地に移転している。中世後半期になると、黒川院跡が目を引き。彦山座主の居所と伝わり、朝倉市教育委員会による発掘調査で徐々に状況が解りつつあるが、建物の配置や性格等、実態には未だ不明な点も多い。輸入陶磁器の一級品を多く含む遺物が、現在でも山深いこの地から出土することは奇異にも感じられるが、それだけに一方で中世期の彦山の勢力と財力がしのばれる。

筑後川と地域との関わりは、この地に恵みをもたらすと同時に、洪水との戦いの歴史でもあった。筑後川の本格的な治水と利水は、近世の藩政時代になってからのことで、寛文年間の山田井堰の築造と堀川用水の掘削、さらに三連水車で馴染み深い揚水車の設置によって、水田面積は飛躍的に増大し、同時に現在に続く朝倉地域の景観を作り出した。

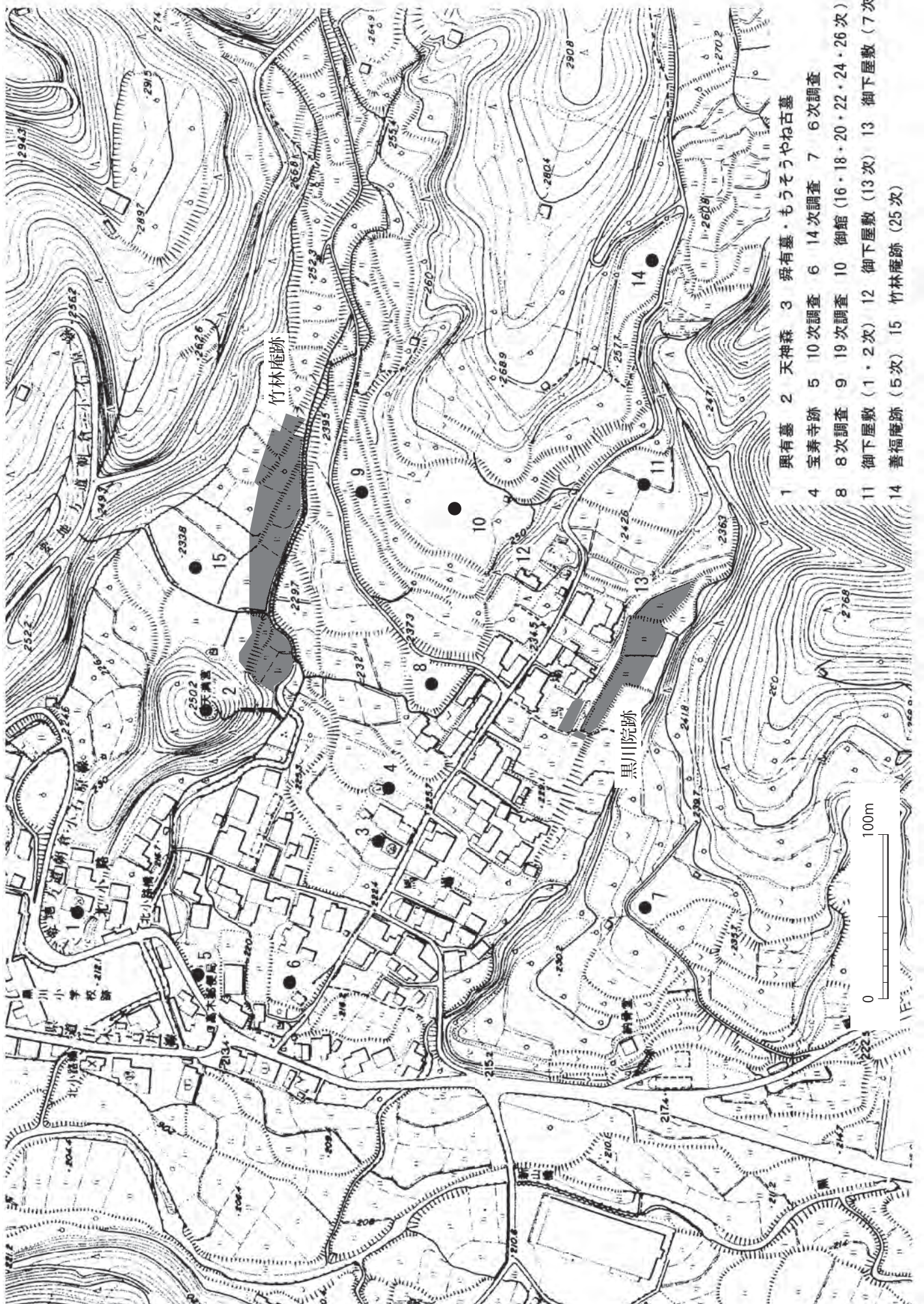
【参考文献】

- | | | |
|-----------|------|-----------------------------|
| 甘木市史編纂委員会 | 1982 | 『甘木市史 上巻』 |
| 朝倉町教育委員会 | 1986 | 『朝倉町史』 |
| 福岡県教育委員会 | 2014 | 『福岡県の中近世城館跡Ⅰ —筑前地域編Ⅰ—』 |
| 福岡県教育委員会 | 1998 | 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 —48—』 |
| 朝倉市教育委員会 | 2010 | 『黒川院Ⅰ』 |
| 朝倉市教育委員会 | 2012 | 『黒川院Ⅱ』 |
| 朝倉市教育委員会 | 2013 | 『黒川院Ⅲ』 |
| 朝倉市教育委員会 | 2015 | 『黒川院Ⅳ』 |
| 朝倉市教育委員会 | 2016 | 『黒川院Ⅴ』 |



- | | | | | |
|-------------|----------|---------|------------|----------|
| 1 黒川院跡 | 2 下宮 | 3 上宮 | 4 黒川高木神社 | 5 村上城 |
| 6 大行事社 | 7 南淋寺 | 8 杉馬場遺跡 | 9 平家城 | 10 垣添遺跡 |
| 11 烏集院奈良尾遺跡 | 12 上川原遺跡 | 13 矢林遺跡 | 14 長安寺廢寺 | 15 長安寺窯跡 |
| 16 八並遺跡 | 17 才田遺跡 | 18 榎町遺跡 | 19 石原遺跡 | 20 中妙見遺跡 |
| 21 堀川用水 | 22 山田井堰 | 23 大迫遺跡 | 24 本陣山城 | 25 麻氏良城 |
| 26 普門院 | 27 茶臼山城 | 28 前隈山城 | 29 志波桑ノ本遺跡 | 30 恵栗遺跡 |
| 31 高山城 | 32 志波城 | 33 烏山城 | 34 仁右衛門畑遺跡 | 35 生葉北遺跡 |
| 36 菅館跡 | | | | |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



- 1 奥有墓 2 天神森 3 舜有墓・もうそやね古墓
- 4 宝寿寺跡 5 10次調査 6 14次調査 7 6次調査
- 8 8次調査 9 19次調査 10 御館 (16・18・20・22・24・26次)
- 11 御下屋敷 (1・2次) 12 御下屋敷 (13次) 13 御下屋敷 (7次)
- 14 善福庵跡 (5次) 15 竹林庵跡 (25次)

第3図 調査区位置図 (1/3,000 朝倉市教育委員会『黒川院V』から転載、加筆改変)

Ⅲ 調査の内容

1. 竹林庵跡（黒川院関連遺跡群第28次調査）

1) 調査の経過

竹林庵跡は朝倉市黒川北小路地区に所在する。建武元（1334）年から始まる黒川院の関連遺跡であり、地名伝承から付された遺跡名である。朝倉市による黒川院跡関連遺跡群第14次調査で今回調査区の北側を調査したが、顕著な遺構遺物は発見されなかった。しかし、今回の大黒川災害緊急砂防事業の事業範囲に対する市の確認調査では青磁や土師器が散布が見られ、また、一部遺構の可能性のある個所や焼土が集中する箇所を確認したため、松尾川（事業名：大黒川）右岸が本調査対象となった。本調査範囲内は段状の水田が複数枚あり、各段を1～11区に分けて調査を実施した。

発掘作業は令和元年5月22日から7月31日まで実施し、作業日数は34日である。また、令和2年度中に整理作業・報告書作成を実施した。発掘作業の経過は下記の通りである。

- 5月 22日 発掘作業開始。2～4区重機掘削。
- 5月 23日 3・4区掘削終了。1区は2～4区の状況から掘削不要。5区トレンチ2か所。遺構遺物なし。7区中央トレンチ遺構なし。西側は試掘トレンチで土師器出土。面的調査必要と判断。6区は5区の状況と地形観察の結果掘削不要。
- 5月 24日 8区トレンチ3本遺構遺物なし。
- 5月 27日 9区は試掘結果と同様、黄褐色土で遺構様の輪郭、遺物を検出。
- 6月 5日 作業員投入。7区遺構検出。土師器、陶磁器出土、小穴数基検出。
- 6月 10日 造成土上面から小穴、南側の石垣裏込めから近世磁器片出土。
- 6月 11日 造成土から近世磁器片他瓦質土器等、炭化物出土。空撮（九歴岡寺技術主査）。
- 6月 13日 遺物包含層は造成土で石垣と一体のものであり、近世以降のものであると判断。
- 6月 14日 7区写真撮影、遺構平面実測。9区遺構検出。2～4区略図作成。
- 6月 17日 5区で3本トレンチ追加。5区石垣の裏込めから中世の遺物少量。造成土はない。石垣は田圃の土留め。7区岩盤まで重機で掘削。
- 6月 19日 7区岩盤上面検出のP8からビニール出土。
- 6月 24日 7区空撮（九歴岡寺技術主査）
- 6月 25日 7区下層遺構平面図作成。土層観察用畔除去。遺物回収。
- 7月 5日 7区北壁土層断面写真撮影、実測。9区遺構検出。
- 7月 11日 7区重機掘削。岩盤まで掘り下げる。中世の遺物が出土するも。ビニール袋出土の小穴と石垣の関係から全体的に新しい可能性大。9区重機掘削。9・11層上面まで。略図作成。
- 7月 12日 9区重機掘削。27・29層中から縄文土器片。他の時期の遺物は入らない。
- 7月 16日 9区重機掘削。暗赤褐色礫混じり土層上面まで。
- 7月 17日 9区重機掘削。暗褐色礫混じり土層下位で白色礫混じり粘質土層の地山検出。
- 7月 23日 9区遺構検出。
- 7月 25日 9区遺構検出。写真撮影。
- 7月 29日 9区断面実測。
- 7月 31日 9区遺物回収。発掘作業終了。



- 工事用地範囲
- 調査範囲
- 調査対象範囲

0 50m

第4図 調査範囲図 (1/1,000)

2) 遺構と遺物

工事用地内を流れる松尾川の露頭を観察すると、周辺の基本層序は上から表土、円礫層、岩盤層であることがわかる。表土は場所によっては非常に薄く、円礫層は河川の運搬作用で堆積したものと考えられる。岩盤は遺跡一帯の基盤を構成する結晶片岩である。従って、現況で円礫層や岩盤が露出する箇所、あるいは表土が薄い箇所は遺構遺物の残存の見込は薄い。

従って、本調査では各区において、地形観察や重機掘削等で下記の通り調査対象を絞り込んだ。

1区：2～4区の状況より判断、掘削不要。

2区：87.0m²、最大深度0.27mを掘削。耕作土0.3mの直下が岩盤、遺構なし。

3区：73.0m²、最大深度0.30mを掘削。耕作土0.3mの直下が岩盤、遺構なし。

4区：42.0m²、最大深度0.25mを掘削。耕作土0.3mの直下が岩盤、遺構なし。

5区：Tr.1は4.2m²、最大深度0.40mを掘削。層序は災害土砂0.15m、耕作土0.10m、地山（黄褐色砂礫）である。遺構なし。

Tr.2は2.8m²、最大深度0.7mを掘削。層序は災害土砂0.10m、耕作土0.10m、地山（黄褐色砂礫）である。遺構なし。

Tr.3は33.0m²、最大深度0.78mを掘削。石垣にかかるトレンチで、層序は耕作土、造成土、石垣裏込、地山である。

Tr.4は10.0m²、最大深度0.88mを掘削。石垣にかかるトレンチで、層序は耕作土、造成土、石垣裏込、地山である。

Tr.5は7.0m²、最大深度0.72mを掘削。5区と7区の境にある斜面にかかるトレンチで、層序は耕作土、造成土、地山である。

6区：5区より削平されているため、掘削不要。

7区：Tr.1は2.8m²、最大深度0.35mを掘削。層序は災害土砂0.18m、耕作土0.12m、地山（黄褐色砂礫）である。遺構無し。このトレンチより西側は市の確認調査で遺構らしきものや遺物包含層が確認されたので、面的調査に移行。Tr.2は次節で後述する。

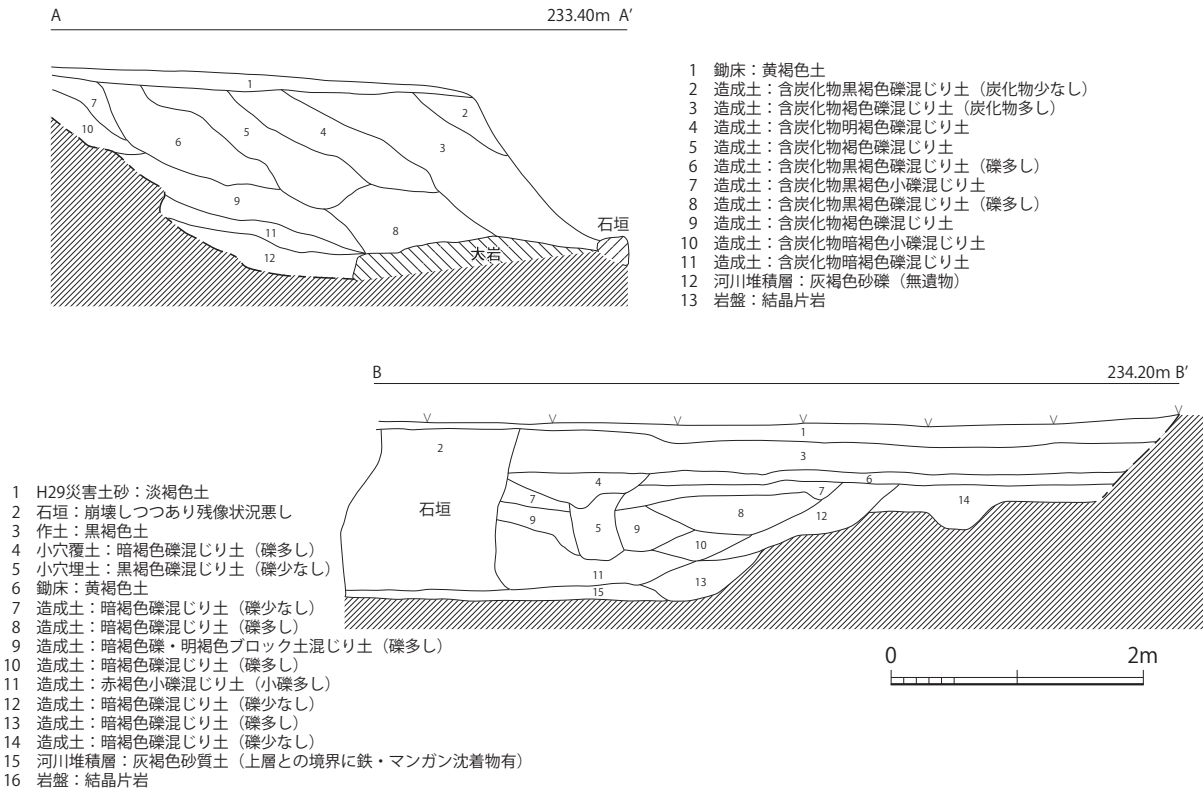
8区：Tr.1は5.6m²、最大深度1.45mを掘削。層序は災害土砂0.08m、耕作土0.13m、混礫黄褐色粘質土0.29m、混礫黄褐色粘質土（上層より暗い）0.35m、混礫黄褐色粘質土（上層より暗い）0.45m、混礫暗褐色粘質土である。粘質土の堆積が続くため、遺構なし。

Tr.2は8.4m²、最大深度2.00mを掘削。層序は災害土砂0.10m、混礫黄褐色粘質土1.25m、黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混土0.15m、暗褐色粘質土0.45m、黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混土0.50mである。粘質土の堆積が続くため、遺構なし。

Tr.3は5.6m²、最大深度1.30mを掘削。層序は災害土砂0.10m、耕作土0.10m、混礫暗褐色粘質土0.30m、混礫黄褐色粘質土0.80mである。粘質土の堆積が続くため、遺構なし。

9区：黄褐色土上面で遺構様の輪郭と遺物を検出、面的調査に移行。

10・11区：9区より急崖になっており、削られた様子、掘削不要。



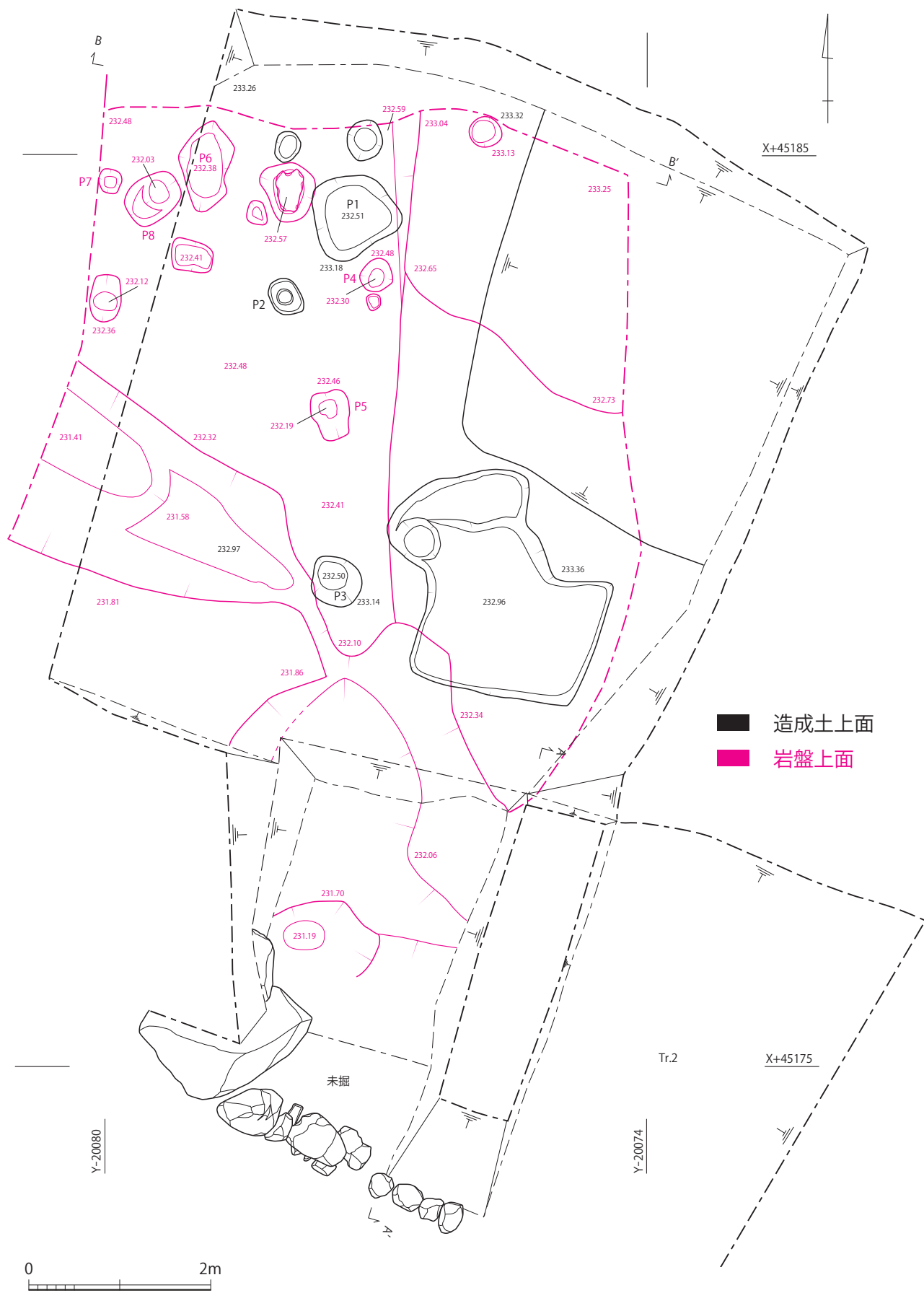
第5図 7区土層断面実測図（1/60）

7区

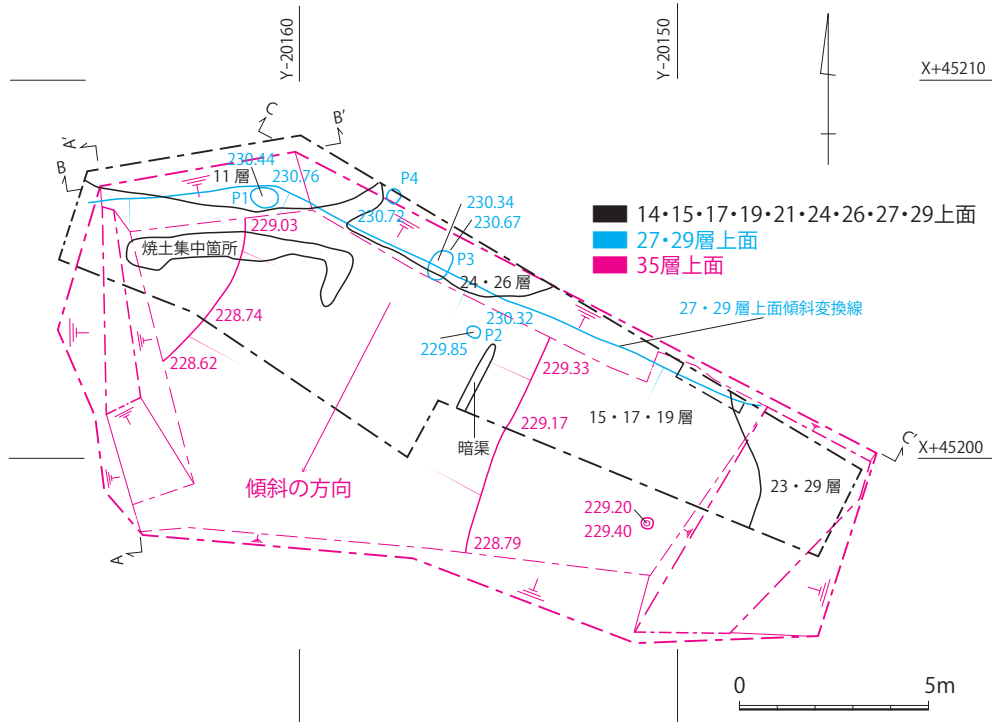
市の確認調査で現状の石垣の裏側から遺構様の輪郭や遺物包含層を検出したため、面的調査に移行した。調査面積は67m²、試掘調査結果を基に災害土砂・耕作土・床土を除去した面で遺構検出を図った。検出した小穴や南側の石垣裏込め土から近世磁器片が出土したことや、土層断面の観察から石垣と一体のもの、すなわち造成土であることが判明した。そこで、造成土上面での記録作業を終えた後、重機を用いて下層の岩盤まで掘り下げ、遺構検出を図った。岩盤は東側が一段高くなり、西側が低くなり、ほぼ平坦である。この南側は川に向かって傾斜し、一部、西側に伸びる溝状の地形がある。平坦面には小穴が散見されたが、この内P4、P5、P8、他1基を含め長方形の配置をとるように見られるが、P8からはビニール袋が出土したため、現代に掘削されたと考えられる。P8は現在の石垣の下位に当たるため、石垣構築以前に何らかの構築物があったかも知れない。

全体を通じて、中世の遺物の出土が多いものの、岩盤に掘られた小穴からビニール袋が出土したため、石垣の構築や造成は現代のものであると考えられる。なお、地元の方からの聞き取りでも、平成29年の豪雨災害ほどではない規模の水害は頻繁にあり、その度に石垣を修理していたとのことである。

以上の調査結果から、7区においては黒川院が存続していた時期の遺構は確認されなかったが、造成土に中世の遺物が包含されることから、周辺に中世の遺構が存在していた可能性は高い。



第6图 7区平面实测图 (1/60)



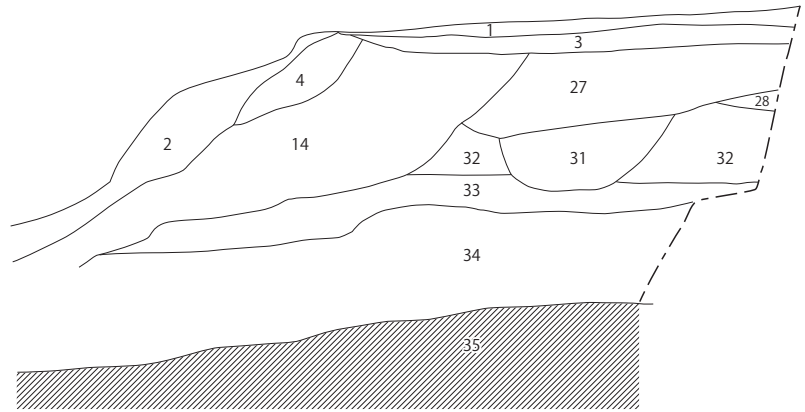
第7図 9区平面実測図 (1/200)

9区

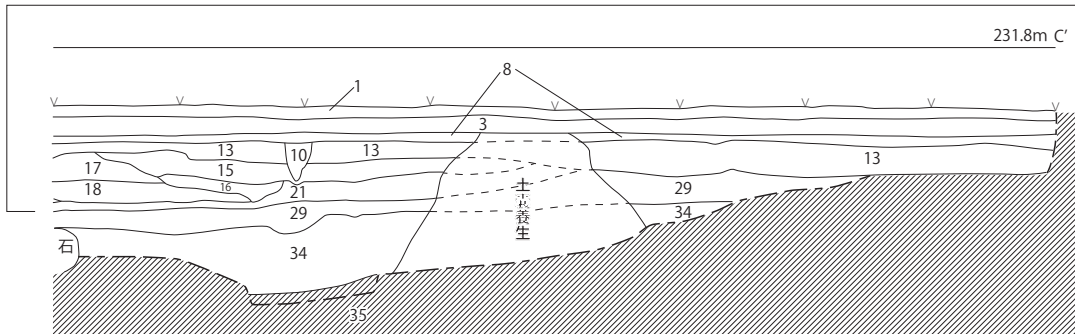
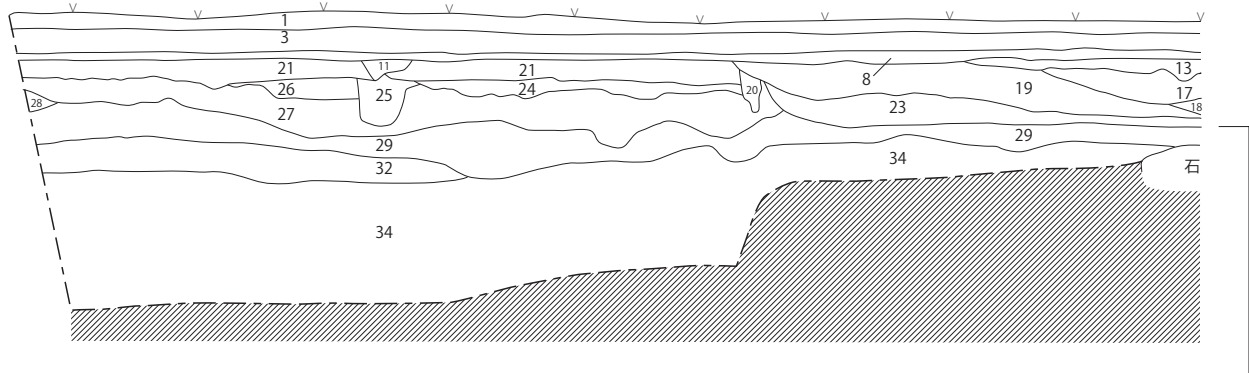
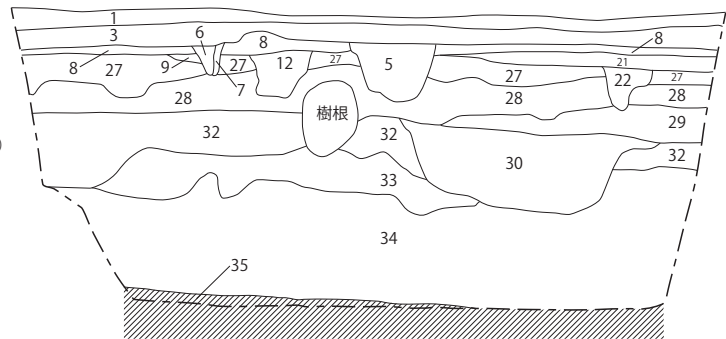
9区は天満神社の南側の平坦地の調査区で面積は175m²である。市の試掘結果から黄灰褐色土上面で焼土の集中箇所を検出したため面的に広げることになった。

そこで、重機により災害土砂（第5図第1層、以下第5図の層番号）及び水田の作土（3）、鋤床層（8・9）、旧作土（13・21）を掘り下げ、旧旧作土（23・24・26）及び試掘で検出した黄灰褐色土に相当する造成土（14・15・17・19）、礫混じりの堆積層（27・29）が表れた面で第一段階の遺構検出を図った。試掘で確認した焼土の集中箇所を検出した他は、明瞭な遺構はなく、また、礫混じりの堆積層から縄文土器片が出土したため、この検出面の下位層で第二段階の検出を図った。重機により造成土と旧旧作土を掘り下げた所、堆積層上面は調査区北端のみ平坦で、その南側は川に向かって傾斜しており、遺構が分布するような地形ではなかったため、簡易な記録の後、この堆積層（27～34）を重機で安定した黄褐色土層（35）の上面まで掘り下げた。35層上面も川に向かって傾斜し、また、調査区中央が窪むような地形であったため、遺構が分布するような地形ではない。なお、調査区東端で中世以降の遺物を含む小穴を1基検出したが、上位の堆積が薄く、平面的な位置は現代の石垣の直下であり、古い遺構の可能性は低い。

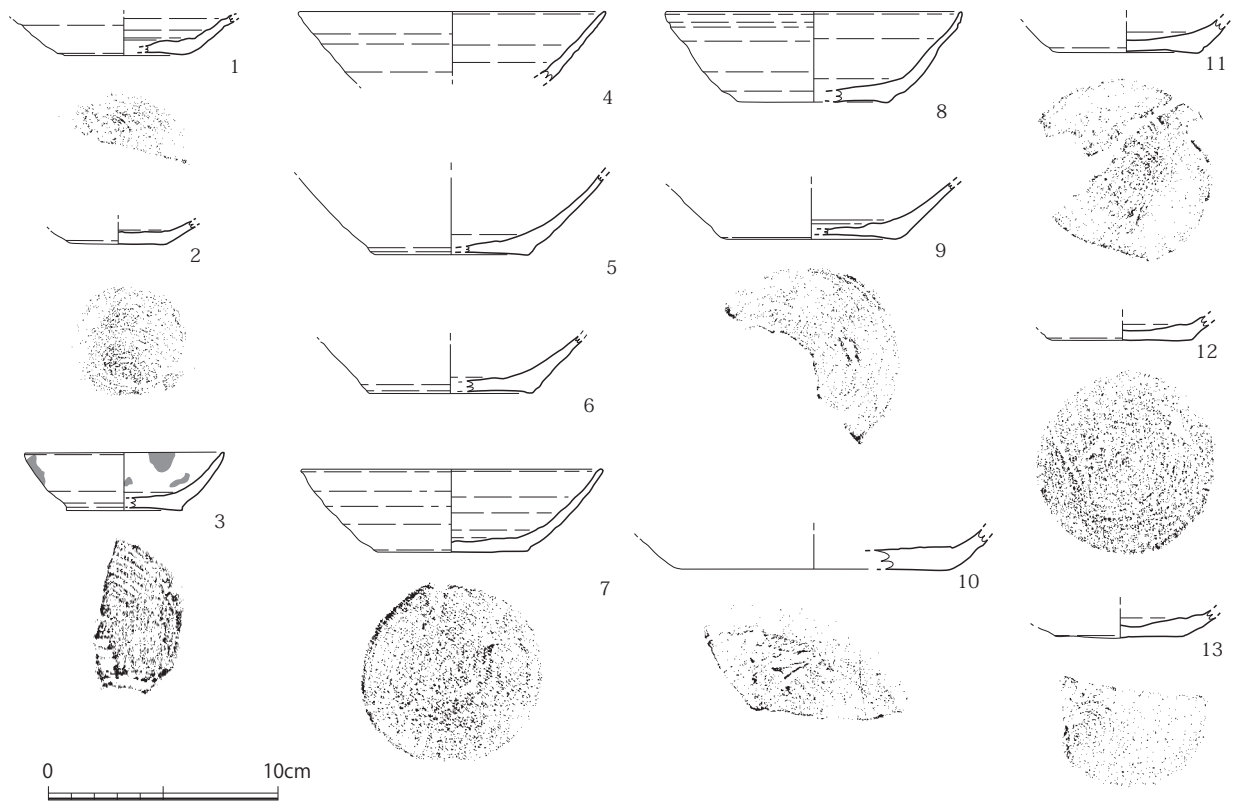
以上の結果、黒川院段階の遺構はないどころか、この場所で耕作が始まる以前は傾斜地で、級化が進んでいない礫混じりの層が堆積するような場所であったことが分かった。しかし、この堆積層に縄文晩期の土器片が含まれることや堆積層より上位層から中世の遺物が出土することは、周辺に該期の遺構が展開している可能性を示唆することができる。



- 1 H29災害土砂：淡灰褐色砂質土
- 2 表土：暗黒褐色土
- 3 作土：黒灰色土
- 4 竹根攪乱：黄灰褐色土
- 5 土坑：黄灰褐色土
- 6 小穴：暗灰色土
- 7 小穴：黄灰褐色土
- 8 鋤床：明黄褐色土
- 9 鋤床：明黄褐色土
- 10 小穴：暗灰色小礫混じり土
- 11 小穴：含焼土灰褐色土
- 12 小穴：黄褐色拳大～人頭大礫混じり土
- 13 旧作土：暗褐色小礫混じり土
- 14 造成土：黄褐色小礫混じり土
- 15 造成土：黄褐色小礫混じり土
- 16 造成土：含炭化物暗褐色礫混じり土（旧作土由来）
- 17 造成土：含炭化物暗黄褐色礫混じり土（旧作土由来）
- 18 造成土：含炭化物暗黄褐色礫混じり土（17より黄色強い）
- 19 造成土：黄褐色土（14に似る）
- 20 小穴：暗褐色土（19のブロック土が落ち込む）
- 21 旧作土：含炭化物暗褐色小礫混じり土（23より明るい）
- 22 小穴：黄褐色土（27のブロック土含む）
- 23 旧旧作土：含炭化物暗褐色小礫混じり土
- 24 旧旧作土：含炭化物暗赤褐色小礫混じり土（21の下部、21より暗い）
- 25 小穴：含炭化物暗褐色礫混じり土
- 26 旧旧作土？：含炭化物暗褐色小礫混じり土（21層下部、21層より明るい）
- 27 堆積層：含炭化物・縄文～中世遺物黄褐色小礫混じり土
- 28 堆積層：淡褐色礫混じり粘質土
- 29 堆積層：含縄文土器淡赤褐色礫混じり粘質土
- 30 風倒木痕？：淡赤褐色礫混じり粘質土
- 31 風倒木痕？：淡赤褐色礫混じり粘質土（下部に礫と褐色土が混じる）
- 32 堆積層：暗赤褐色礫混じり粘質土
- 33 堆積層：暗赤褐色礫混じり粘質土（32より暗い）
- 34 堆積層：暗赤褐色小～人頭大礫混じり粘質土（33より明るい）
- 35 地山：黄褐色礫混じり土



第8図 9区土層断面実測図 (1/60)



第9図 出土遺物実測図① (1/3)

出土遺物

中世土師器 (第6図)

1～3は皿である。1は7区石垣裏込めから出土した。残存径8.8cm、欠損部分は僅かであると判断し、皿であるとした。器面調整は内外面共にヨコナデ、底部には回転糸切痕が残る。色調は黄橙褐色を呈する。2は7区P3から出土した。残存径は5.4cmである。部分は僅かであると判断し、皿であるとした。器面調整は外面が磨滅しており不明、内面はナデ、底部に回転糸切痕が残る。色調は淡橙褐色を呈する。3は9区旧作土下位焼土焼土集中個所から出土した。復元口径8.0cmである。口縁部内面及び外面に油煙が付着するため、灯明皿であろう。器面調整は外面が底部付近ヨコナデ、内面はナデ、底部に回転糸切痕が残る。色調は灰黄褐色を呈する。

4～10は坏である。4～9は7区造成土から出土した。4は復元口径12.2cmである。調整は内外面共にヨコナデである。色調は白黄褐色～暗灰色を呈する。5は残存径は12.2cmである。器面調整は内外面共に磨滅しており不明である。色調は淡橙褐色を呈する。6は残存径10.4cm、である。器面調整は外面ヨコナデで、内面は磨滅しており不明である。色調は淡橙褐色を呈する。7は復元口径12.0cmである。器面調整は外面口縁部がヨコナデ、体部は磨滅しており不明である。内面は磨滅しており不明、底部は回転糸切痕が残るが磨滅しており不明瞭である。色調は灰黄褐色～灰黒色を呈する。8は復元口径11.8cmである。器面調整は内外面磨滅しており不明、底部はナデか。色調は灰黄褐色を呈する。9は残存径11.2cmである。器面調整は底部内面がヨコナデで他は磨滅しており不明、底部外面には回転糸切痕が残る。色調は白黄褐色を呈する。10は9区堆積層上面P2から出土した。残存径は13.8cmである。器面調整は内外面共にがヨコナデ、底部は回転糸切痕が残る。色調は白黄茶色を呈する。

11～13は7区造成土から出土した坏または皿である。11は残存径が8.0cmである。器面調整は内外面共に磨滅しており不明である。底部は回転糸切痕が残るが磨滅しており不明瞭である。色調は淡橙褐色を呈する。12は残存径は6.6cmである。器面調整は外面が磨滅しており不明、内面はヨコナデまたはナデ、底部外面は回転糸切痕が残る。色調灰黄褐色を呈する。13は残存径が14.6cmである。器面調整は内外面共に磨滅しており不明、底部には回転糸切痕が残る。色調は淡橙褐色である。

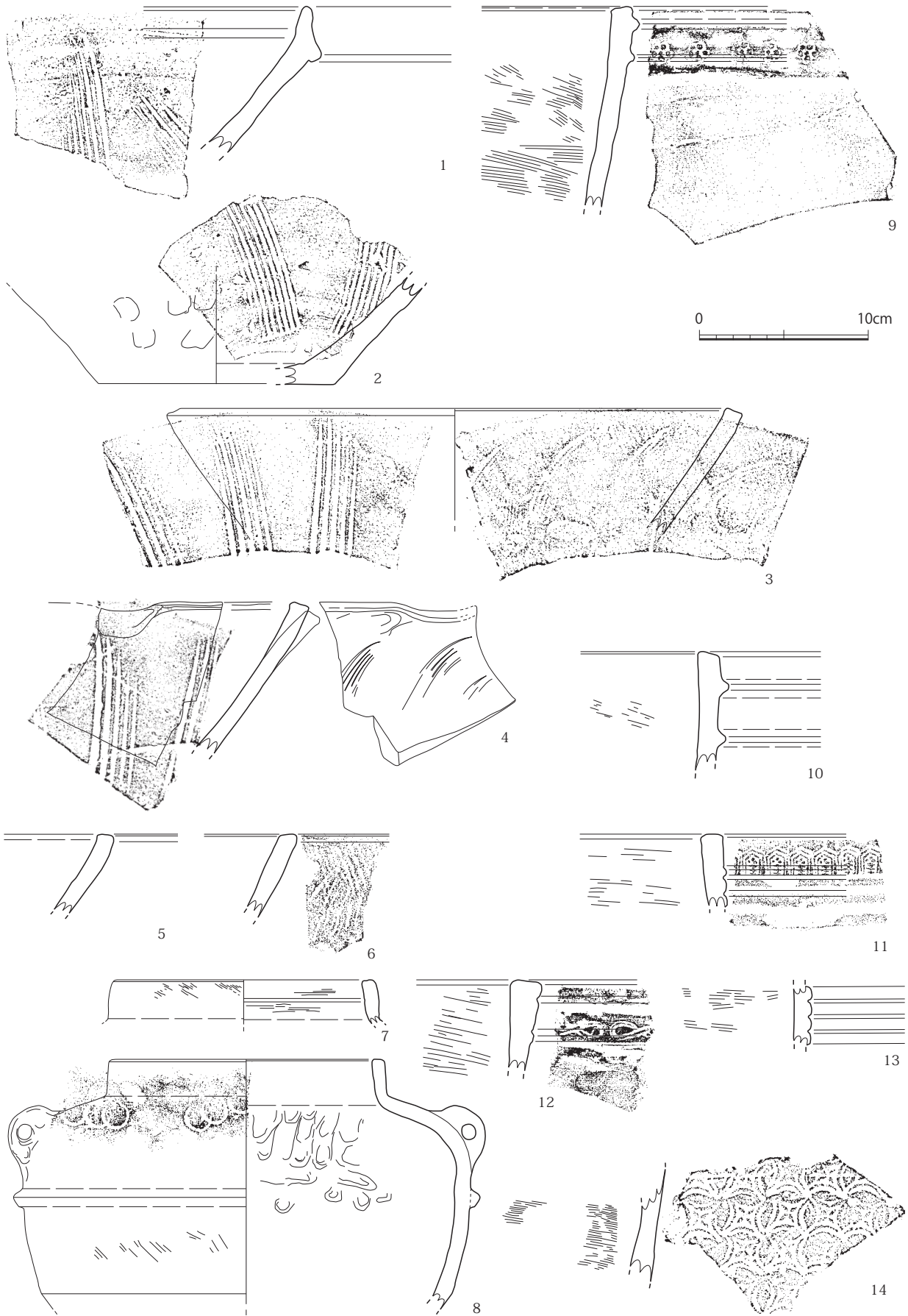
中世陶器・瓦質土器（第7図）

1・2は備前焼播鉢である。1は7区造成土から出土した。口縁外面は肥厚し、端部は上方へ伸びる。器面調整は外面が口縁部はヨコナデ、胴部はナデ、内面が7本1単位の櫛描きが施される。色調は外面が暗黄褐色・黒褐色・灰紫・黒色、内面は暗灰色から黒褐色を呈する。胎土は砂粒多く山土である。乗岡編年中世4～5a期（15世紀初葉～後葉）に該当する。2は9区排土から出土した。内面に8本1単位の櫛描きが施される。2とは別個体であるが、胎土の特徴は似る。

3～6は7区から出土した瓦質土器播鉢である。3・4は造成土から出土した。3は端部は平坦である。器面調整は外面がナデだが、櫛目が残る。内面は5本1単位の櫛目が施される。器面の炭素が落ちたため色調は橙褐色を呈する。口縁部の断面形状から14世紀前葉頃のものと考えられる。4と酷似する。4は口縁部断面は平坦である。器面調整は外面が磨滅しており不明であるが櫛目が若干残る。内面は5本1単位の櫛目が施される。3と酷似する。器面の炭素が落ちているため橙褐色を呈する。5はP1から出土した。口縁端部は平坦で僅かに内湾する。器面調整は内外面共に磨滅しており不明である。色調は器面の炭素が落ちたため淡茶褐色を呈する。6はP6から出土した。口縁は直線的に伸び、口縁端部は平坦である。器面調整は外面が斜方向のハケメ、内面はナデであろうか。色調は器面の炭素が落ちたため淡茶褐色を呈する。

7・8は7区から出土した瓦質土器釜である。7は石垣裏込めから出土した。復元口径14cm、口縁部はやや内径気味に直立し、端部は平坦である。器面調整は外面がハケメ後ヨコナデ、内面がヨコナデである。色調は灰黒色を呈する。8と同一個体か。8は調査区北壁から出土した。復元口径13.9cm、残存器高13.6cm。口縁部はほぼ直立し、端部は平坦だがやや丸みを帯びる。肩部には耳が付き、口縁と耳の間に竹管文が押捺される。耳の直下には断面三角形の低い罫が巡り、胴部下半との境に稜が付く。器面調整は口縁部内外面共にヨコナデ、胴部罫下は斜方向のハケメである。内面の肩部から胴部上半は指頭圧痕が残る。色調は灰色から灰黒色を呈する。7と同一個体か。

9～14は瓦質土器深鉢、いわゆる奈良火鉢であろうか。9・14は7区造成土から、10・11は石垣裏込めから、13は造成土上面検出時、12は9区排土から出土した。9は口縁端部が平坦で、口縁部外面に2条の凸帯を巡らせ、その間に5弁の花文を押捺する。器面調整は外面がナデ、内面は口縁部がナデ、体部が横方向のハケメである。10は外面に2条の突帯がある。器面調整は外面ヨコナデ、内面がハケメ後ナデである。色調は暗灰黄色を呈する。11は口縁端部は平坦だがやや丸みを帯びる。口縁部外面に3条の沈線が施され、その上に剣頭文が押捺される。器面調整は外面がヨコナデ、内面はハケメだが磨滅しており不明瞭である。色調は黒色を呈する。12は口縁端部は平坦だが、やや窪む。対面に2条の沈線で文様帯を作り、「∞」字状の文様が押捺される。器面調整は外面が磨滅しており不明瞭、内面は横方向のハケメである。13は口縁部付近の破片で



第 10 図 出土遺物実測図② (1/3)

あろうか。器厚は 1.0cm である。外面に 3 条の沈線が巡る。器面調整は外面がハケメ後ナデである。色調は灰黒色を呈する。14 は胴部の破片である。外面に七宝文が押捺される。器面調整は内面が横方向のハケメである。色調は灰黒色を呈する。

貿易陶磁器（第 8 図）

1～3 は白磁である。1 は 9 区旧旧作土層から出土した碗の口縁部である。口縁部外面は玉縁状に肥厚する。12c 前葉のものであろうか。2 は 7 区 P1 から出土した皿である。畳付幅は 0.8cm、平坦に削り、露胎する。色調は白灰色、釉調は透明である。12 世紀代皿 IIIa 類である。3 は 7 区造成土から出土した小皿である。内面及び外面は黄白色の釉が施され、畳付は等間隔に推定四箇所を削り取る。明代（16 世紀）のものである。

4～7 は龍泉窯青磁碗である。4・5 は 7 区から出土した。4 は造成土から出土した。口縁は内湾気味に伸びる。口縁部外面には雷文帯があり、その下には弧線が線刻され、内面は口縁部から底部付近まで弧線が線刻される。釉調は暗灰緑色を呈する。元末明初（14 世紀中葉～後葉）のものであろう。5 は 2 トレンチ造成土から出土した。見込には界線内に菊花文がある。見込から外面畳付まで暗灰緑色の釉が施され、高台内面は輪状に釉を剥ぐ。外面には鎬蓮弁の一部が若干残る。高台内面以外に施釉する特徴から 15 世紀後半のものであろう。6・7 は 9 区から出土した。6 は旧旧作土層から出土した。口縁はやや外反し端部は肥厚する。色調は灰緑色を呈し、内外面に貫入が見られる。7 は西壁黄褐色土（造成土）から出土した。口縁部外面に 2 条線の間に波状の文様が描かれる。元末明初～15 世紀代のものであろう。

8・9 は 7 区から出土した青花である。8 は調査区北壁から出土した皿である。見込の文様は小破片のため不詳である。高台内は二重の圈線の中に「□・年・造」の文字が確認できる。「□」は ㄱ が崩れたようにも見える。「年」は字画が省略されている。高台内面の銘は「洪武年造」か。小野分類 E 群 XI 類、16 世紀代の景德鎮産であらう。9 は排土から出土した碗である。体部から口縁部にかけて内湾気味に伸び、端部は丸い。口縁端部付近に外面が 2 条、内面が 1 条の界線が巡る。色調は灰白色、釉調は透明である。明末 16 世紀の景德鎮系のものであろう。

10 は褐釉陶器小壺である。9 区旧旧作土層から出土した。口縁部から胴部上半まで残存する。口縁は直線的かつ内傾気味に伸びる。肩部には円形の浮文がはがれている箇所がある。口縁端部は釉剥ぎ、肩部には 2 条の界線があり、線より上に唐草文、線の下は細長い弧状の文様が描かれる。色調は胎土が白黄色、釉調は緑黄茶色を呈する。南宋～元代（13～14 世紀）の型成形のものである。

近世磁器（第 8 図）

11・12 は 9 区から出土した近世磁器である。11 は排土から出土した。高台は露胎し、他は施釉される。内面の文様は見込に円が描かれ、口縁に向かって細線と太線が波状に伸びる。17 世紀中葉～後葉の有田焼である。12 は表採品である。畳付が露胎する他は施釉される。外面には内容は不詳だが文様が描かれ、底部と体部の境に 1 条の線が巡る。肥前系 18 世紀代江戸後期のものである。



第11図 出土遺物実測図③ (1~17は1/3、18~24は2/3、25・26は1/2)

その他の土器

13 は 9 区旧旧作土層から出土した縄文土器深鉢である。外面の口縁直下に刻目凸帯を巡らし、外面に煤が付着する。器面調整は外面が横方向の貝殻状痕、内面が磨滅しており不明である。色調は焦げ茶色を呈する。夜臼 I 式か。14 は 9 区堆積層上面 P3 から出土した土師器である。口縁端部は内側に肥厚するが、割れ口の形状から体部に向かって湾曲しながら続くと考えられる。色調は白黄茶色を呈する。中世の土師器ではないだろう。15 は 7 区造成土上面遺構検出時に出土した器種不明土器である。器面調整は外面がハケメとナデ、内面が横方向のハケメ後ナデ、底部はハケメである。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に雲母を含む。

瓦・土製品 (第 8 図)

16 は 5 区で表採された軒丸瓦瓦当である。瓦当の中央部が欠損する。内区に朱文は 2 点 1 組が残存するが、その隣は間隔が空いている。調整は周縁部がナデ、凹面凸面共に工具によるナデか。色調は灰黄褐色～黒色を呈し、焼成は良好である。17 は 7 区排土から出土した。土師器の底部を打ち欠いて作った土製面子か。色調は淡橙褐色を呈する。

石器 (第 8 図)

打製石器 (18～24) は 9 区から、磨製石器 (25) は 7 区造成土から出土した。

18～20 は打製石鏃である。18 は排土から出土した。石材は腰岳系黒曜石である。先端約 1/3 が欠けている。基部は短く、抉りは浅い。全体的な形は幅より長さが長い形状に復元できる。残存長 1.7cm、幅 1.3cm、厚さ 0.3cm、重量 0.5g である。19 は 9 区 8 層 (暗褐色土 7 層の東隣) から出土した。石材は安山岩である。先端と基部の一部を欠く。残存長 2.7cm、残存幅 1.7cm、厚さ 0.4cm、重量 1.2 g である。20 は排土から出土した。石材は安山岩である。先端は鋭利ではなく基部も短い。全長 2.5cm、全幅 1.7cm、厚さ 0.3cm、重量 1.3g である。

21 は排土から出土した使用痕剥片である。石材はチャートである。表面側縁に細かい使用痕があり、裏面には使用痕より大きな剥離があり、加工痕の可能性はある。バルブの発達は弱い。全長 3.2cm、全幅 2.5cm、厚さ 1.5cm、重量 6.9g である。

22・23 は剥片である。22 は 8 層から出土した。石材は腰岳系黒曜石である。打点は無いが、バルブはやや発達している。自然面が打面側と側面側にあるので、ファーストフレイクに近いものと思われる。23 は 8 層から出土した。石材は珪質頁岩か。全長 2.9cm、全幅 1.9cm、厚さ 0.4cm、重量 1.8g である。

24 は 8 層から出土した石核である。石材は発泡及び斑晶が多いため腰岳系黒曜石であろう。打面転移、作業面転移を繰り返している。全長 2.2cm、全幅 2.3cm、厚さ 2.1cm、重量 10.0g である。

25 は結晶片岩の磨製石斧である。基部の両側縁に小さな抉りがあり、全体の約半分に刃部を形成するために研磨されている。重量 40.6g である。

金属器 (第 8 図)

26 は 7 区造成土から出土した鉄片である。高熱を受け、表面が爛れる。裏面には若干錆が見られる。穿孔のような箇所が 2 箇所見られる。

3) 小結

今回の調査では地名伝承にある竹林庵に関連する遺構は確認されなかったため、出土遺物から竹林庵跡について考えていく。

まず、9区においては鋤床や最初の作土から縄文時代晩期の土器や石器が出土した他、下位の堆積層からも土器の小片が出土している。石器については、石鏃の抉りが浅いことや、石核の打面転移が認められること、石材の黒曜石の質が悪いことなどから、縄文時代晩期のものとみられる。また、松尾川左岸の工事による切土斜面を観察すると、黒曜石の破片を若干確認したため、松尾川左岸側でも縄文時代の遺跡がある可能性がある。

次に、古代から中世初期にかけての遺物は7区P1と9区旧旧作土から出土した12世紀代の白磁や13世紀～14世紀代（南宋～元代）の褐釉小壺がある。黒川院は建武元（1334）年以降に彦山座主の御所が構えられたことに始まるため、これらの遺物は黒川院以前に白磁を所有する階層が当地に存在した可能性を示すものである。

出土遺物の多くは中世のものである。土師器皿や坏の他、7区では14世紀代の瓦質土器や龍泉窯青磁、15世紀代の備前焼や龍泉窯青磁、16世紀代の白磁や青花が出土している。9区では14～16世紀代の龍泉窯青磁や備前焼、瓦質土器、青花が出土している。輸入磁器が目立つことや瓦質土器釜、備前焼や瓦質土器の播鉢など調理具があることから、ある程度高い階層の生活空間の存在が想起される。7区から出土した土器は破片がやや大きく、細片化や磨滅が進み稜が取れたものなどは少ない。従って、原位置からの移動距離は短いと考えれば、1～5区の耕地造成による切土が7区の造成に使われ、この過程で遺物が混入したのではないだろうか。9区も最初の作土層上位の造成土には近隣の切土に遺物が混入したものが用いられたと考えられる。竹林庵の中心は1～5区か調査区外にあったのであろう。

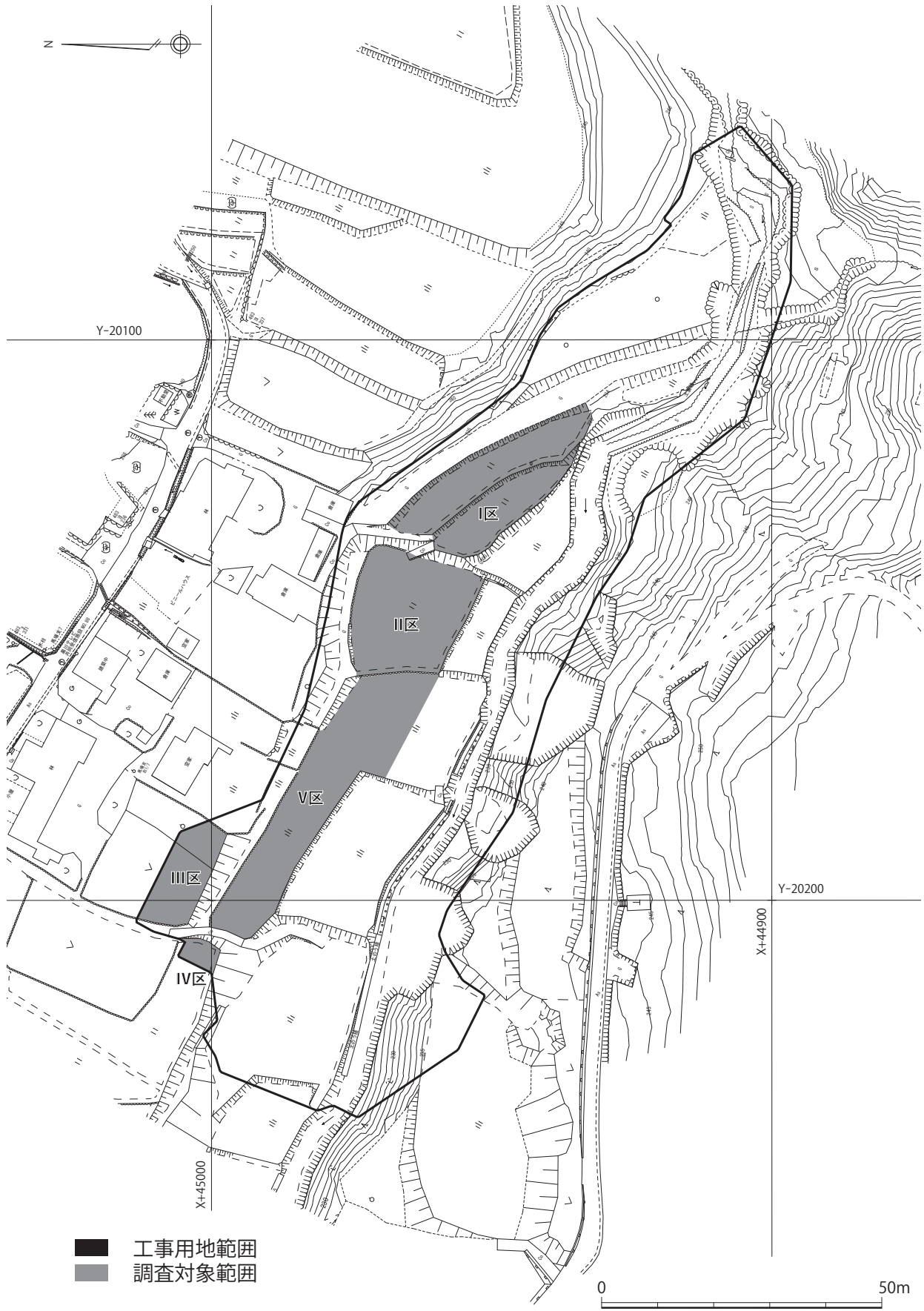
江戸時代にはいと、黒田家入府後に黒川の座主院が破却され、座主は黒川を退去し、彦山山内に移居した。同時代の遺物は9区の排土中出土や表採資料に17世紀中葉～後葉の有田焼や18世紀代の肥前系陶器が僅かに見られるのみで、人間活動は中世より低調であったと考えられる。

以上今回の調査成果をまとめると、縄文晩期から人間活動の痕跡が確認できること、黒川院成立以前にある程度の階層が当地に存在していた可能性があること、地名伝承の竹林庵に関係する遺構は発見されなかったが、黒川院の存続時期に並行する遺物が出土したことなどが挙げられる。

なお、陶磁器の観察については当館の遠藤啓介技術主査に教示を受けた。打製石器については梶佐古幸謙主任技師が実測し、観察について教示を受けた。

【引用参考文献】

- 甘木歴史資料館 2015 甘木歴史資料館だより『温故』第55号
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 乗岡実 2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』
- 森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁の編年」『貿易陶磁研究』No.2
- 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 山崎純男 1989「九州の凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』4 小学館



第 12 図 調査範囲図 (1/1,000)

2. 黒川院跡（黒川院関連遺跡群第29次調査）

1) 調査の経過

今回の調査地点は、筑後川水系の一級河川佐田川の一支流である北小路川の右岸にあたり、流れによって開析された谷の小規模な平地と、一部上位の台地上に立地する。朝倉市教育委員会が実施した試掘調査と、表土掘削に先立って行った確認調査の結果から、事業範囲のうち朝倉市黒川2202、2214-2、2216、2268-1の範囲を調査対象地とした。調査面積は2,600㎡である。

周辺は、南北朝期から江戸時代初期まで彦山座主が代々居住した「黒川院」と伝わる場所であり、朝倉市教育委員会による27次におよぶ発掘調査によって、具体的な様相が徐々に明らかになりつつある。特に黒川院の中核と考えられている御館（オタテ）地区とその南側の御下屋敷（オシタンヤシキ）地区では、数時期の建物跡等と多量の遺物が出土している。今回の調査地点は、御下屋敷地区と接するため、これと関連した遺構と遺物の発見が期待された。

平成29年の九州北部豪雨の際には、谷に沿って大量の泥水と木がここに流れ込んだという。調



第13図 I・II区遺構配置図(1/300)

査開始の時点で、現地には流木が残された状況であった。事業の緊急度が高いことから、調査は、施工工事と一部重複しながら、調整のうえ順次実施することとなった。調査範囲が東西に長いため、現在の地境と作業工程によってⅠ～Ⅴ区に分け、令和元年（2019）6月13日に東側のⅠ区から重機による表土作業を開始し、7月4日からは作業員による手作業での遺構検出、掘削作業を進めていった。途中、Ⅲ・Ⅳ区にあたる堤体部分の工事を急ぐとのことであったため、これには岡田が対応し、8月7日からは2箇所に分れて作業を継続した。調査終盤の10月10日にドローンによる上空からの全体写真撮影を行い、10月18日にすべての作業を終了した。

2) 遺構と遺物

Ⅰ区

Ⅰ区は、今回の調査区中で最も東側に位置する。北東側に接する台地上は「オシタンヤシキ（御下屋敷）」の地名が残り、これまでの朝倉市教育委員会の実施してきた調査結果からも、黒川院の中枢の一角と考えられている。

今回の調査範囲のうちⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区部分は、段丘上に形成された小規模な平地にあたり、川の傾斜に合わせて東側から西側に向かって順次低くなっている。現地はこれまで水田として利用されてきた。Ⅰ・Ⅱ区の基本層序はほぼ同様で、上層から、耕作土、床土が各15～20cm程の厚さに存在し、その下層に炭化物粒・遺物を若干含む灰褐色土層があり、遺構面とした黄褐色土層に達する。しかしながら小河川の氾濫原でもあることから、特に川のある南側では必ずしも様相は一樣ではなかった。

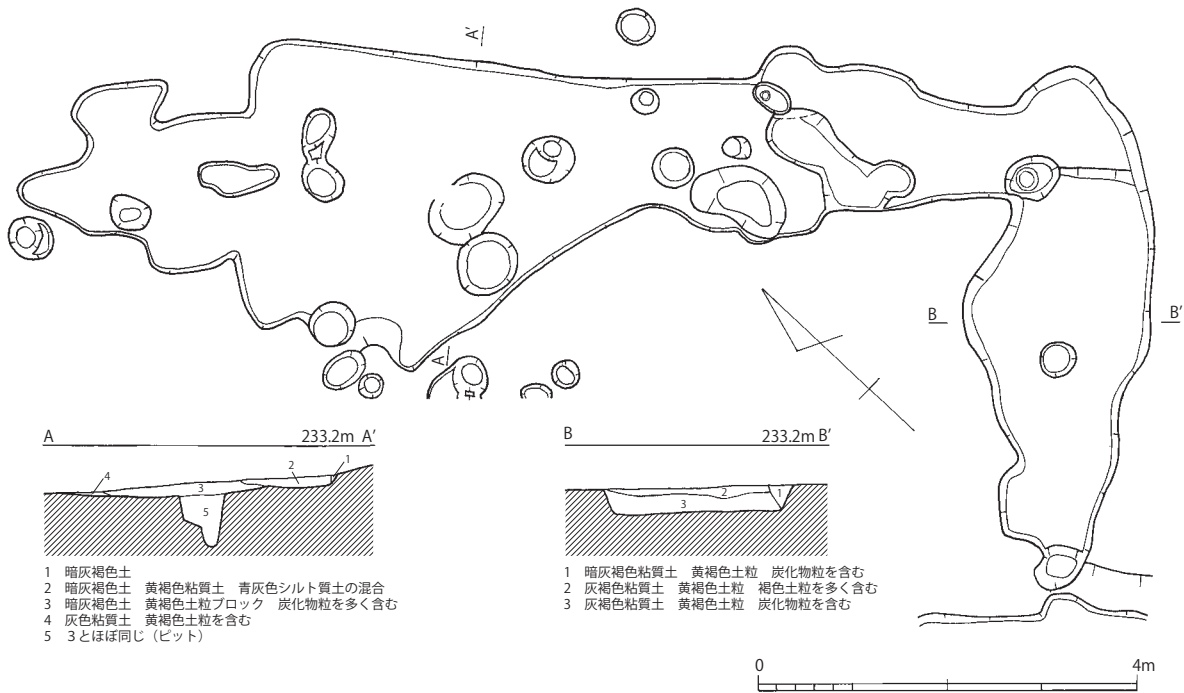
調査の結果検出した遺構は、溝、土坑、小穴等であるが、ある程度人為的な掘削した遺構と判断できるものは1号溝状遺構のみであった。

1号溝状遺構（図版18～20、第14図）

Ⅰ区の北部で検出した。地形の段の下端に沿う方向に直線的に12m伸び、南東側で逆L字形に直角に屈曲して南西方向に5m延びる。幅は一定しておらず1.0～3.3m程で、深さは全体に浅く、



1号溝状遺構掘削作業状況



第14図 1号溝状遺構実測図(1/80)

0.1 mから深い部分でも0.3 m程度である。遺構の底面には多数の小穴が認められるが、不整形なものが多く、配置にも規則性は認められない。

溝は地形に合わせた方向で、直角に曲がる形状から、何らかの区画溝と考えられる。遺物も比較的まとまって出土した。しかしながら一方で、遺構は急斜面の下端に沿って形成されていて、屈曲して曲がる方向は地形の緩い傾斜の下方に向かっている。これよりさらに浅く形状も不完全ながら、同様の溝状の箇所が、1号溝状遺構の南側に接する低い段の下端部分にも認められる。あるいは遺構は人為的なものではなく、水の流によって形成された自然のものである可能性もあるように思われる。

出土遺物(図版26・27、第15・16図)

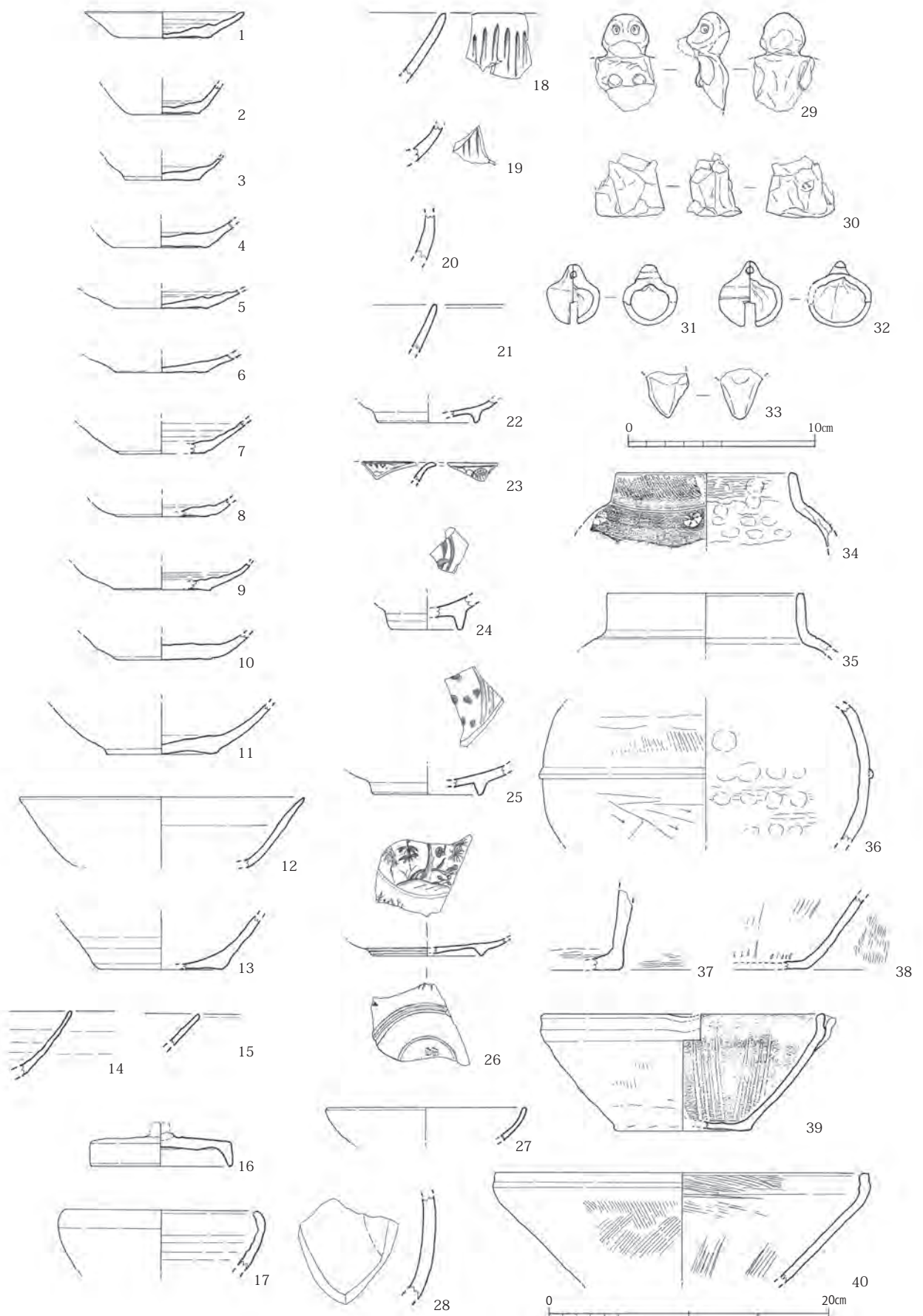
1～17は土師器。1～15は皿・杯で、底部はすべて糸切り。1～3・5・9・13～15は、胎土が精良で、器壁が薄く、ロクロ目の凹凸が目立つ、いわゆる大内系の土器である。10～12は、体部下位で湾曲して立ち上がる。1は復元口径8.5cm、底径5.2cm、器高1.4cm、12が復元口径15.2cm。底径が4cm程度の小さなもの(2・3)と、5cm前後のもの(4～10)、6cm程度のもの(11・13)に分かれる。5・9は内面に油煙が付着しており、灯明皿として使用したものであろう。16は蓋で、中央部に摘みの痕跡があり、口縁部は下方に屈曲させる。復元口径7.8cm。17は鉄鉢形の椀で、胎土は精良、内面にはロクロ目が残る。復元口径10.2cm、最大径11.0cm。

18～21は青磁椀。18・19は龍泉窯系で、線描き蓮弁文の一部が見られる。20は胎土が陶質で、釉色はオリーブ色。21は胎土が白色で堅緻、釉は内面が白磁、外面が青磁となっている。

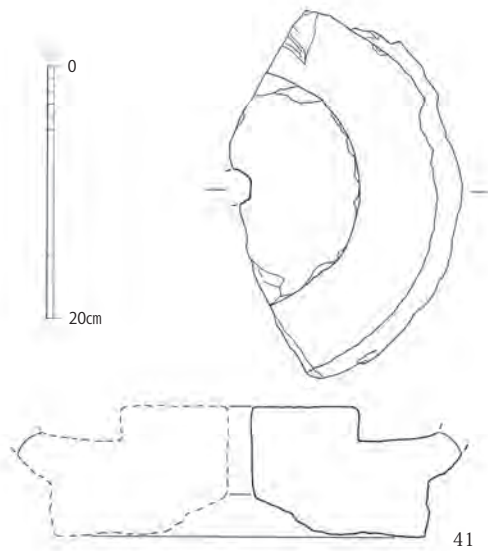
22は白磁皿。胎土、釉ともに白色で堅緻。高台内面に砂の融着が見られる。

23～28は染付で、23・26・27は器壁が薄く精緻で、景德鎮窯のもの。23は宝尽くし文、25は列点文、26は松竹梅で、外底部には文字が見られる。

28は陶器で、甕、壺等の器形であろう。釉は濃褐色で、外面は全面に、内面は一部のみ施釉で、釉垂れであろう。



第 15 图 1 号沟状遺構出土遺物実測図① (1/3、1/4)



第16図 1号溝状遺構出土遺物実測図②
(1/6)

30、31は手捏ねの土製品で、朝倉市教育委員会が調査した第24次調査地点で同種の製品が出土しており、2点とも猿形であろう。29は上半身部分で、目の部分は工具を押し当てて成形している。胸には粘土を貼付けて乳房を表現しており、雌であることが判る。30は下半身で、短い尻尾を地面に付けて座る姿勢である。背中にわずかに貼付けた足の痕跡があることから、子供を背負う姿を表現したものと考えられる。

31、32は土鈴で、2点とも宝珠形で手捏ね。31は小型、やや肩の張った形状で、頂部に紐孔を穿ち、下半部には十字に透かしを入れるようである。高さ3.1cm、復元幅2.9cm。土師質に焼成する。32は、中央部に1条の沈線をめぐらせ、その下位に長方形に透かしを入れる。高さ3.5cm、幅3.3cmで、瓦質に焼成されている。

33は瓦質の香炉脚部であろう。34～36は釜で、34・36は瓦質、35は土師質に焼成される。34・35ともに垂直に立ち上がる口縁部の下に1条の沈線がめぐる。34は沈線下にスタンプを施文する。34は復元口径13.0cm、35は14.2cm。36は、胴部の中央に1条の突帯を貼付け、その下位には煤が付着している。最大径は突帯部で24.0cm。37は土師質で、甕形あるいは鉢形の製品と思われる。底部までハケメ状の調整を行い、体部はその後ナデ消している。38～40は摺鉢で、38・39は土師質、40は瓦質である。内面には、38・40は5本一単位、39は4本一単位の条線を放射状に配する。39は内外面、40は外面に煤が付着しており、鍋として使用したものか。

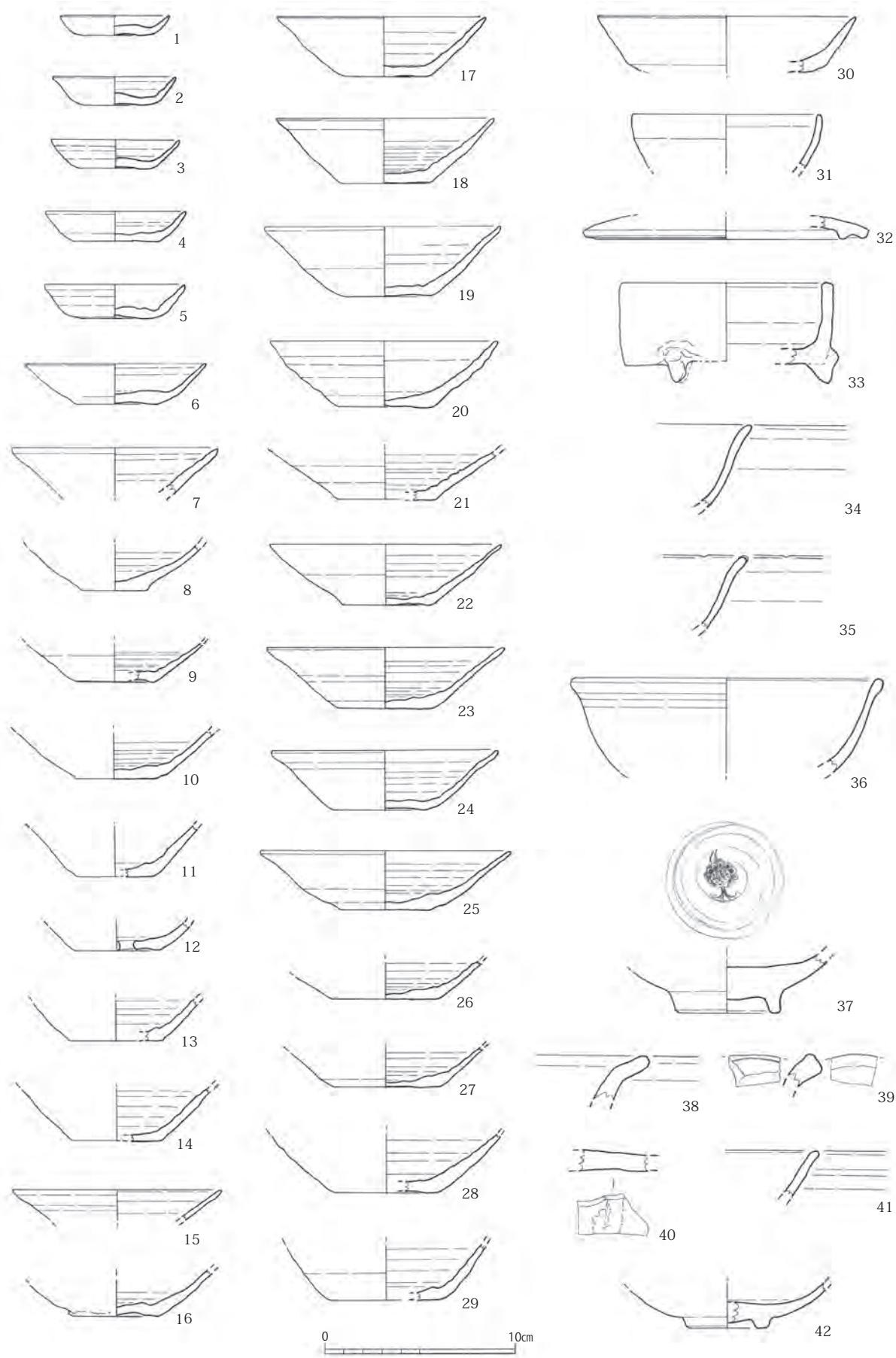
41は茶臼の下臼で、全体の半分強と受皿の先端部を欠失する。白面は復元径18cm程で、目は磨り減り失われており、ほぼ平らだが周縁部より中心部の方がわずかに低くなっている。高さ10.5cm、残存径は復元して35cm程度。安山岩製。

遺物包含層 (第13図)

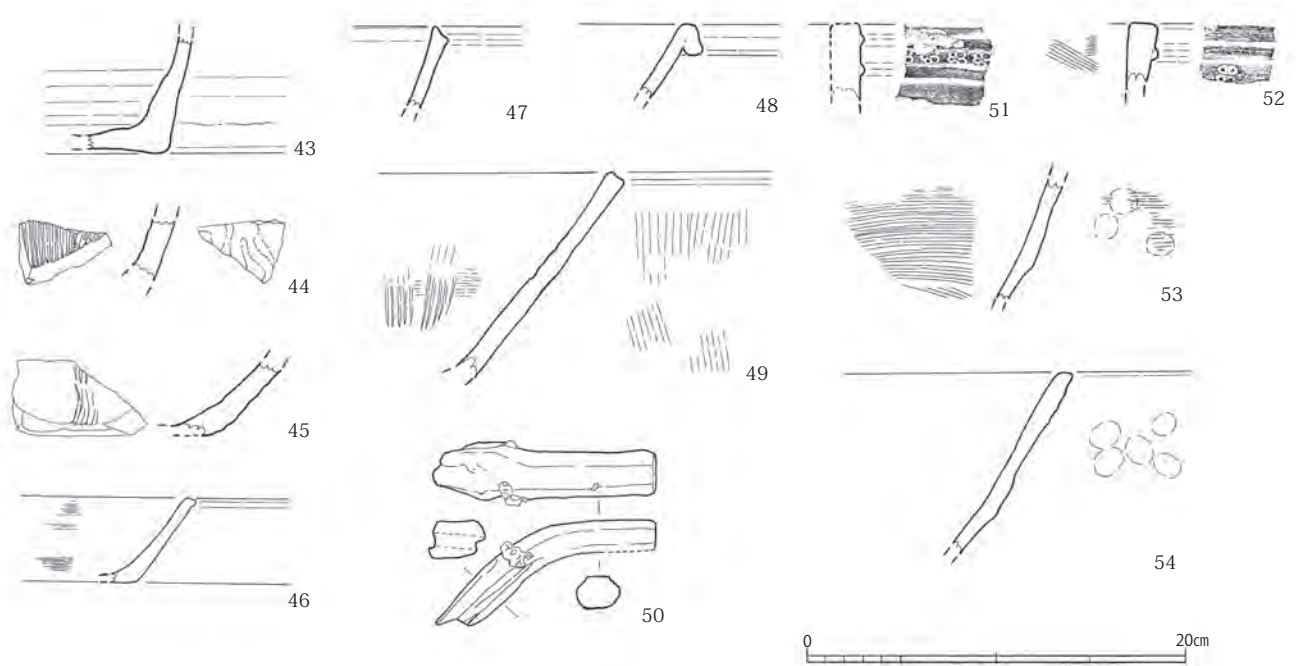
I区東端のII区と接する9×7mの範囲で、遺物包含層を検出した。埋土は暗灰褐色土で比較的良く締まっており、西側の最も深い部分で1m弱低くなり、傾斜する旧地形を示すものだろう。

出土遺物 (図版27～29、第17・18図)

1～32は土師器。1～5は皿で、1以外はロクロ目の顕著な大内系の特徴を示す。1は復元口径5.8cm、器高1.0cm、2～5は復元口径6.4～7.4cm、器高1.5～1.8cm。3・5は油煙が付着しており、灯明皿として使用されたもの。6～30は杯で、12・30以外は、胎土が精良で、器壁が薄く、体部が直線的に広がり、特に内面にロクロ目の凹凸が見られる大内系と言える。21は胎土が殊に精良で白色を呈し、内面のロクロ目が特に顕著で工具を使用して意図的に付けているようである。皿に分類しても良さそうな小型の6で復元口径9.4cm、底径4.4cm、器高2.1cm。中型の17～24で復元口径11.0～12.5cm、底径4.5～5.0cm、器高3.1～3.7cm。口径のやや大きい25で復元口径13.2cm、底径4.8cm、器高3.1cm。12は大内系ではなく、底部には焼成前に開けた径1.0cm程の



第 17 图 包含層出土遺物実測図① (1/3)



第18図 包含層出土遺物実測図② (1/4)

孔がある。30は破片であるが、復元口径13.6cm、復元底径9.0cm、器高2.9cmで、他の杯と比べて底径の大きさが目立つ。7・19・25・27は油煙が付着しており、灯明皿として使用したものであろうか。31は椀形であろう。復元口径10.0cm。32は内面にかえりを持つ蓋で、破片であるが復元すれば径15.0cmとなる。下面に油煙が付着しており、最終的に灯明皿として使用したか。

33は瓦質土器の脚を持つ香炉。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部下には微妙だが沈線がめぐる。復元口径11.2cm、器高5.2cm。

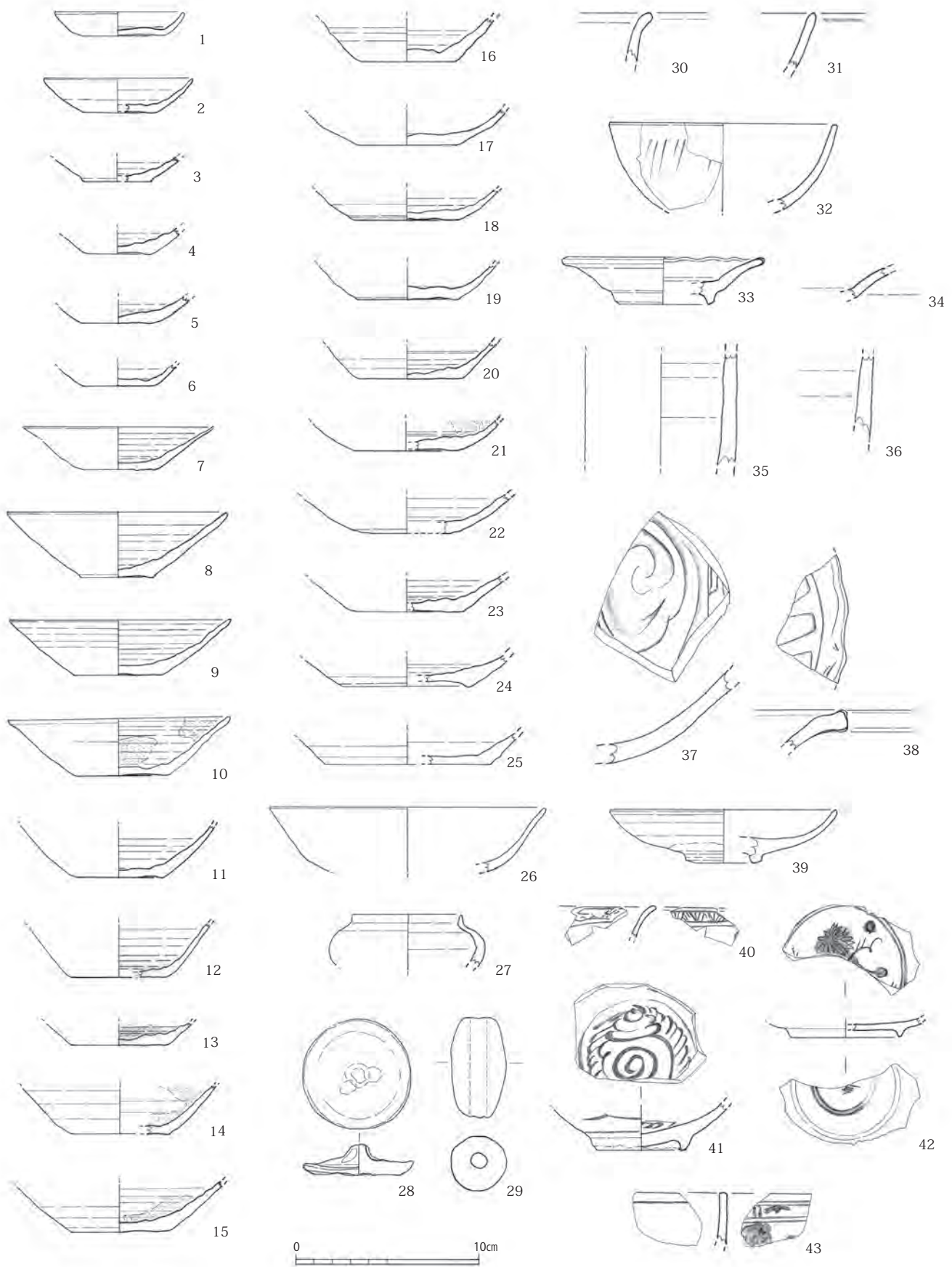
34～41は青磁。34～37は椀で、34・35・37は釉が青緑色であるのに対して、36はオリーブ色を呈する。36の復元口径16.4cm。37は高台も含めて前面に施釉し、見込中央にはスタンプで花卉文を施文する。高台径5.6cm。38・39は盤の口縁部で、屈曲して開く。39は端部を上方に肥厚させ、稜花になるものであろう。小破片であるが、40も盤と思われ、釉を掻き取った箇所があり、底部の高台内側にあたる部分と思われる。

41・42は白磁椀で。41は胎土が磁器質で釉は灰白色、42は胎土が陶器質で釉は黄白色である。42の高台径4.4cm。

43は甕の底部付近で、胎土は灰色で堅緻、釉は褐色で底部以外の外面に施釉する。内面にも部分的に薄く釉がかかるが、釉垂れによるものであろう。44・45は陶器摺鉢。44は内面の条線が密に入る。胎土は黄白色で、濃褐色の釉を内面に施釉し、外面にも垂れた痕跡が残る。45は底部付近で、6本以上一単位の条線を放射状に入れる。胎土は赤灰色で、内外面とも露胎である。

46は土師質の鉢で、器高4.5cmと浅い。内面横方向の、外面縦方向のハケメ調整の後、外面はナデ消している。47～49は瓦質の鉢あるいは摺鉢である。47は外面が赤灰色を呈し、器壁が薄く、比較的小型品となるものかもしれない。48は口縁部を外面に折り曲げるもので、焼成は土師質に近い。49は内面に5本一単位の条線が放射状に見られるが、器面の風化が激しく、上半部は剥落している。

50は土師質の不明土製品。棒状で、一方の小口部に切込みを入れ、別の土器の端部を挟み込んだ



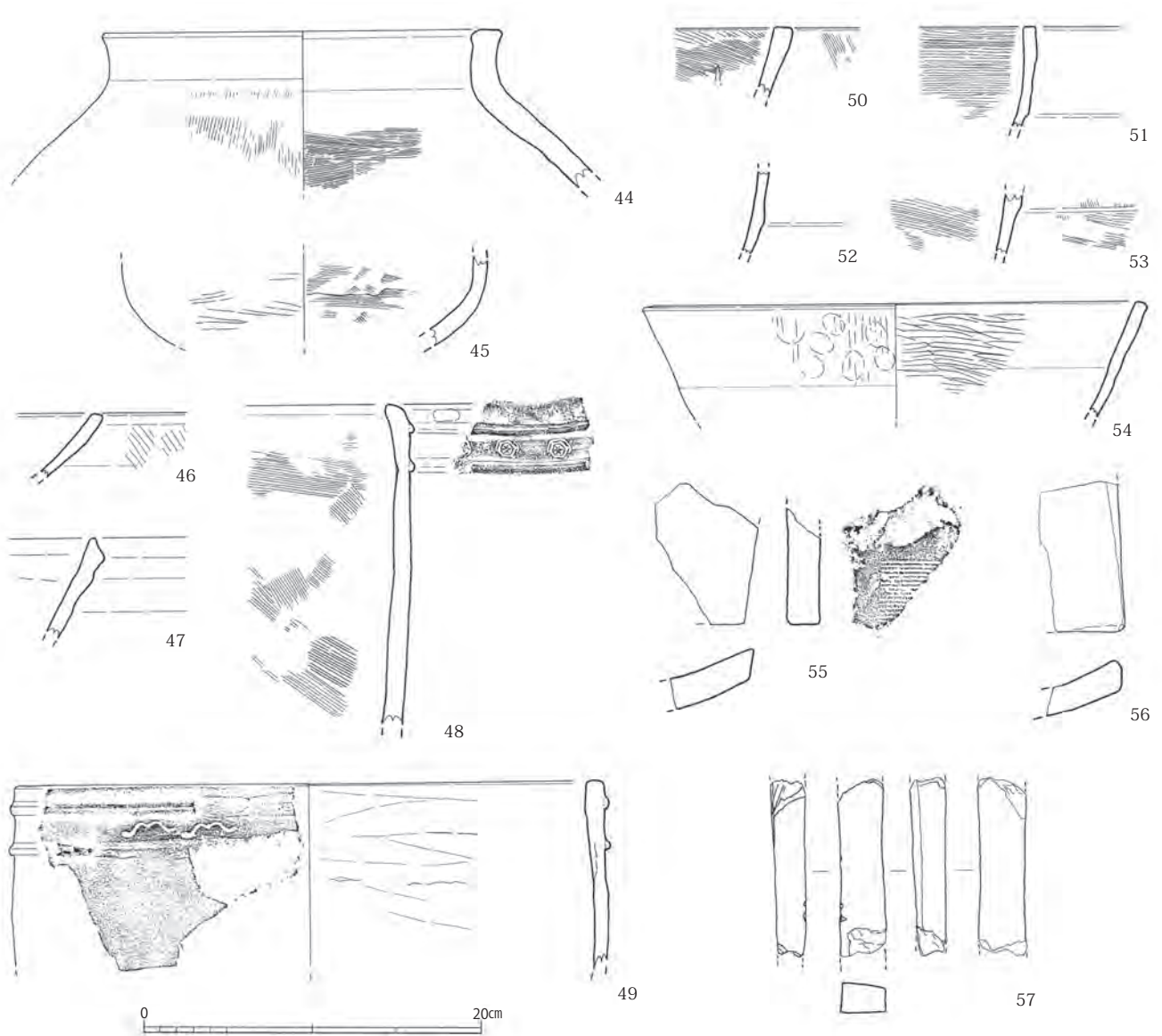
第19図 その他のI区出土遺物実測図① (1/3)

で貼り付けている。中央部で湾曲し、もう一方は断面楕円形の上半部を工具で面取りして仕上げる。口縁部が緩やかに立ち上がる製品、例えば十能のようなものの把手ではないか。同種のもがⅡ区からも別に2点出土している。

51・52は瓦質土器火鉢で、口縁部下に2条の突帯を貼付け、その間にスタンプで施文するもの。53・54は、土師質土器鍋。中段に緩い段を持ち、外面には煤が付着する。

その他のⅠ区出土遺物（図版30～32、第19・20図）

1～28は土師器。1の皿は、胎土が精良で、器壁が薄い。口径7.0cm、器高1.3cm。2～26は杯。体部の下部が内湾して立ち上がる器形の17・26以外の、ほとんどのものは大内系の特徴を備えている。2・3・11・17・19・24～26は、ロクロ調整の後に内外面あるいは内面のみをナデ調整で仕上げる。10・13～16・21には油煙が付着しており、灯明皿として使用したと考えられる。皿ともいえる小型の2は復元口径8.2cm、底径4.0cm、器高1.9cm。7は復元口径10.4cm、底径4.0cm、



第20図 その他のⅠ区出土遺物実測図②（1/4）

器高 2.4cm。中型の 8～10 は、復元口径 12.0cm、底径 4.0～4.9cm、器高 3.0cm。27 は小型の短頸壺。復元口径 6.0cm、最大径 8.4cm。28 は蓋で、中央部に摘みが付く。ロクロ成形で、下面には糸切りの痕跡が残る。径 5.9cm、器高 1.7cm。

29 は土錘。長さ 5.5cm、最大径 3.0cm、孔径 1.0cm で、重さ 45 g。

30～39 は青磁。30～32 は椀。30 はいわゆる砧青磁で、釉の青味が強く厚くかかる。花瓶等の可能性もある。31・32 の釉は貫入があり、31 の口縁部下には圈線がめぐる。32 の体部外面には平行する細線が認められるが、文様ではなく工具痕と思われる。33・34 は皿で、貫入が目立つ。2 点は同様の器形と思われ、33 の口縁部は稜花となる。35・36 は花瓶等の頸部であろう。内外面施釉する。復元径 8.2cm。37・38 は盤。37 の体部内面に片彫りで描くのは蓮華文であろうか。縁部には雷文を配する。38 の体部は蓮弁に作り、屈曲して開く口縁部は稜花となる。

39 は白磁皿。胎土は黄白色で、釉は白色を呈する。復元口径 12.4cm、復元高台径 4.2cm、器高 2.9cm。

40・41 は染付椀。40 は胎土が白く、器壁が薄く、景德鎮窯系である。41 は釉がやや青味がかかり、漳州窯系で、見込には螺文を描く。高台径 5.2cm。42 は景德鎮窯系で、皿であろう。見込に花卉を描き、高台内側には文字が認められる。高台径 6.0cm。43 は香炉、外面には釉がかかり、内面は露胎。やはり景德鎮窯系と思われる。

44 は無釉の陶器甕。内外面ハケメ調整の後、外面はナデ調整。復元口径 23.8cm。

45 は瓦質土器釜で、体部外面はミガキ調整。46・47 は鉢の口縁部である。48・49 は火鉢。口縁部下の 2 条の突帯の間にスタンプで施文する。48 は内面ハケメ調整の後にナデ調整、外面はナデ調整。49 は内外面ナデ調整で仕上げる。復元口径 35.0cm。

50～54 は土師質土器鍋であるが、51 はやや瓦質に焼成される。51～53 は胴部に緩い段がある。50・53 は内外面ハケメ調整、51 は内面ハケメ調整、外面ナデ調整、52 は内外面ナデ調整、54 は内面ミガキ調整、外面ハケメ調整の後ナデ調整と、多様である。外面には煤が付着するが、50 は口縁部と内面に付着する。51 は熱による器面の剝離が認められる。54 で復元口径 30.0cm。

55・56 は瓦で、2 点とも平瓦である。ともに瓦質に焼成されるが、56の方がより硬質となる。55 は下面に櫛状工具で横位に条線を付ける。56 は割れ口付近の形状を見ると、あるいは棧瓦である可能性もある。

57 は砥石で、長方形となるが、両端部は欠失し、残存長 10.6cm。4 面とも使用している。片岩製。



Ⅱ区掘削作業状況

II区

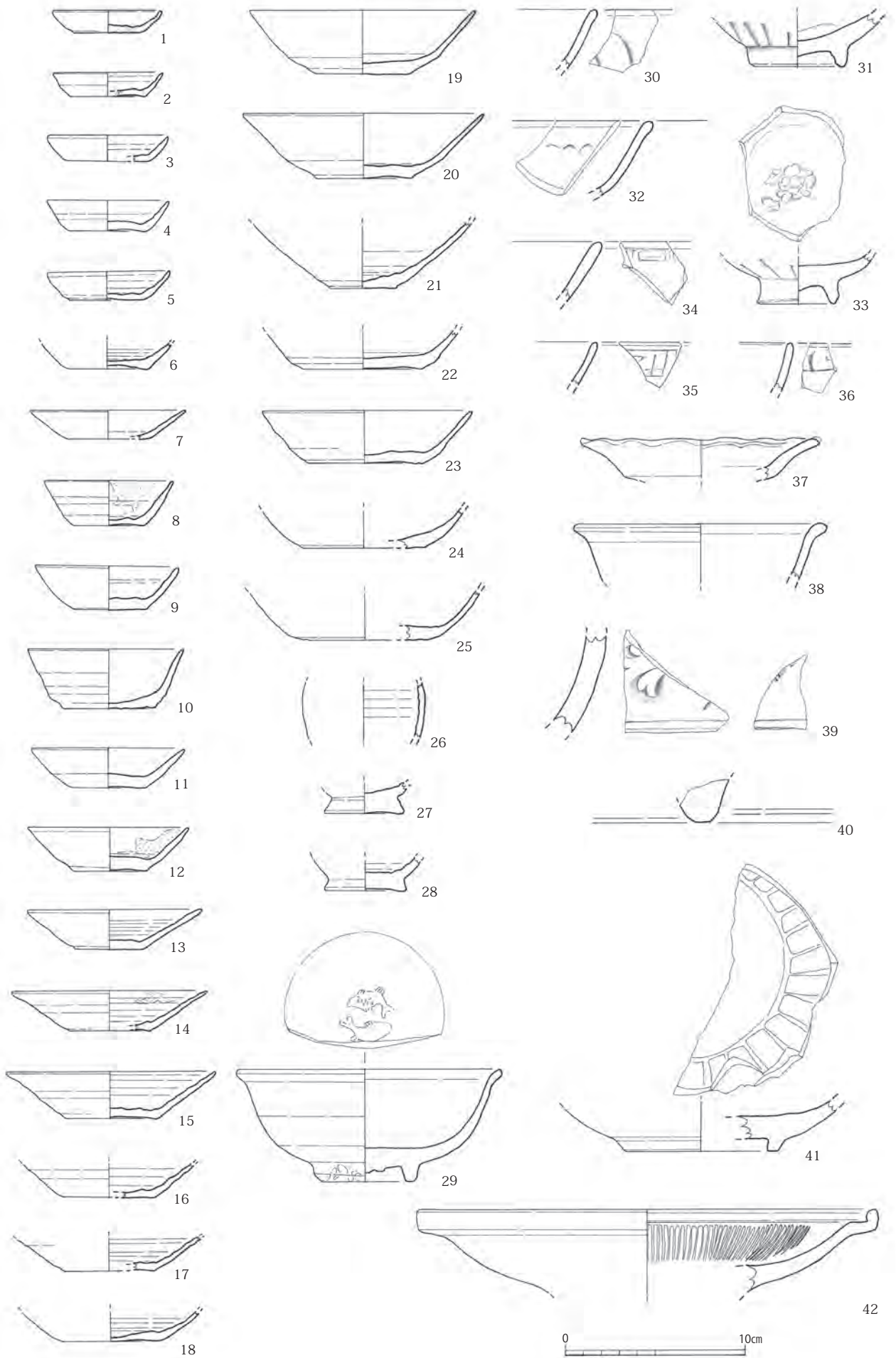
I区の北西側で、現地形は一段低くなっている。検出した遺構は、溝状遺構、土坑、小穴である。しかし、急斜面の下端にあたる北側部分に遺構が集中し、形状が全体に不整形であり、また配置に規則性も見られないことから、人為的なものではない可能性が高いものと思われる。調査区北壁面での土層観察では、穴の埋土は上層と同様の灰褐色土で境目も不明瞭であることから、遺構面が埋没する段階でこれらの遺構も同時に埋まったものと考えられる。

出土遺物（図版 32～36、第 21～23 図）

1～28は土師器。1～7は皿で、ほぼ同様に胎土が精良で赤灰色を呈し、器壁が薄く、内面にはロクロ目が残る。口径 6.1～6.9cm、器高 1.2～1.7cm。6～25は杯。6・13～18・21は、器壁が薄く、ロクロ目が顕著な大内系と言えるが、外面はナデ消している。7・11・19・22～24は、内外面を丁寧なナデ調整で仕上げる。また、8・12・14・21は内面に油煙が付着しており、灯明皿として使用したものであろう。小型の7で、復元口径 8.6cm、復元底径 4.6cm、器高 1.6cm。8～10は、口径に対して器高が高く、口径 7.2～8.6cm、底径 4.0～5.0cm、器高 2.5～3.2cm。口径のやや大きい 11・12は、口径 8.6～9.0、底径 4.1cm、器高 2.2～2.4cm。大内系の 13～15は、口径 9.8～11.7cm、底径 4.0～5.1cm、器高 2.2～2.6cm。大型の 19・20は、口径 12.6～13.4cm、底径 5.3～5.4cm、器高 3.5～3.6cm。21は、口径に対して底部が小さく、底径 3.8cm。22～25は底部が大きく、23で復元口径 11.7cm、底径 6.5cm、器高 2.9cm。26は器種不明。器壁が薄く、内面にはロクロ目残り、外面はナデ消している特徴は、大内系と呼んでいる杯等と共通するが、復元すると小型の壺等の袋物になるものと思われる。復元径 6.8cm。27・28は底部であるが、やはり器種は不明である。円盤状の高台を持ち、内面にはロクロ目が目立つ。底径 4.4、4.5cm。あるいは 26のような器形の底部になるものではないか。

29～42は青磁。29～37は椀。29は、見込に魚文のスタンプを押す。釉下に砂が混じり、釉の発色も良くない。畳付以内は露胎である。復元口径 14.8cm、高台径 5.7cm、器高 6.3cm。30・31の外面は、蓮弁文。31は、外底部の釉を掻き取る。32は内面に型による印花文を作る。33は見込に牡丹文を印刻し、外面は蓮弁であろう。畳付以内は露胎。34～36は口縁部外面に雷文を配する。37は皿で、口縁部は稜花となる。38は、いわゆる砧青磁の花瓶口縁部であろう。釉は青味が強く、厚く掛かる。39は2片であるが、おそらく同一個体で、酒会壺あるいは大型の花瓶の一部であろう。器壁は厚く、外面圏線の上の文様は牡丹であろうか。釉は、緑の強い青緑色で、発色が良い。40も同様の器種の底部である。器壁が厚く、畳付部は釉を掻き取って面取りをする。41・42は盤。41は、内面に型による蓮弁文を作る。42は、口縁部が屈曲して開き、内面には櫛状工具による6本一単位程度の凹線を全面に放射状に入れる。復元口径 25.3cm。

43～48は白磁。43は椀で、体部下半はヘラケズリ調整。釉は青味のある灰色で、畳付部以内は掻き取っている。復元口径 16.7cm、復元高台径 5.0cm、器高 5.9cm。44・45は小椀。44は釉が乳白色、45はやや青みがかった淡灰色である。44の高台径 3.2cm。46は皿。やや外反する体部が、そのまま高台に繋がる器形である。釉は青味のある白色で、見込は釉下に若干砂を含む。畳付は露胎で、高台内は最後に刷毛で釉を掛けている。復元口径 9.6cm、復元底径 5.8cm、器高 2.2cm。47は瓶であろう。外面は施釉、内面は露胎である。復元高台径 4.0cm。48は四耳壺の底部。釉は暗灰色に発色する。



第 21 图 II 区出土遗物实测图① (1/3)

49～54は染付椀。49は、胎土がやや黄色がかり、釉には貫入が入る。漳州窯系であろう。50～54は景德鎮窯系のもの。50は、口縁部内外面に圈線が入り、復元口径12.0cm。51～54は、破片であるが、内外面に文様を描く。52・53は器壁が薄く、呉須の発色が良い。

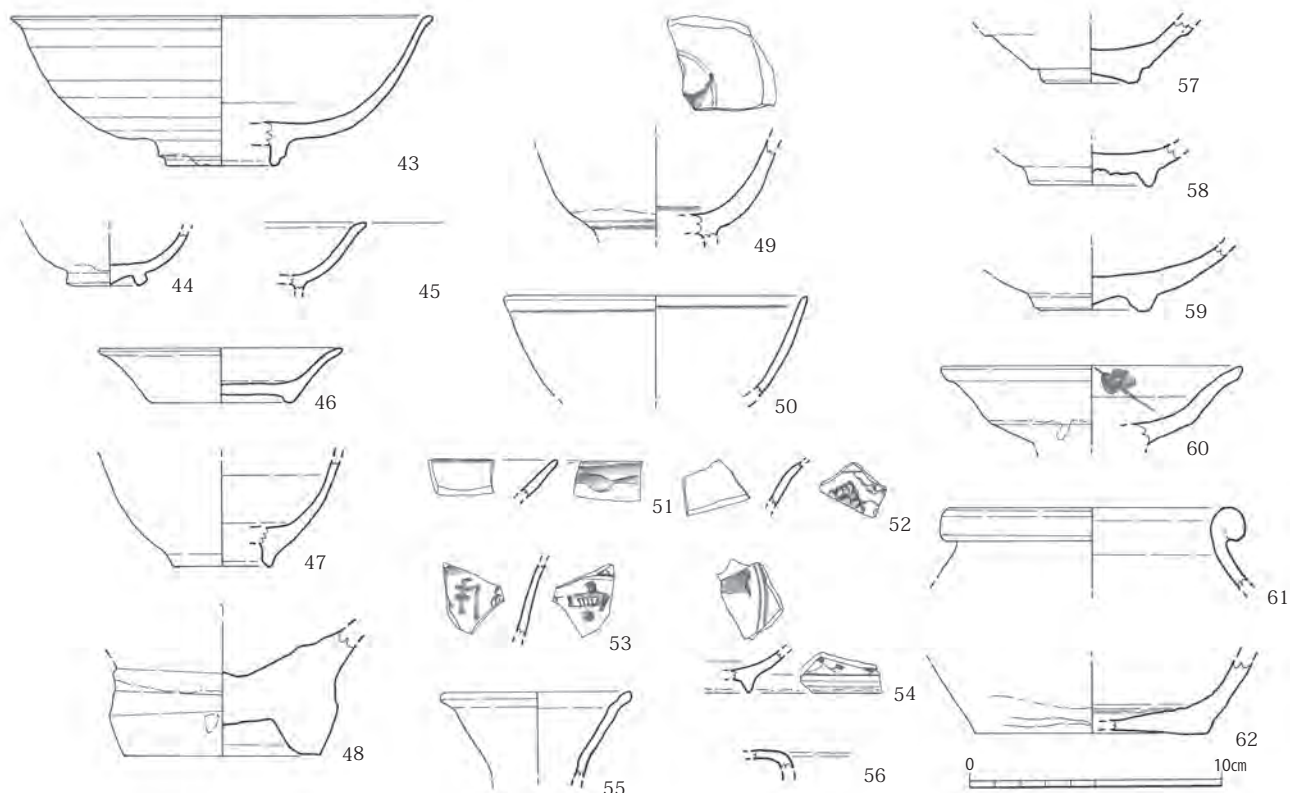
55は、炆器の水注口縁部であろう。器壁は薄く、胎土は茶褐色で、良く焼き締まっている。復元口径7.6cm。

56～62は陶器。56は、小破片であるが、河南三彩の合子で、上部は平らとなる。胎土は土師質、釉は鮮やかな緑色で、内外面に施釉する。57は天目の椀。胎土は黄色味のある灰白色、釉は黒褐色で、内面と外面上位に厚く施釉する。見込には使用痕らしい傷がある。高台径4.0cm。58は李朝陶磁器椀。胎土は灰色、釉も灰色である。復元高台径5.0cm。59・60は唐津系で、59は椀。胎土は淡褐色でやや軟質、釉は灰褐色で、内面と高台周辺以外の外面に施釉する。内面には鉄絵が認められるが、器面が風化して剥落した部分がある。高台径4.6cm。60は皿で、胎土、釉ともに灰褐色で、内面と外面の屈曲部まで施釉する。内面には、鉄絵で草花文を描く。61は褐釉壺の口縁部であろう。復元口径12.0cm。62は褐釉の甕等の底部。外面は底部付近まで施釉し、内面は露胎であるが、釉垂れの痕跡がある。復元底径9.2cm。

64は瓦質土器釜の耳部。孔は、棒状の工具で片側から開ける。孔径0.6cm。64～69は摺り鉢。68は瓦質の焼成で、それ以外は土師質である。64は片口部。65～69は、内面に4～5本一単位程度の条線を放射状に入れる。

70・71は用途不明の土製品であるが、同種のものがI区包含層からも出土している（第18図50）。土師質で、器の口縁部分を上下に挟む構造で、反対の棒状の部分は、上半部を削って面取りしている。何らかの把手と思われる。

72～79は瓦質の火鉢。72・73・75・76は、2条の突帯の間にスタンプで施文するもの。76

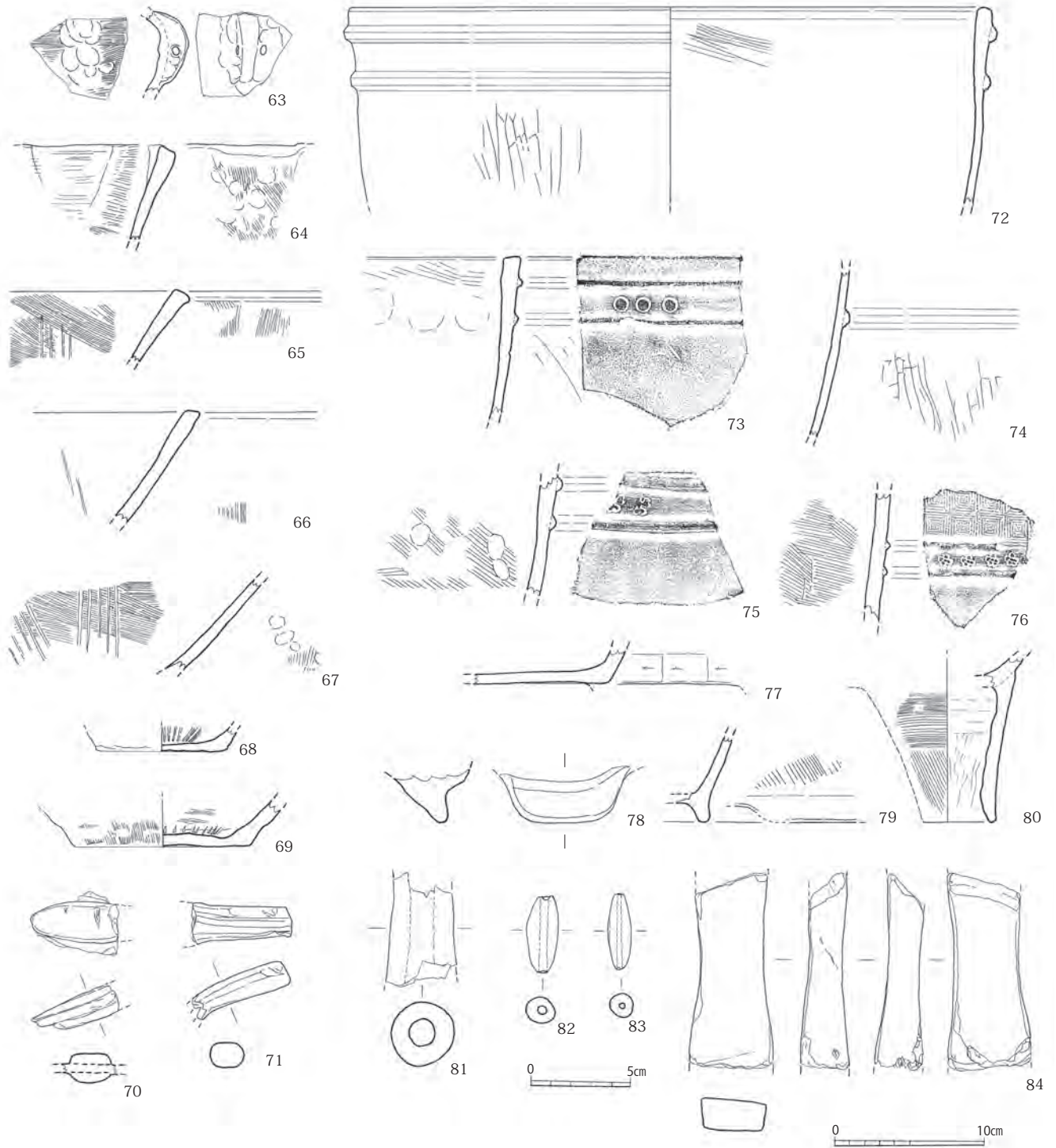


第22図 II区出土遺物実測図② (1/3)

は、その上部にも連続する五柘文を印刻する。突帯の下位は、72・74は縦方向のミガキ調整、73はケズリ調整、75・76はナデ調整で仕上げる。77は底部で平底だが、わずかに脚部の痕跡が残る。78・79は脚部で、78は厚みのあるものである。

80は、土師質土器の一部で、用途は不明である。形状は円筒形であるが、内面に絞り痕があることから、一方の径の狭い截頭円錐形のような形状と考えられ、広い方を別の器に貼り付けている。やはり何らかの脚部ではないかと思われる。そうであるならば、相当の大型品であろう。

81は轆羽口で、先端部付近は熱で融解している。孔径 1.7cm。



第23図 II区出土遺物実測図③ (82・83は1/3、他は1/4)

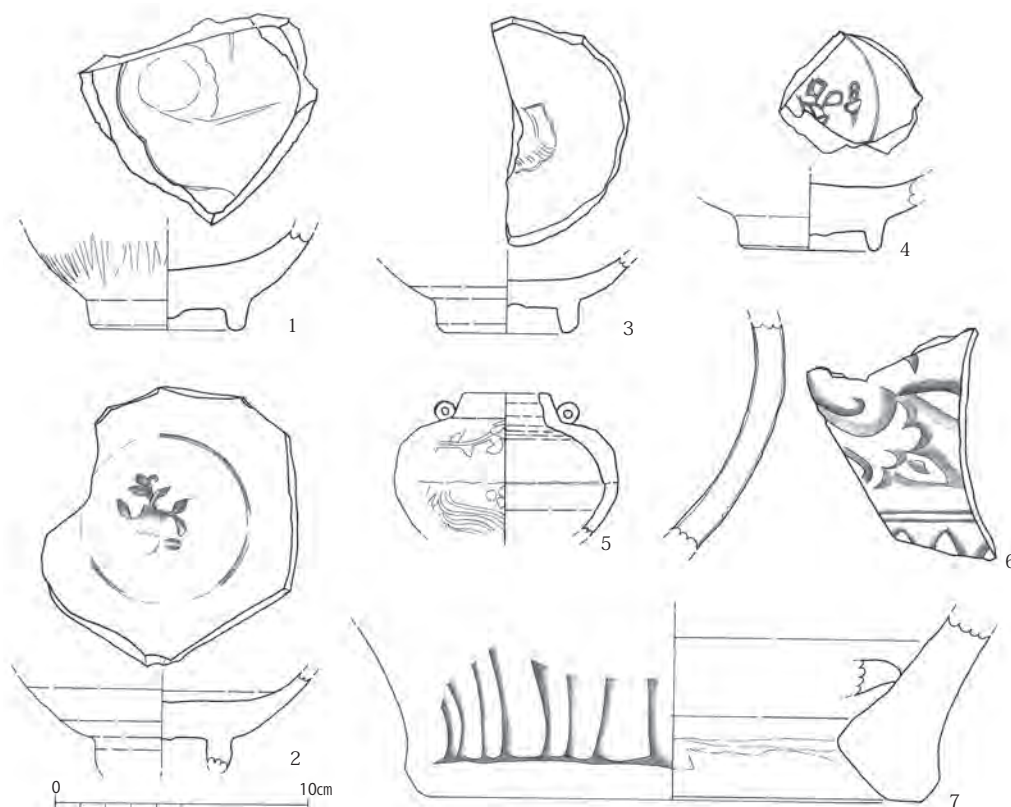
82・83は土鍾で、82は瓦質、83は土師質の焼成である。82は、長さ3.8cm、最大径1.6cm、孔径0.4cm、6.0g。83は、長さ3.9cm、最大径1.2cm、孔径0.2cm、5.0g。

84は砥石で、片岩製。中央部のやや狭くなった長方形を呈し、両端部を欠失する。4面とも使用している。残存長13.1cm。

表土その他出土の遺物（図版36、第24図）

表土掘削中、あるいは土移動中等に発見した遺物である。そのため、出土地点はほぼ明確にし得ないが、重要遺物が含まれているため報告する。

すべて青磁。1～4は椀で、4点とも見込中央部にスタンプで文様を施文する。1は器壁が厚く、胎土は白色。釉は青緑色で全面に厚く施釉し、高台内部は蛇の目状に掻き取る。内外面には貫入が入り、釉の発色が良い。2～4は、胎土は灰色、釉は2・3は緑灰色、4はオリーブ色で、高台の内側は釉を掻き取っている。5は双耳小壺。中央部で上下に分けて型押しで成形し、貼り合わせた痕跡が、内面に明瞭に残る。口頸部は内側に傾き、体部は扁球形で、境の屈曲部に円形の耳が付く。文様も中央部で分かれ、体部上半部は唐草文、下半部はラマ式蓮弁文をあしらう。胎土は灰色、釉は緑灰色。口径3.4cm、体部最大径8.8cm、残存高5.6cm。6は酒会壺あるいは大型の花瓶の胴部であり、7と同一器種の可能性があるが、釉調等から別個体と考えられる。体部の破片で、器壁は厚く、圏線を境に上位には片彫りで牡丹文を、下位は蓮弁文を描く。胎土は灰白色、釉は青緑色で厚く施釉し、発色が良い。7は酒会壺で、同一個体と思われる2片が出土している。裾部は極めて厚く作り、内側に皿を嵌め込むことで底としている。体部の外面には、片彫りで蓮弁文を配する。胎土は灰白色、釉は緑灰色で畳付部以外を施釉するが、6と比較するとやや発色が劣るか。復元底径21.2cmで、裾部の肉厚さからも特大品と考えられる。



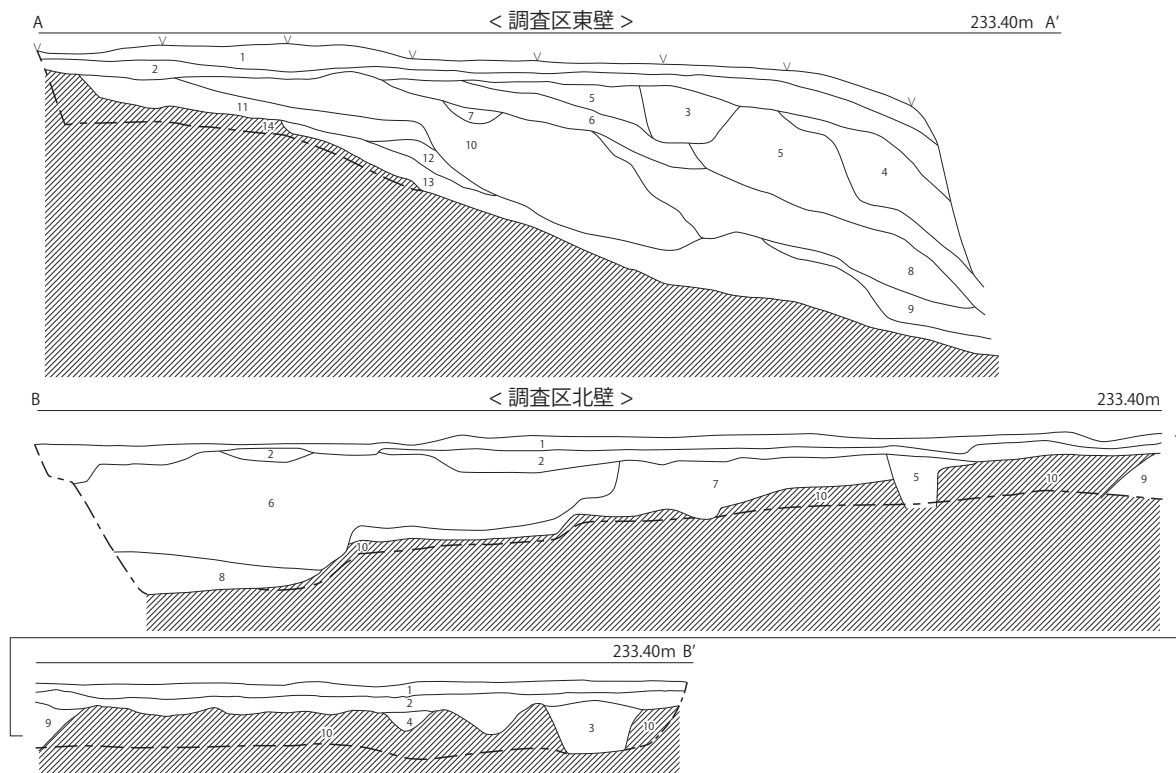
第24図 表土その他出土遺物実測図（1/3）

III、IV、V区

本報告は馬場谷川災害関連緊急砂防事業に伴う朝倉市黒川馬場谷地区所在の黒川院跡（黒川院関連遺跡群第29次調査）の調査の内、III、IV、V区の調査報告である。現地調査時は地形上の特徴からA、B、C区に分けて実施したがそれぞれIII、IV、V区として報告する。

発掘作業は令和元年8月7日から10月16日まで実施し、作業日数は25日である。また、令和2年度中に整理作業・報告書作成を実施した。発掘作業の経過は下記の通りである。

- 8月7日 III区遺構検出。作土層直下で果樹植栽土坑（ビニール片出土）検出。
- 8月8日 重機で地山面まで掘り下げ。元地形は南に向かって傾斜し、客土により過去2回畑を拡張している。調査区北部の狭い平坦面で遺構を検出した。
- 8月19日 III区西部で遺構検出（地山直上の畑の作土）を掘削。近世末以降の磁器片1点他中世土師器片、姫島産黒曜石片出土。地山直上で柱痕跡のある柱穴2基確認
- 8月22日 IV区遺構検出。作土層直下が岩盤。東に急崖、遺構無し。
V区壁面清掃。IV区側に北東から南西方向の谷地形を検出。谷地形の東側の層序を確認。遺構検出するも地山直上で少数の小穴。時期不明。
- 8月23日 III区遺構検出。P1,P2,P4 = 柱穴、P4で柱痕跡（径30cm）確認。他は抜き取り。
- 9月3日 III区遺構掘削。
- 9月6日 III区写真撮影、遺構平面図作成。
- 9月10日 III区遺構平面図、調査区壁面土層断面図作成。
- 9月11日 III区調査区壁面断面図作成。
- 9月12日 III区地形測量。P8付近拡張、柱痕跡と柱掘方を確認。P1,2,4,8は2m間隔で一直線に並ぶ一連の構造物と判明。抜き取り痕から中世以降の遺物出土。
- 9月13日 IV区V区西部の写真・略図・水準測量。
- 9月17日 V区写真撮影、暗褐色土上で小穴2基（内P1で遺物）
- 10月1日 V区東側遺構検出、ほぼ遺構無し。
- 10月2日 V区東側遺構検出、水田作土層下位の状況は西方向に傾斜する元地形を削平したためか岩盤露出箇所・砂礫露出箇所・鋤床残存箇所が同一平面上で現れる。検出した小穴は深さ5cm未満の浅い窪み。遺構はない。
- 10月4日 V区東側略図作成、遺物取上、遺構検出及び掘削。
- 10月9日 I・II区応援、空撮用清掃。
- 10月10日 空撮
- 10月15日 V区遺構実測、水準測量
- 10月16日 V区調査区壁面撮影・実測。発掘作業終了



- | | |
|--|--|
| <p><調査区東壁></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 作土：黒褐色土 2 造成土：灰褐色土（1層と8層の混土） 3 果樹植栽土坑：暗褐色土 4 造成土：褐色礫混じり土（14層由来、礫多量） 5 造成土：褐色礫混じり土（4層に似るがやや暗い） 6 旧作土：含炭化物・遺物暗褐色礫混じり土（下部に焼土含む） 7 小穴：褐色礫混じり土（礫少ない） 8 旧作土：暗褐色土（6層に似る） 9 旧作土：暗褐色土（8層に似る） 10 造成土：褐色礫混じり土（14層由来、礫多量） 11 旧作土：含炭化物・遺物暗褐色小礫混じり土（6～9層以前の畑） 12 旧作土：含炭化物・遺物暗褐色小礫混じり土（11より礫多い） 13 堆積層：暗褐色礫混じり土（小～大礫が密に混じる） 14 地山：淡褐色結晶片岩・火山岩混じり土
（高所は礫の割合少ない、低所は多い、下位は結晶片岩の岩盤） | <p><調査区北壁></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 作土：同東壁1層 2 作土：1層より明るい 3 果樹植栽土坑：同東壁3層 4 小穴：褐色礫混じり土 5 小穴：暗褐色礫混じり土（作土層直下の掘り込み） 6 造成土：同東壁10層 7 旧作土：含遺物暗褐色礫混じり土 8 旧作土か：褐色粘質土ブロック混じり暗褐色土 9 P9：黄褐色礫粒混じり土 10 地山：同東壁14層 |
|--|--|

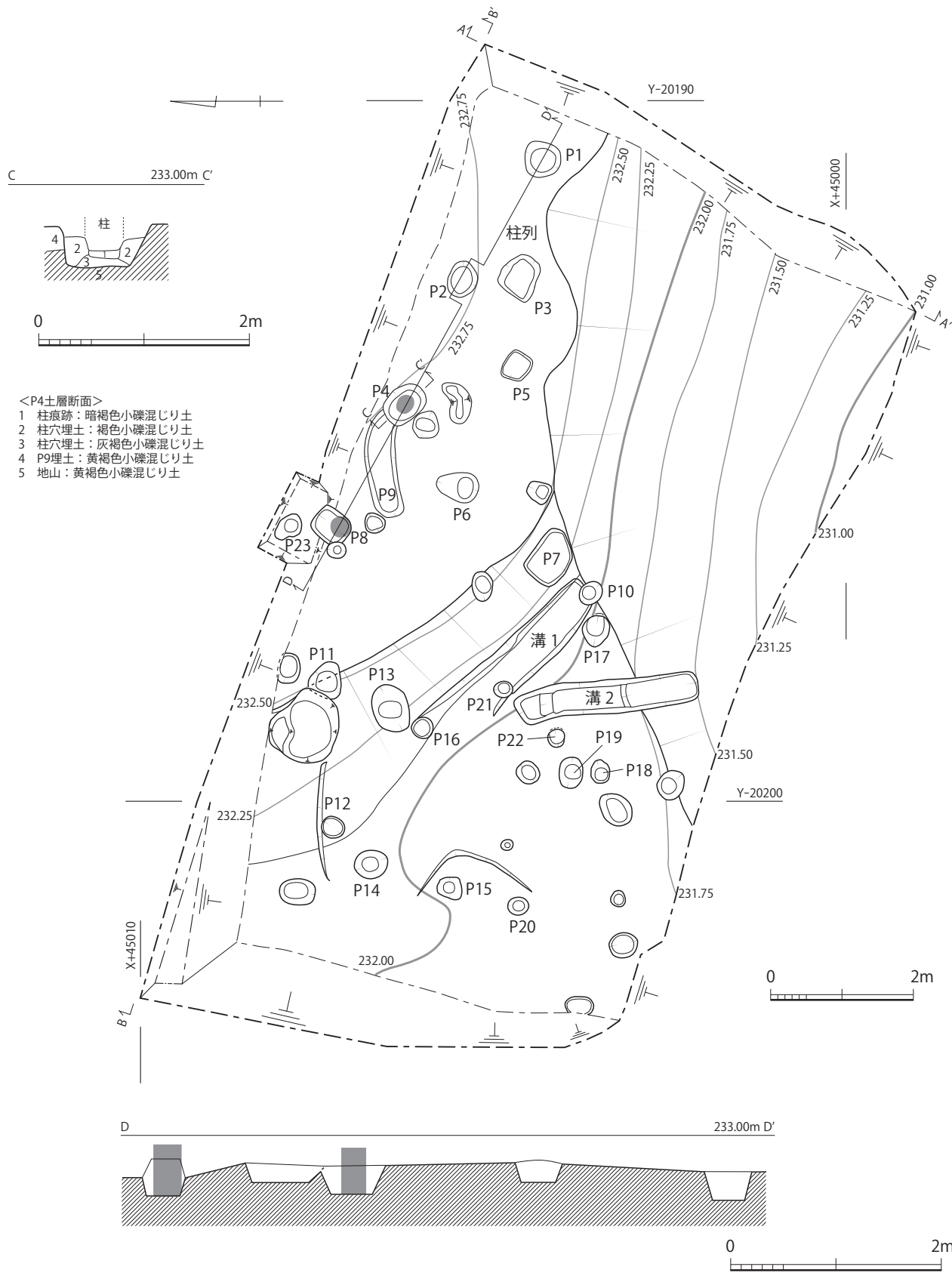
第 25 図 III 区調査区壁面土層断面実測図（1/60）

III 区

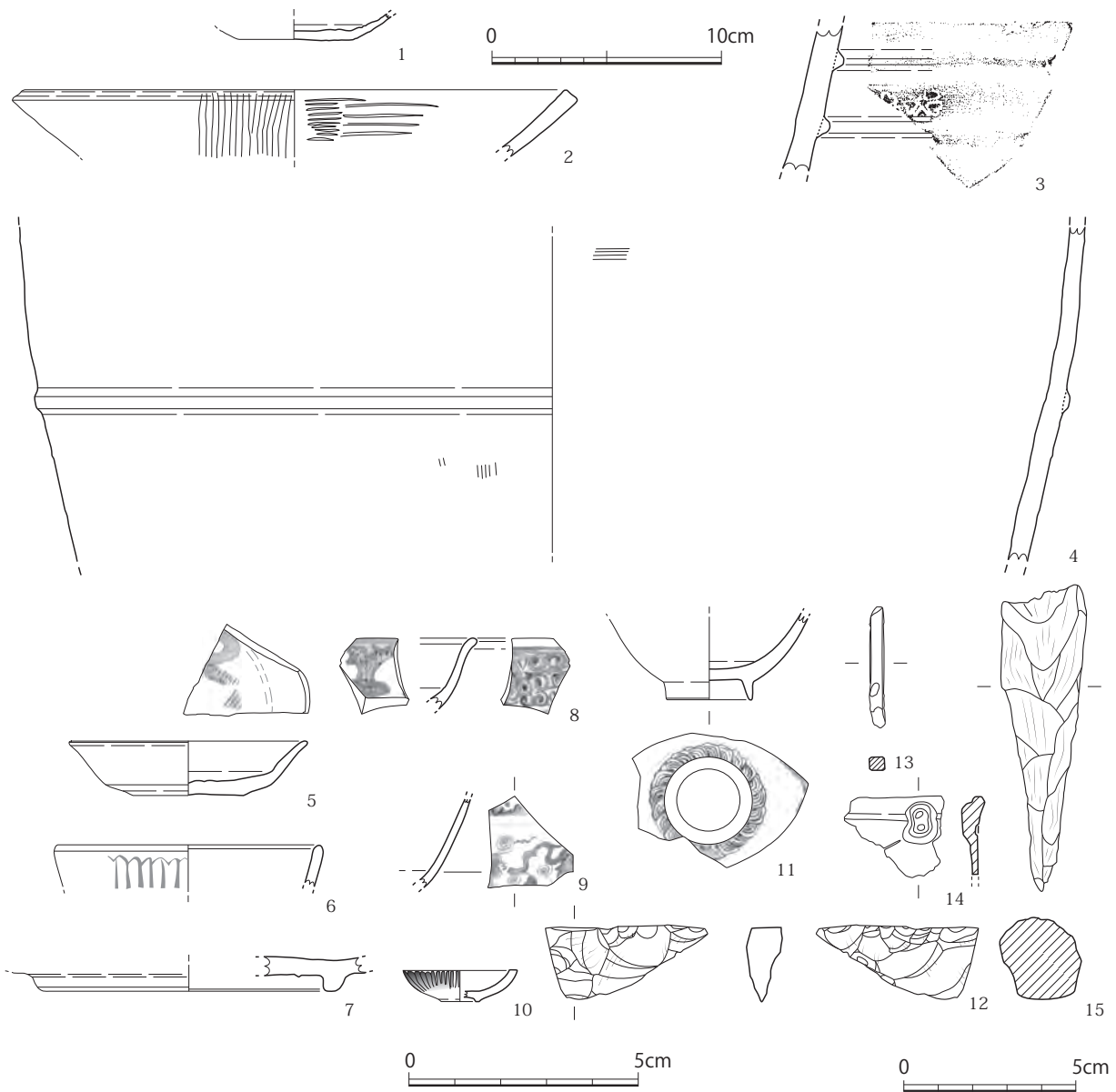
III 区は、御館跡の南を東西に通る北小路に面する平坦地の縁辺部に位置する。北小路川（事業名馬場谷川）を眼下に望む場所に立地し、元地形は北小路川に向かって傾斜する斜面地である。調査区東壁断面の観察結果から、2 回造成し、都合 3 回の畑を営んでいたことがわかる。最初の畑が作られたのは近世末以降と考えられるが、調査区の北端の僅かな平坦地で中世段階と考えられる東西方向の柱列を検出した。また、作土や造成土から縄文時代の石器や中世の遺物などが出土した。

柱列（第 2 図）

調査区北側に東西方向の P1,2,4,8 からなる柱列を検出した。柱間寸法は約 200cm、柱掘方は直径 21cm ～ 61cm の円形乃至楕円形、残存する深さは 15cm ～ 25cm である。P4 は直径 26cm の柱痕跡があり、他は柱抜き取りの痕跡が残る。調査区の端で検出したため、柱列の延長は悪人できず、柵列になるか掘立柱建物跡になるかは不明である。なお、近接する P23 から 12 世紀中葉から末葉にかけての同安窯青磁皿(第 3 図 5)が出土した。おそらく中世の遺構であると考えられる。



第 26 図 III 区平面実測図 (1/80)、P4 土層断面実測図・柱列見通し断面図 (1/60)



第27図 III区・IV区出土遺物実測図 (1/3、2/3、1/2)

その他の遺構

地山直上で小穴や溝を検出したが、位置関係から掘立柱建物跡とは考えられず、柵列であるとしても近世以降ではないかと考えられる。

出土遺物 (第3図)

1は地山直上の作土層から出土した土師器坏または皿である。残存径は8.7cm、残存器高1.2cm、底径4.9cmである。器面調整は外面ナデ、内面は工具によるナデ、底部は回転糸切痕が残る。色調は茶褐色を呈する。

2は果樹植栽土坑から出土した瓦質土器で器種は不明である。口縁は直線的に伸び、端部は平坦である。器面調整は外面が縦方向ハケメ、内面が横方向ミガキである。3は東壁整形時に出土した瓦質土器深鉢である。2条の突帯で文様帯を作り、5弁の花文を押捺する。器面調整は外面ナデ、内面はハケメである。4は2号溝から出土した瓦質土器深鉢である。外面に断面半円形の低い突帯

が1条巡る。器面調整は内外面ナデで、突帯の内面側が縦方向のハケメである。色調は茶褐色を呈する。

5はP23から出土した同安窯青磁皿である。見込に2条の界線の中に線と弧で表現された文様があり、体部外面に縦方向の櫛描きがある。底部は露胎するが、他は施釉する。青磁だが釉調は白く濁る。皿I1b類で12世紀中葉～末葉か。6は作土層直下から出土した龍泉窯青磁碗である。外面の文様は細形蓮弁文である。碗III2b類で、13世紀中葉～14世紀初葉のものである。7は作土層直下から出土した青磁碗である。

8は地山直上検出時に出土した青花皿である。口縁は外湾し、端部は丸い。外面は小さな渦巻き文が連続し、内面の文様は草木文か。9は果樹植栽土坑から出土した青花碗である。この破片の内面に文様は確認できないが、外面には渦状の唐草風文様などが描かれる。色調は白色、釉調は透明である。

10は果樹植栽土坑から出土した白磁小皿である。口縁端部は平坦で外面に細い蓮弁が描かれる。口縁部外面から見込にかけて施釉され、他は露胎する。19世紀の有田焼か。

12は地山直上耕作土から出土した姫島系黒曜石製二次加工剥片である。上面及び側面共に丁寧な面取りがなされており、バルブの発達が認められないことから、元は石核だったと考えられる。

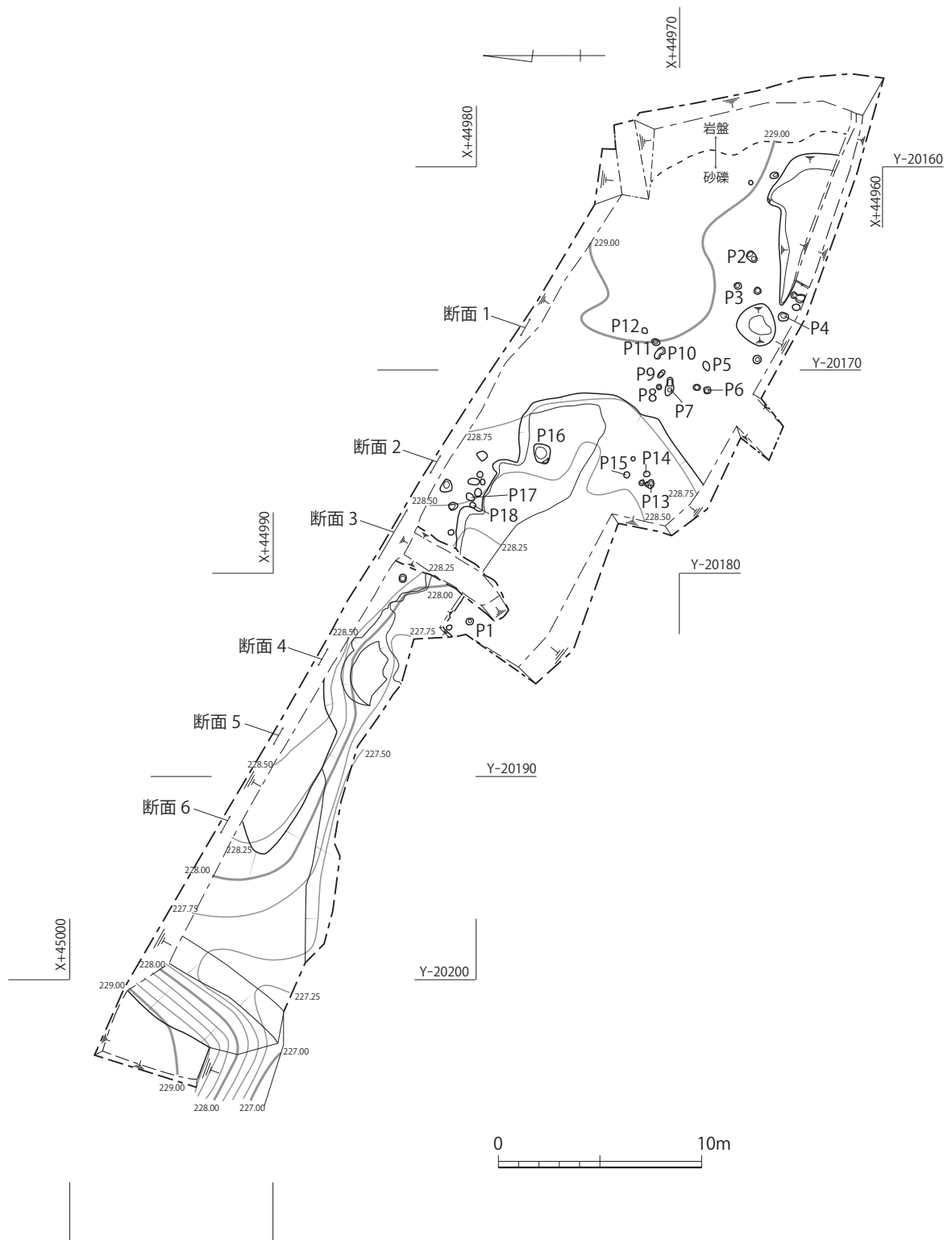
13は果樹植栽土坑から出土した棒状青銅製品である。両端は欠失しているが、断面四角形で面取りされている。残存長3.6cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm、重量3.6gである。14は東壁整形時に出土した青銅製品である。縁が玉縁状に肥厚し、外面に円形の突起が付く。縁は湾曲しており、何らかの容器であろうか。ただし突起から直線状に亀裂があり、これが切込みであれば装飾品の可能性もある。口縁部15はP13から出土した木杭である先端が細くなるように加工してある。

IV区（第4図）

III区から一段下がったところにある平坦面である。この平坦面は西へ続くが、調査区内は狭小であり、東側のV区に対しては急崖となっている。表土は作土で層厚30cm、表土直下は岩盤であり、遺構はなかった。表土中から中世から近代にかけての遺物が出土した。

出土遺物（第3図）

11は地山直上から出土した染付碗である。畳付のみ露胎し、他は施釉する。外面の高台付け根部分に花卉のような文様が一周する。近代以降の絵付け技法が見られる。



第 28 图 IV 区·V 区平面实测图 (1/300)

V区（第4図）

II区とIV区の間にある幅9m、長さ48mの東西に長い調査区である。IV区からは約2m下がっており、II区に対しても低い位置にあり、北小路川の右岸に当たる。調査前は水田であった。

V区の基本層序は、災害土砂、水田作土、鋤床、地山、である。断面1の災害土砂では逆級化現象がみられ、層下部には褐色の斑紋がある。断面2から5では鋤床と地山の間に造成土、旧作土がある。断面3・4では旧作土の下位に造成土がある。断面1・2の地山は砂礫層、断面3・4・5は片岩風化土や礫混じりの片岩風化土、断面6は片岩風化土の下位に片岩の岩盤層がある。地山には北小路川の運搬作用によって堆積した砂礫や礫混じりの片岩風化土が占めていることから、元来不安定な地質であったと言える。

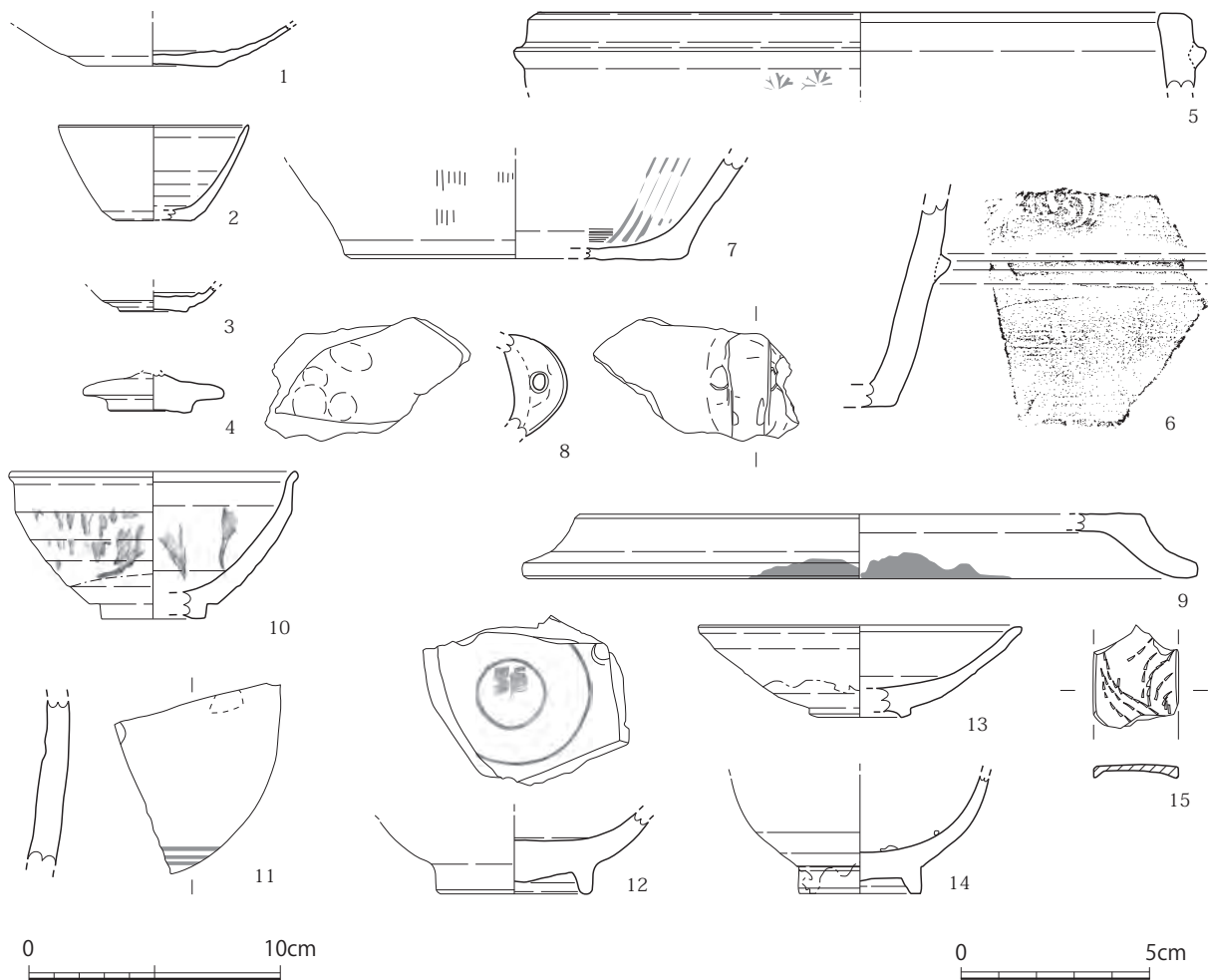
地形を詳細に見ると、V区西半部については、V区とIV区の間には谷地形が入り、級化が進んでいない礫が堆積する。その東側も基本的には北小路川に向かって傾斜しており、わずかな平坦面の背後には急崖が迫る。V区東半部については、平坦面が広がるが、少数の小穴が散在するのみで、である。これらの小穴は深さが10cm程度の浅いものが多く、遺物は出土するものの建物を構成する柱穴などは見受けられない。

V区の基本層序、地形、遺構検出の結果などを勘案すると、V区に明確な遺構はなく、出土遺物は北小路川上流あるいは北側の急崖の上から流れ込んだり、水田を造成する際の造成土中に混入したものであろう。従って、遺跡の本体は調査区外に展開すると考えられる。

出土遺物（第5図）

1はP7から出土した土師器坏である。残存径11.0cm、残存高1.7cm、底径5.0cmである。器面調整は外面がナデ、内面が工具痕が残り、底部は回転糸切痕が残る。色調は黄橙色を呈する。2はP8から出土した土師器坏か。復元口径7.8cm、器高3.9cm、復元底径3.4cmである。器面調整は内外面磨滅しており不明瞭である。底面に輪積みの痕跡残る。3はP15から出土した土師器皿である。残存径5.0cm、残存高1.0cm、復元底径2.8cmである。欠損状況から口縁部はそこまで広がらず、皿と判断した。器面調整は外面ナデ、内面が工具によるナデ、底部は回転糸切痕が残る。色調は茶褐色を呈する。4は検出時に出土した土師器か蓋である。全体的に宝珠形を呈するが、頂部が欠損する。器面調整は内外面ナデ、底部は回転糸切痕のようなものが残る。色調は橙褐色を呈する。

5は重機掘削後に採集した瓦質土器深鉢である。残存率10%以下で口縁部のみ残存する。口縁下に突帯が巡り、花文が押捺される。15世紀代のものである。色調は灰色を呈する。6は重機掘削後に採集した瓦質土器深鉢あるいは浅鉢である。突帯が1条巡り、その付近に巴文が押捺される。器面調整は外面がナデ・横方向と斜方向のハケメ、内面は縦方向ナデ・ヨコナデ、底部は磨滅しており不明瞭である。離れ砂の痕跡が見られる。色調は灰色を呈する。7は検出時に出土した瓦質土器か挿鉢である。内面に櫛描きが2箇所ある。器面調整は外面縦方向のハケメ、内面が横方向のハケメ、底部はナデである。色調は炭素が落ちているため白黄褐色を呈する。8は重機掘削後に採集した瓦質土器釜の耳部分の破片である。器面調整は外面がナデ、内面に指頭痕が残る。色調は灰色を呈する。9は重機掘削後に採集した瓦質土器火消壺蓋(506)である。口縁に油煙が付着する。器面調整は内面ナデ、外面磨滅しており不明瞭である。色調は内外面灰色を呈する。



第 29 図 V 区出土遺物実測図 (1/3、1/2)

10 は P2 から出土した天目茶碗である。内面から外面の体部大半に茶色の釉が施釉され、他は露胎する。内外面に黒色の釉の垂れがかかる。

11 は重機掘削後に採集した朝鮮陶器である。残存率 10% 以下で部位不明である。器厚は 1.1cm である。対面委は 3 状の平行線があり、内面は露胎する。色調は灰色、釉調は透明である。

12 は重機掘削後に採集した龍泉窯青磁碗である。見込に二重の界線があり、中央に「顧 (氏)」銘がある。内外面施釉されるが、高台内面は輪状に釉剥ぎされる。色調は茶色、釉調は灰色を呈する。「顧氏」銘は 15 世紀を遡らないため、15 世紀代のものであろう。

13 は P3 から出土した近世陶器皿である。内外面施釉するが、外面の体部下半から高台内面まで露胎する。胎土は淡赤褐色を呈し、釉調は白黄褐色である。17 世紀肥前系陶器である。14 は重機掘削後に採集した近世陶器碗である。見込の釉調は白黄茶色、外面の釉調は青緑色、高台は露胎する。色調は白黄茶色、釉調は白緑色である。18 ~ 19 世紀の上野焼である。

18 は検出時に出土した青銅製品である。天地不明であるが、側縁が面取りされていて帯状に伸びるか。表面には鑿で彫った破線の弧線で構成される文様がある。何らかの装飾品であろう。

3) 小結

今回の調査地点は、朝倉市黒川の馬場地区に所在し、北小路川の右岸にあたる。調査範囲が狭長であったため、現在の地境に基づいてⅠ～Ⅴ区に分け、このうちⅢ区は台地上にあたるが、それ以外はこれより最大6m程低い谷に形成された小規模な平地上に立地する。Ⅰ区は、朝倉市教育委員会が「御下屋敷」として調査を実施した第11次調査地点の南側に近接するが、両者の間には川に向かって落ちる急傾斜の段があり、Ⅰ区は6m以上低い位置にある。

調査の結果、検出した遺構は、柱穴、溝、土坑と、多数の小穴であるが、人為的に掘削されたものは、柱穴を除いて少ないと考えられた。Ⅲ区で検出した柱穴は、4基が直線的に並び、掘立柱建物の一部とも考えられるが、地形の縁辺部であることから柵の可能性も高い。

出土遺物は、Ⅰ・Ⅱ区が多く、Ⅲ～Ⅴ区では極端に少ない。Ⅰ・Ⅱ区から出土する遺物は、土師器杯が多数を占めるが、輸入陶磁器類も多く、また特殊な遺物も見られ、第24次調査（御館地区）で出土しているのと同様の猿形の土製品も含まれる。時期は14～16世紀が中心で、一部近世に下るものもある。土師器杯は、胎土が精良で、器壁が薄く、ロクロ目が多く残り、体部が直線的に広がる、いわゆる大内系と称しているものの比率が高いことが、特徴の一つであると考えられる。輸入陶磁器では、龍泉窯系の青磁が顕著であるが、多く見られる椀、皿以外に、盤、双耳小壺、酒会壺あるいは大型花瓶等の優品が目立つ。第24図5の双耳壺、第21図39・40、第24図6・7の酒会壺あるいは大型の花瓶はともに元代のものだが、国内での出土は稀である。殊に第24図7の酒会壺は、裾部の厚さと復元底径から推定する器形は特大品であり、他に類例が見当たらない。往時の彦山座主の栄華を示すものとも言えそうである。

しかしながら、これらの遺物に直接対応する遺構は、今回の調査範囲では検出していない。現地は谷であることから、北側に接する御下屋敷地区からの流入を考えるべきであろう。逆に、明確な遺構に乏しいこと、Ⅲ～Ⅴ区で遺物の出土が少ないことが、御下屋敷地区の遺構の範囲を限定するものと言えるかもしれない。

黒川院の実態解明として、朝倉市（旧甘木市）教育委員会によって、平成元年度以来、27次にわたる計画的な発掘調査が実施されてきた。これによって、それまで記録と伝承、現地に残る石塔類や神社奉納品からしか知り得なかった黒川院の存在は確実なものとなり、状況も徐々に明らかになりつつある。現在までのところ、調査次数のうちで報告されているのは半数程度であるため、全ての刊行が待たれる。また、黒川院に関する、民俗学的、文献史的、歴史地理学的、美術史的な各種の調査も実施したとのことであるが、これらについても公表は今後であろう。

今回の調査区に近接する御下屋敷地区と、それと隣り合う御館地区の発掘調査では、出土した豊富で質の高い遺物から、ここが黒川院の中心地区であったことは確実と思われる。ただし、遺構としては、御館地区の東半部で規模の大きな総柱建物跡を確認した以外は、建物の配置等の把握は充分ではなく、追加の調査が必要と思われる。さらに周辺には、今回も調査を実施した「竹林庵」を始め、「善福庵」「宝寿寺」「下門坂」「職正庵」「鍛冶屋」「鐘撞堂」「厚志庵」「厚源庵」等、黒川院関連遺跡を想起させる地名が残るが、遺構の存否も含めて確認はこれからの課題であろう。

黒川地区は、『筑前国続風土記』の段階で「深山幽谷なり」とあり、現在も大きくは変わらない。地形は傾斜しており、平坦地は少なく、そこに現在の集落が重複している。黒川院の実態解明は、小規模な調査の積み重ねとならざるを得ないが、今回の報告も、そうしたものの一つとなろう。

3. 南淋寺

1) 調査の経過

南淋寺は、朝倉市宮野の八坂山麓に所在し、この地域屈指の古刹として知られている。寺の創建は平安時代に溯るとされており、当初は市内長湊にあったが、しばしば筑後川の洪水被害に遭ったため、貞和2年（1346）少弐頼尚とその継母の寄進によって現在地に移ったとの記録がある。本尊の「木造薬師如来坐像」（重要文化財）を始め、「梵鐘」（県指定）、「日光・月光菩薩及び十二神将」「雲板」「医王山南淋寺縁起」「石造宝篋印塔」（市指定）等の多数の文化財を所蔵している。開山は最澄によるものとの伝承があり、古くは天台宗であったものが、現在地に移転の頃に曹洞宗に、近世以降は真言宗大覚寺派に属して今日に至っている。

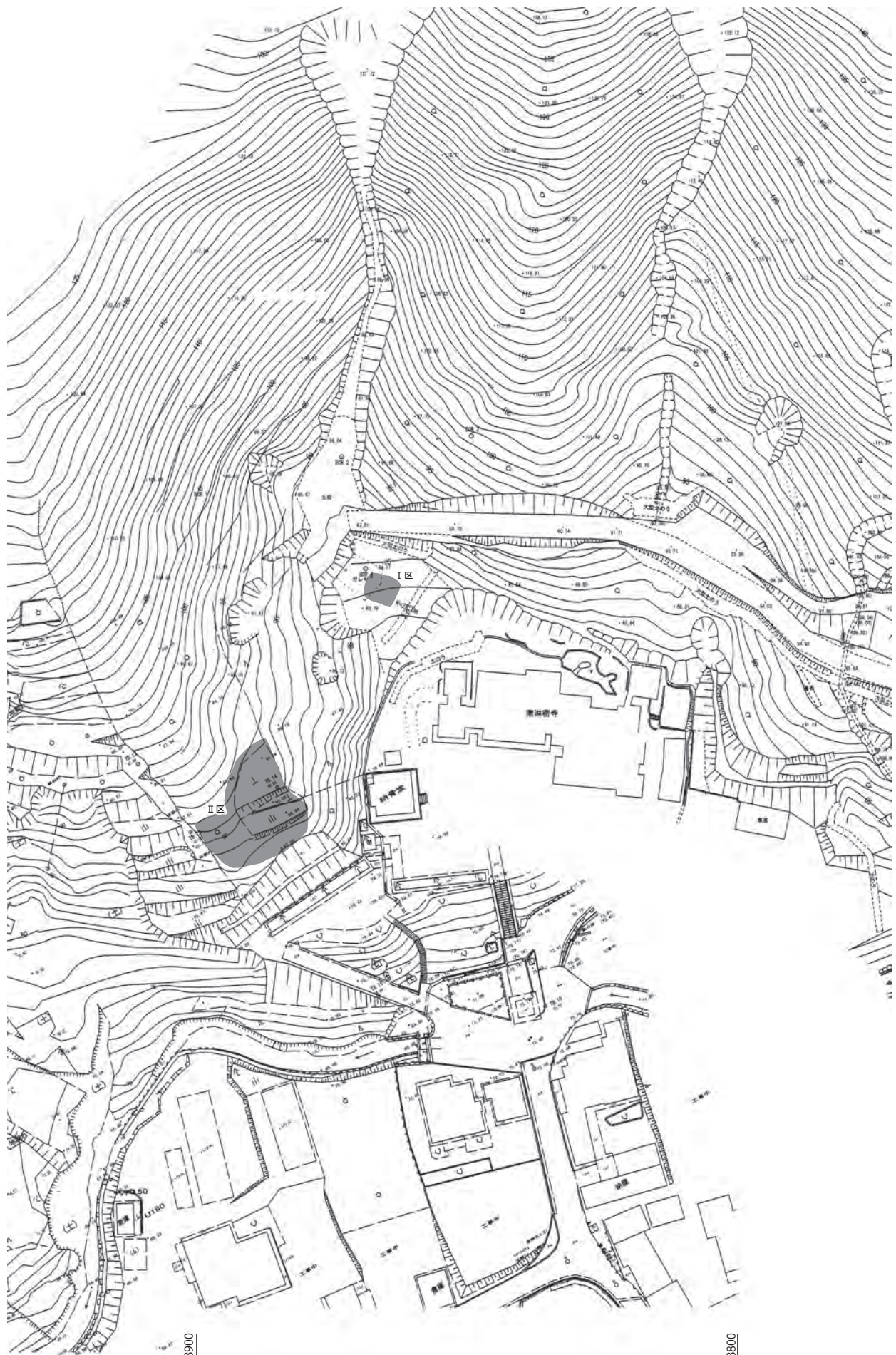
平成29年の九州北部豪雨の際には、南西側の谷から大量の水と共に土砂が本尊薬師如来を安置する宝蔵の床下にまで流れ込んだが、奇跡的に建物には被害が無かった。今回の調査は、「八坂谷川2砂防激甚災害対策特別緊急事業」で谷を塞ぐ砂防堰堤の築造と下流流路と法面の整備工事に伴うものであり、施工範囲のうち現地の状況と朝倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果から、2箇所を調査区を設定した。

I区は、境内の北西側にあたり、『筑前国続風土記』の記述や『筑前国続風土記附録』の挿図によればこの辺りに山王社があったとされていることから調査対象とした。II区は、境内の西側高所にあたり、尾根の先端部を3段に造成して墓地としている状況が確認できた。墓碑によれば、近世から明治期の主に南淋寺の歴代住職を葬ったものと考えられた。しかしながら、この墓地は昭和30年代に一度改葬を行っており、遺骨は境内の納骨堂に収めたという。今回の工事で墓地部分は全て掘削されることから、墓石を含めて前回の改葬で不十分な遺骨等は納骨堂に移して供養したいとの意向であった。調査期間的にも不十分で、しかも墓の帰属がほぼ明確であることから、今回の調査では墓地の現状を確認・記録する事に止め、原則全掘はしないことで寺側と合意を得た。調査面積は2箇所合わせて約500㎡、調査期間は令和2年（2020）1月17日～3月18日である。

調査は、1月17日からII区の表土を作業員による手作業での除去作業を開始し、測量作業と並行して墓石の写真撮影を順次行った。I区は2月4日から重機による掘削作業を開始し、清掃、



レーザー計測作業状況



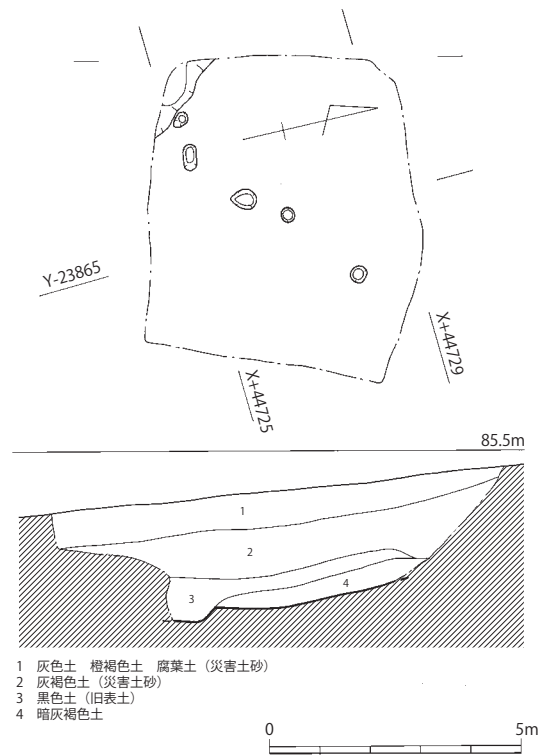
第 30 図 調査範囲図 (1/1,000)

写真撮影、実測作業を行った。掘削作業がほぼ終了した2月21日にⅡ区のレーザー計測作業を、2月28日にはドローンによる上空からの全体写真撮影を行った。その後、一部の墓の下部を掘削して確認を行い、3月17日には現地でのすべての作業を終了した。

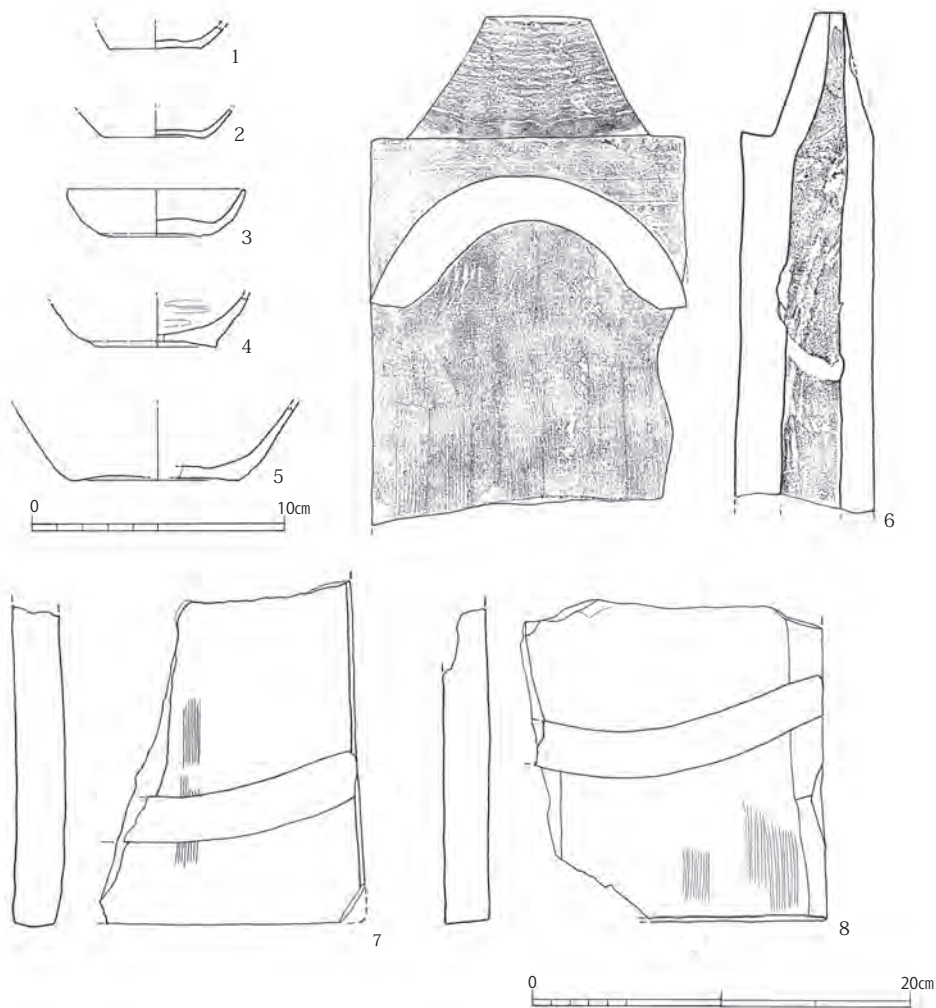
2) 遺構と遺物

Ⅰ区 (図版 39、第 31 図)

境内の北西側にあたり、先述の通り山王社がこの付近に存在したことが予想されるため調査を実施した。現状では境内より一段高くほぼ平坦になっていたが、ここには九州北部豪雨の際の災害土砂が厚く堆積しているとのことであった。重機で掘削した結果、現地表面から1.5～1.7mの深さまで災害土砂が堆積しており、その下位で旧地表面と考えられる



第 31 図 Ⅰ区遺構配置図、土層図 (1/150)



第 32 図 Ⅰ区出土遺物実測図 (1/3、1/4)

黒色土を検出し、暗灰褐色土を挟んで茶灰色の地山に到達した。地山面はほぼ平坦だがなだらかに南側に低く傾斜する。ピット状の落ち込みを検出したが、いずれも浅く、人為的なものとも言えない。建物の痕跡等は確認できなかった。またこの面からの遺物の出土もない。一方で災害土砂と考えられる中位の灰褐色土層中から少数の瓦と土器片が出土しており、調査区外からの流れ込みであろう。

出土遺物（図版 67、第 37 図）

1～5は土師器で、底部はすべて糸切り。1～3は皿で、1・2は胎土が比較的精良で、橙灰色を呈するのに対して、3は胎土に細砂粒と金雲母を多く含み、灰褐色である。1は底径 3.6cm、2は底径 4.1cm、3は復元口径 7.0cm、底径 3.8cm、器高 1.9cm。4・5は杯で、胎土、色調は1・2と同様である。ロクロ成形後未調整で、5はやや歪みが見られ、成形は粗い。4は底径 5.0cm、5は底径 6.8cm。

6～8は瓦。6は丸瓦で、玉縁を台形に作る。凸面は玉縁も含めて縄目タタキ痕が残り、板状工具によるナデとナデ調整で仕上げる。凹面には布目と吊り紐痕が残る。焼成は瓦質で、灰色から橙灰色を呈する。残存長 26.8cm、幅 16.6cm。7・8は平瓦で、両面に離れ砂状の砂粒が多く見られる。板状工具によるナデ調整で仕上げています。7は焼成は瓦質で、表面は灰色、内部は橙灰色を呈し、8は須恵質で、灰色である。

II 区

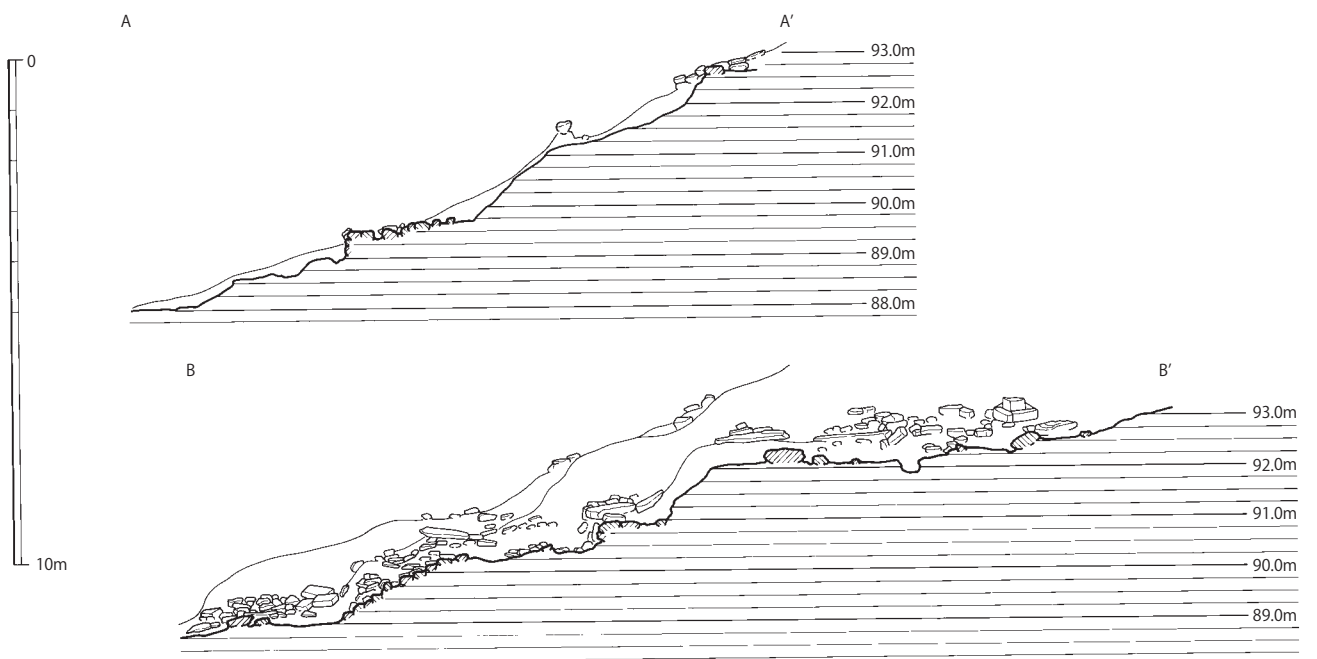
境内西側の尾根上にある墓地で、南側に低く 3 段に階段状に造成している。南側から登る道は墓地西寄りを通り溝状に掘削しており、これによって分断された西側部分は別区状になる。3 段のうち下段と中段の間には階段を設けており、それより西側は石垣を積んで擁壁としている。また、中段と上段の境には一見石垣状の積石遺構があり、後述するが、曹洞宗時代の住職墓の墓碑を組み込んでいた。

それぞれの墓は、ほとんどは現地で産出する緑泥片岩系の扁平な自然石を方形に並べ、墓碑も同じく緑泥片岩の自然石を使用しており、銘文を陰刻する。数箇所切石を使用したものもあり、墓碑を切石にしたものは銘文から女性のもものと判る。中段西側にある 10～12 号墓としたものは、石を長く長方形に並べており、あるいは集団墓かと思われた。ほとんどの墓は、墓碑の位置等から南側を正面とするものと考えられ、南北方向に延びる 10 号墓は特異な配置といえる。調査区内で、不確かなものもあるが、23 基の墓状の遺構を確認した。

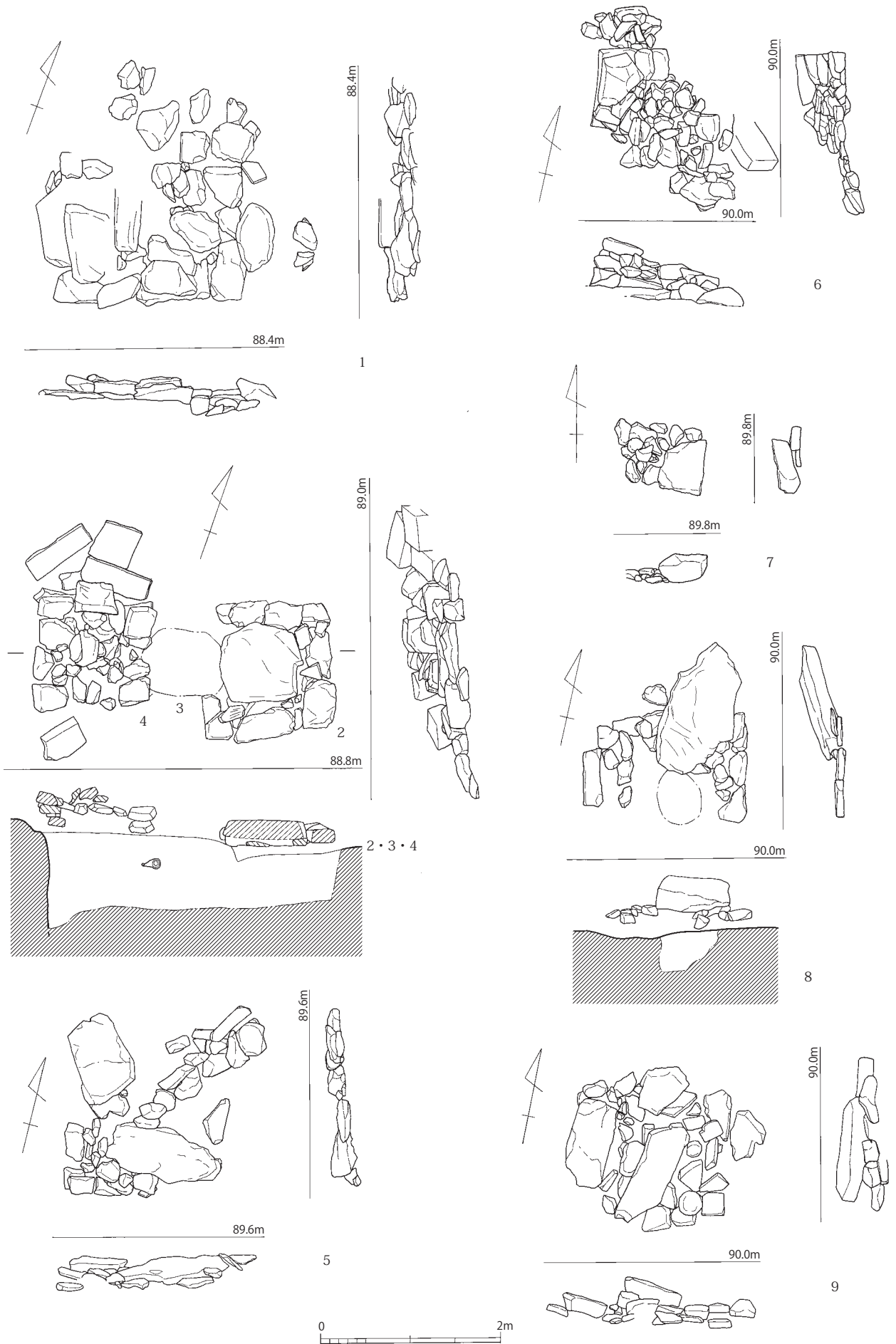
先述の通り、墓は寺が改葬し、墓石も寺で保管されることとなった。このため、調査では一部を除いて完掘はせず、現状の記録を取ることに止めた。実測は一部を除いてレーザー計測で行い、得られたデータを基にトレースして図示している。

1 号墓（図版 42、第 34 図）

下段東端にある。扁平な自然石を 2.1 × 2.4 m 程度の方形に並べる。石は 2～3 段に積む部分が確認できる。墓碑は失われており、被葬者は不明。



第33图 II区遺構配置図 (1/150)



第34图 1~9号墓实测图 (1/60)

2号墓（図版 42・43、第 34 図）

1号墓の西側に現状で2～4号墓が連続して並ぶ。1.7×1.8mの方形に自然石を並べる。中央部の石は、一辺1.5mの方形、厚さ0.3m程度の大型の石を使用し、その周りに小型の石を配置するが、西側は3号墓部分の攪乱のために失われている。3・4号墓を含めて下層を掘り下げたが、掘り形、3号墓との切り合い関係共に不明瞭であった。埋土は礫の混じった灰褐色土で固く締まり、地山かと誤認するほどであった。0.7m程掘り下げたが、墓壙の底には到達しておらず、出土遺物はない。墓碑は失われており、被葬者は不明。

3号墓（図版 43、第 34 図）

2号墓と4号墓の間の攪乱部分であり、墓とする確証は無かったが、骨壺が見えていたため墓とした。攪乱は現状で穴として残っており、昭和30年代の改装の際のものかと思われる。遺構面から0.3mの深さに骨壺があり下部から蓋と人骨が出土したが、状況から判断して原位置を留めているとは思えない。2・4号墓と共に下層を掘り下げたが、掘り形、切り合い関係ともに不明瞭であった。しかし、0.8m程度掘り下げたところで鉄釘がまとまって出土したことから、3号墓は木棺墓であったものと判断できる。上部にあった骨壺との関係は不明である。墓壙底部までは掘り下げていない。墓碑等は無く、被葬者は不明。

出土遺物（図版 67・68、第 37 図 1～4・20～30）

1は土師器の皿または杯。底部は糸切りで、内外面ナデ調整。復元底径5.0cm。

2は陶器の返りを持つ蓋で、骨壺として使用したものであろうか。蓋部は緩く膨らみ、返りは直線的に下方に延びる。上面のみに施釉し、褐色の飴釉の上から黄灰色釉を掛ける。高取系か。径7.3cm、返り部の径5.2cm、器高2.3cm。

3・4は、土師質の蓋付きの甕で、セットとなり、骨壺として使用されていた。3は、膨らんだ天井部の中央に釘状の摘みを持ち、縁部は屈曲してほぼ水平に開く。内面ヨコナデ調整、外面は回転ヘラケズリ調整後に縁部はヨコナデ調整で仕上げる。径14.6cm、摘み部径3.2cm、器高4.2cm。4も、外面回転ヘラケズリ調整、内面と受部はヨコナデ調整である。受部径15.5cm、高台径10.2cm、器高14.2cm。

20～30は鉄釘で、木棺に使用したものであろう。21～30では木質が残存しており、それによれば板の厚さは1.2～1.5cm程度である。29、30は板に対して斜めに打ち込んでいる。残りの良い20で長さ4.6cm。

4号墓（図版 43・44、第 34 図）

3号墓の西にある。1.3m四方の方形に自然石を並べる。四隅にやや厚みのある石を配置し、小型の石は2～3段に積んで全体の高さを揃える様子が観察できる。遺構の北側に切石4点が崩れた状態で検出されたことから、積石の上部に切石を並べ、その上におそらく切石の墓碑を立てたものと思われる。墓碑は失われており、被葬者は不明。

5号墓（図版 45、第 34 図）

中段東端にある。1m四方程度の方形に自然石を配置する。その中央部から東側に倒れた状態で、

長さ 1.2 m、幅 0.6 m 程の大型の自然石があり、墓碑かと思われるが、銘文等は確認できない。さらに墓の北西側にも長さ 0.9 m、幅 0.6 m 程の板状の石があるが、同じく銘文は確認できず、5 号墓に関係するものかも不明である。

出土遺物（第 37 図 5）

5 号墓の周辺から出土した。土師器の皿。器壁は薄く、底部は糸切り、風化が著しく調整は不明である。底径 4.0cm。

6 号墓（図版 45・46、第 34 図）

5 号墓の西側に、6～8 号墓が接して並ぶように配置している。1.4 × 1.3 m の方形に扁平な自然石を積む。北西側では、4 段、0.5 m 程度が残存しており、面を揃えた様子が窺える。5・6 墓の中間付近で、大型の石が半ば埋まった状態で検出した。銘文に

(1655)
明暦乙未天

𠄎 中興開山権律師快遍法師大和尚

七月初十日

とある。真言宗初代の快遍の墓碑であろう。（『南湊寺縁起』による。以下、縁起）しかしながら、位置的には必ずしも 6 号墓に伴う確証は無い。

出土遺物（第 37 図 6）

瓦質土器の火鉢で、内外面ハケメ調整である。

7 号墓（図版 46、第 34 図）

6・8 号墓の間にある。比較的小さく 1.0 × 0.7 m の方形に、南東角に大型の石を使用してそれ以外は小型の石を並べるが、西側はやや斜めに 8 号墓に接続する。墓碑等は不明。

8 号墓（図版 46・47、第 34 図）

6～8 号墓の最も西側で、階段の正面にあたる。1.4 × 1.2 m の方形に自然石を並べるが、中央部が攪乱を受けており、このため中央から南辺部の列石は失われている。墓碑は 1.5 × 0.8 m 程の扁平な石に、

(1823)
文政六年未

𠄎 当山前住権大僧都法印覚栄和尚位

二月三日示寂

とある。真言宗 8 代の恵林覚栄であろう（縁起）。

9 号墓（図版 47・48、第 34 図）

中段の階段西側にある。1.2 × 1.4 m 程の方形に自然石を配置するが、一部に五輪塔の水輪を石材として使用していることも確認できる。墓碑は 1.2 × 0.4 m 程度の割石を使用し、

(1710)
宝永七庚寅天

𠄎 唯心妙正信女靈位

閏八月廿八日

とあり、女性のものである。

9号墓の西辺に接して、0.95 × 0.45 m程の墓碑があり、

禪終

堯悦和尚

とあり、曹洞宗 18 代の堯悦の墓碑であろうが（縁起）、9号墓とは直接関係がないものと考えられる。

10号墓（図版 48・49、第 35 図）

中段の中央部にあり、溝状に掘削する墓道の東側上端に接する。遺構は南北に長く、1.1 × 3.0 m の方形に石を並べ、周囲に比較的大型の石を配置し、各辺に面を揃えて積んでいる。また、南端部は擁壁の石垣と一体となる。西半部を掘り下げて確認したところ、石の直下は灰色～暗灰褐色土、下層は礫混の灰褐色土であり、0.6 m 程掘り下げたところで一部が岩盤に到達したため終了した。遺物や遺骨の出土もなく、墓碑等も見当たらない。遺構の一部が石垣と繋がっていることから、あるいは墓ではなく墓域を区画する積石等である可能性もある。

出土遺物（図版 68、第 37 図 7・8・31・32）

7・8 は土師器の皿または杯の底部である。器壁は比較的薄く、糸切りである。底径 5.1cm、5.3cm。31 は用途不明の鉄製品である。楔状であるが、狭端部には面を持ち、反対の広端部は丸味を持つ。長さ 5.0cm、最大幅 1.6cm、最大厚 1.2cm。32 は銅銭で、風化が激しいが「祥符元宝」であろう。

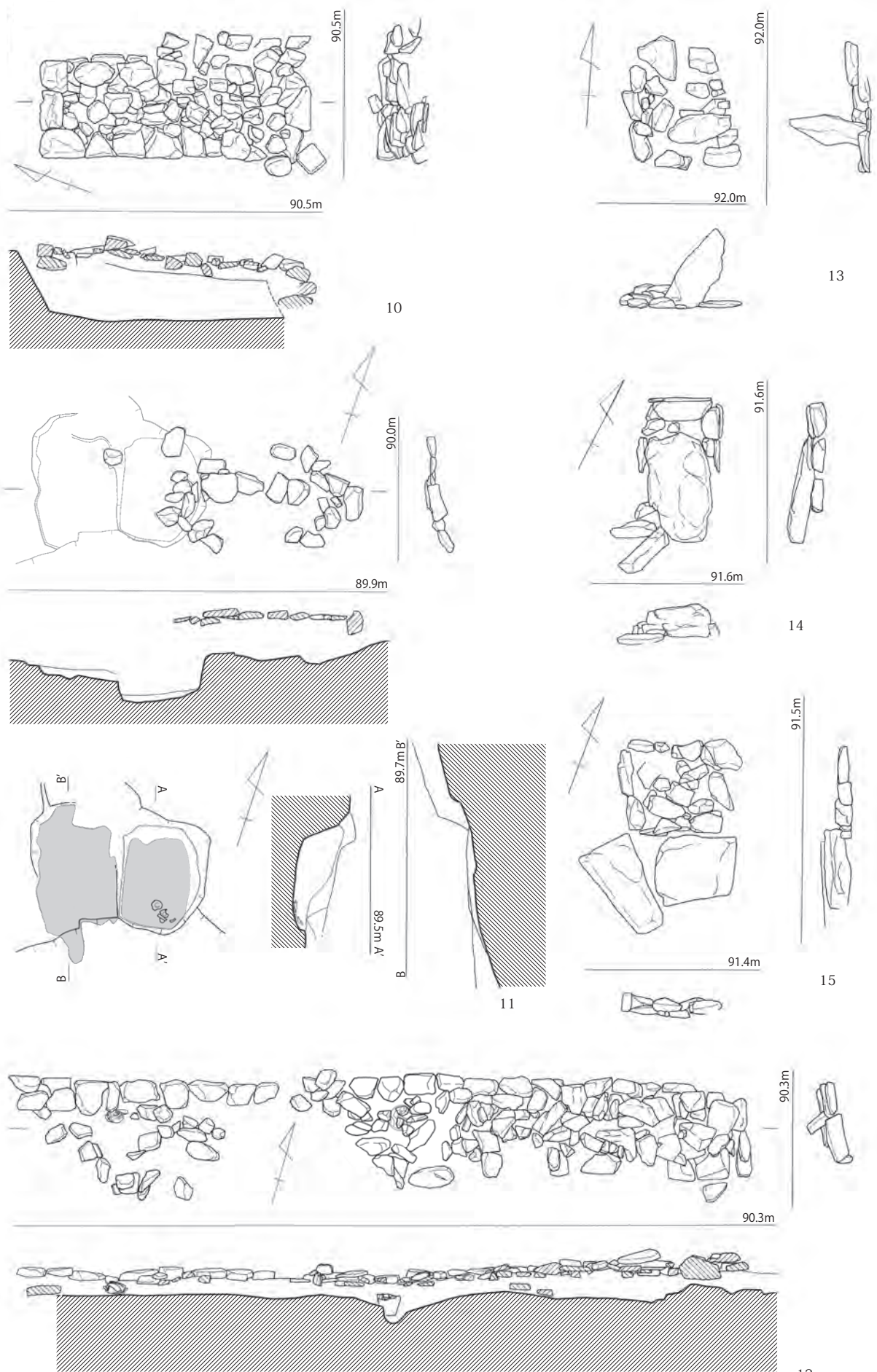
11号墓（図版 49～51、第 35 図）

中段の、墓道で隔てた西区画にある。12号墓の南側にあり、11・12号墓がほぼ平行して東西に延びる。ただし、12号墓と比較して短く、石の並び方に規則性も見られない。当初は墓ではない可能性も考えられた。2.2 × 1.4 m 程の範囲に扁平な自然石が乱雑に並ぶが、高さは比較的揃っている。石列の南半部を掘り下げたところ、下層は灰褐色～暗灰褐色土で、0.5 m 程で岩盤に到達した。

石列の西側の一部重なる位置で炭化物交じりの埋土を持つ土壌を検出した。土壌は、東側約半分が約 0.2 m 一段低い二段掘り状になっており、全体で東西 1.95 m、南北 1.4 m で、東部分は東西 1.0 m、南北 1.4 m、深さ 0.45 m 程の規模である。上段には約 10cm の厚さに炭化物粒が堆積し、下段は炭化物混じりの埋土であった。下段の南側の床面と接する位置で、土師器杯 2 点と漆器の断片を検出した。全体で火葬墓と考えられ、下段が墓壙、出土遺物は副葬品であろう。また、東側の石列は、並び方は乱雑ではあるが、火葬墓の主軸と一致する。ここでは関連する遺構と見ておきたい。

出土遺物（図版 67・68、第 37 図 9～12、33～38）

9・10 は下段土壌の埋土中から、11・12 は床面に置かれた状態で出土した。4 点とも土師器の杯だが、9 は小片のため細部は不明。10～12 はほぼ同様の器形で、器壁が薄く、体部が直線的に開き、ロクロ目が残る、いわゆる大内系の特徴を示すが、体部外面と内面上位はナデ調整でロクロ目を消している。口径 10.0～10.6cm、底径 4.3～4.7cm、器高 2.3～2.4cm。33～35 は鉄製品。33 は釘で、長さ 5.7cm。34 は断面円形の棒状の鉄製品で、両端部を欠失する。残存長 6.5cm。35・36 は土壌上段の炭化物中から、37・38 は下段の灰色土中から出土した。35 は釘で長さ 4.1



第 35 图 10 ~ 15 号墓实测图 (1/60)

cm。36～38は銅銭であるが、36・37は文字の無い私鑄銭のようである。38は風化が激しいが「元祐通宝」であろう。他に下段土壌の床面から漆器の漆膜が出土し、持ち帰ったが、図示できる状態でない。

12号墓（図版49・52、第35図）

中段西区画、11号墓の北にあり、北側の上段との境の斜面下端に沿って東西に延びる。西側はさらに調査区外にまで延びるが、現状で8.1×1.2mの規模である。周辺部の石は各辺に面を合わせて、内部は乱雑に並べる。また、西半部南側は崩れて石が失われている。

遺構の南側半部を掘り下げたところ、石の下層は灰褐色土を挟んで0.1～0.2m程で岩盤に届いた。2箇所骨壺を検出した。

出土遺物（図版68、第37図13～17）

13～15は土師器で、3点とも杯であろうか。13は体部で器壁が薄い。14・15は底部で、底径が3.6cm、3.8cmと小さい。器面の風化が激しいが、15では内底部にロクロ目が良く残り、体部内外面はナデ調整で消しているようである。

16は無釉陶器の甕で、骨壺として使用したものである。口頸部は短く、最大径は体部の上位にある。内外面ヨコナデ調整で、底部周辺のみヘラケズリ調整を行う。肩部には、5本一単位の櫛状工具による波状文をめぐらす。全周はしておらず、2/3程の範囲に施す。灰色で、一部黄褐色を呈する。備前系か。口径11.1cm、最大径19.7cm、底径11.9cm、器高22.8cm。

17は褐釉の三耳壺で、骨壺として使用された。体部の最大径は上位にあり、頸部で小さく締まる。肩部に3本の沈線をめぐらし、その位置の3箇所に耳を貼り付ける。外面はヨコナデ調整の後に上位約2/3の範囲に暗褐色釉を施す。体部内面にはタタキ調整の際の当具痕が青海波状に残り、頸部内面は同じく施す。胎土は灰色～灰褐色で、器壁は薄い。最大径26.0cm、底径15.0cm、残存高28.5cm。

13号墓（図版53・54、第35図）

上段南東隅にある。1.1×1.4mの方形に扁平な石を並べ、南寄りの位置に尖頭の自然石の墓碑を立てる。

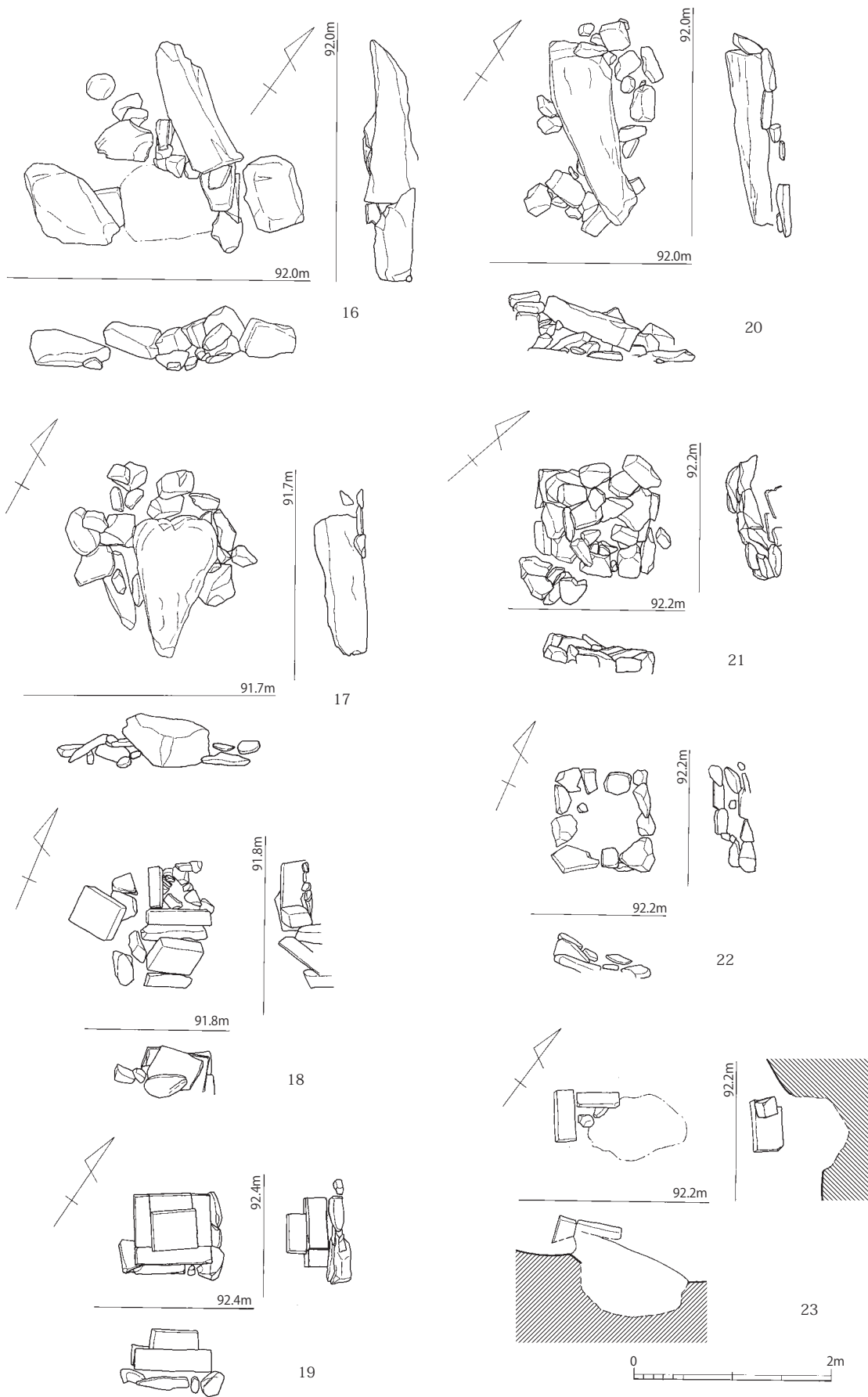
天台終

仁能法師

と詠める。縁起によると、仁能は確かに天台宗時代最後の住職であるが、南淋寺が現在地に移転したのは後継者の立翁宗本が曹洞宗に改めて以降のことであり、後の曹洞宗時代の墓碑が原位置を留めていない中でこれだけが残っている点、形状的には近世の他の墓と変わらない点などから違和感を覚える。下部の調査を実施しておらず、不明と言わざるを得ないが、あるいは墓ではなく供養塔的なものかもしれない。

14号墓（図版54・55、第35図）

13号墓の北西側に位置する。0.9×0.8m程度の方角に石を並べ、中央部に倒れた状態で1.2×0.7m程の墓碑がある。銘文は、表が、



第36图 16~23号墓实测图 (1/60)

夬 大法師玄瑜闍梨位

裏には、

⁽¹⁸²¹⁾
文政四年巳二月四日

とある。縁起には名が見当たらない。時期的には8代の覚栄(8号墓)の葬られた2年前にあたる。

15号墓(図版55、第35図)

上段東側、13号墓の西側にある。1.1 × 1.0 mの方形に石を並べる。遺構の南側に接して2点の大型石があり、南西側の石は1.1 × 0.6 m程の上部の幅の狭い墓碑で、

⁽¹⁶⁸⁴⁾
貞享元甲子年

夬 当寺密宗二世宣順法印大和尚位

二月十有三日

とあるが、縁起では「廿一中興第三長遍宣俊闍梨」としている。

もう1点、石列の南側にある石は0.9 × 0.7 m程の大きさである。位置と大きさから考えて、石列の上にこの石を敷き、墓碑を立てたのではないか。

16号墓(図版56、第36図)

上段の北東隅にある。方形に石を並べるが、中央部に攪乱を受けており、昭和30年代の改装の際のものかと思われる。遺構の北東に接して倒れた状態で1.4 × 0.4 mのやや尖頭の墓碑があり、底面にはセメントが付着していることから、新しく立て直されたものが再び倒れたものであろう。表面に、

夬 当山中興五世亮実和尚

右側面には、

現住晨明代

とある。

また、攪乱内部に切石の墓碑が残されており、

素藪明声善女塔

とあり、女性のものである。形状と位置からは18・19・23墓の何れかに伴うものかと思われる。

また、それ以外にも、16・19号墓間に墓碑があり、

明治十丁五年

夬 当山中興阿闍梨玄□大和尚

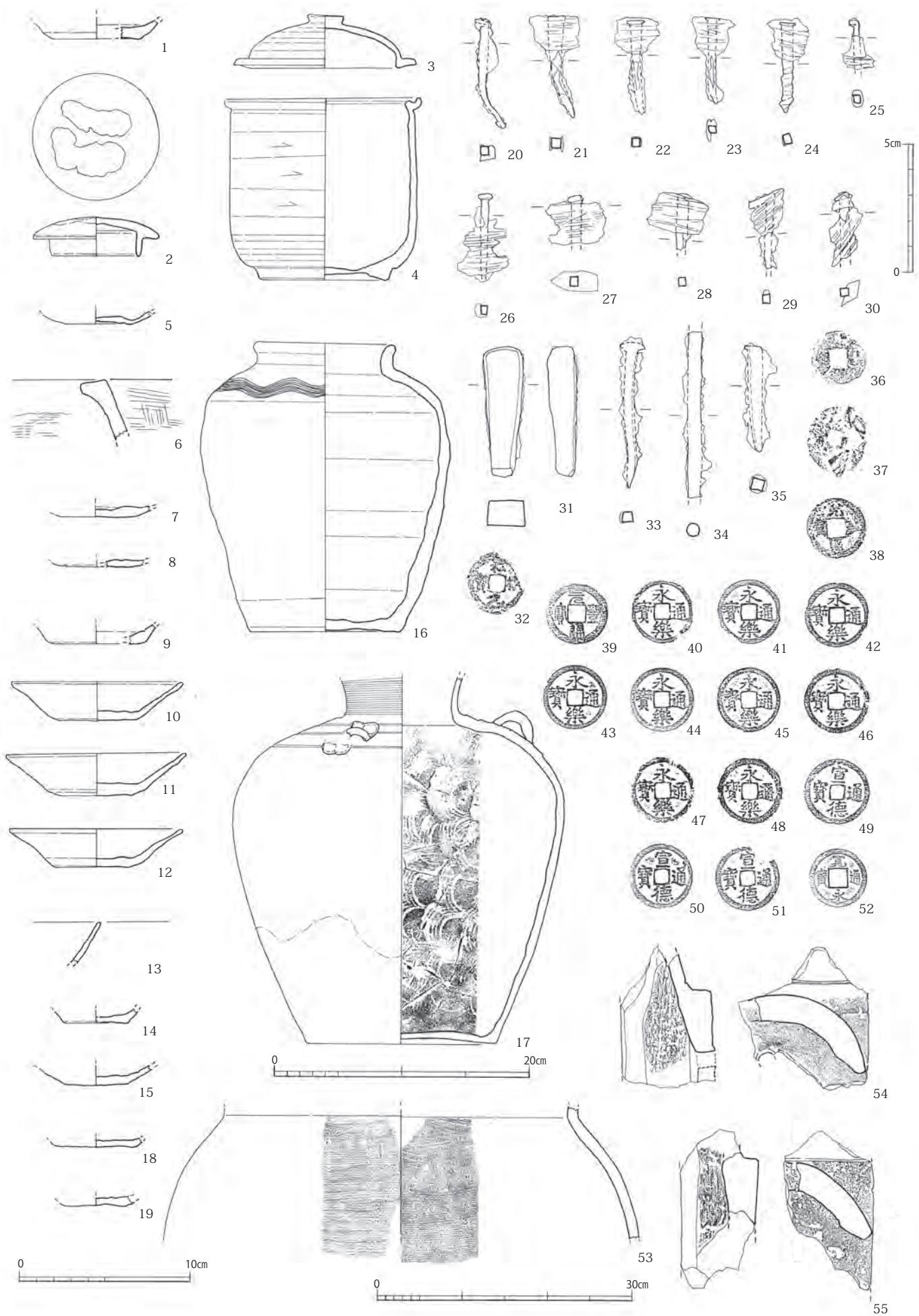
六月十日 入寂

とある。しかし、これに伴う墓は確認できておらず、本来この場所にあったものかは不明である。

17号墓(図版57、第36図)

上段の15号墓の西側にある。1.5 m四方形の方形に自然石を乱雑に並べ、1.4 × 0.9 mの三角形の石を墓碑として使用する。

⁽¹⁷²⁸⁾
享保十三戌申年



第37図 II区出土遺物実測図 (1/3、3・4・16・17・54・55は1/4、20～52は1/2、53は1/6)

㊦ 南淋密三世堯栄大徳

九月二十一日

とある。縁起では「廿二中興第四空真堯栄密使」となっている。

18号墓（図版 58、第 36 図）

上段北側の一角に 3 基の切石を使用した墓、18・19・23 号墓が密集して作られる。18 号墓はその南東側にある。0.7 × 0.6 m の方形に自然石を並べ、現状では上部に方形板状の切石 2 点が L 字型に立てられている。本来は 19 号墓と同様に、石列の上に板状切石 4 枚を口字に組んで中央にも切石を敷いたものであろう。崩れた状態で石材が残存している。

また、19 墓との中間付近に切石の墓碑がある。

真如院椿嫂寿延禅尼（正面）

(1764)

明和元年甲申二月廿三日（右側面）

足立宗温之室行年七十六（左側面）

とあり、女性のものである。墓碑は原位置から移動しており、18・19・23 号の何れの墓に伴うかは不明であるが、足立宗温の墓は 21 号墓と考えられることから、あるいは隣に位置する 18 号に伴うものか。

19号墓（図版 58、第 36 図）

18 号墓の西北側、斜面裾部に位置する。1.0 × 0.9 m の方形に自然石を並べ、上部に板状の切り石 4 枚を口字に立て、中央に同じく切石を敷いている。本来この上に墓碑が乗っていたであろうが失われている。付近で検出した 2 点の切石の墓碑から判断すれば、切石を使用した墓は女性のものである可能性が高い。

20号墓（図版 59、第 36 図）

17 号墓の南西側にある。1.1 m 四方程度の方形に自然石を並べ、1.9 × 0.6 m の尖頭の自然石を墓碑に使用する。

㊦ 当山第四世潤山密師塔

とある。縁起では 5 代となっており、元禄から享保にかけての住職である。

21号墓（図版 59・60、第 36 図）

20 号墓の北側にあたる。1.2 × 1.0 m の方形に扁平な自然石を 2～4 段程度積み上げる。傍らに 1.9 × 0.6 m の尖頭の墓碑があり、この墓に伴うものであろう。

宗温寿康医士之墓（表）

(1669)

足立宗温者寛文九年□己酉春五月六日□□本朝□岡色□

(1689)

長学医於鶴原先生元禄二己巳□典□父宗範□居二本郡比

良松邑其□平宗範□□也宗温為久也□□□母撫印領

有孝慈也延享⁽¹⁷⁴⁵⁾二乙丑冬十二月十六日保天□□□□寿七十七(裏)
とある。延享2年は、縁起によれば真言宗6代豊岑の頃である。

22号墓(図版60、第36図)

上段に設けられた13～23号墓の中で南西隅にあり、南北に延びる墓道の東上端に接する。1.0m四方の方形の周囲に自然石を並べる。墓の南側に0.8×0.6m程の墓碑があり、これに伴うものである。

享保十六⁽¹⁷³¹⁾辛亥年

奉心房弁識墓

四月十有七日

とある。縁起には名がない。

23号墓(図版61、第36図)

近接して作られた切石の墓18・19・23号墓の中で南西側に位置する。現状で切石がL字型に残存しているが、遺構の北東側は攪乱を受けており失われている。昭和30年代の改葬の際のものかと思われる。

階段(図版44、第33図)

下段と中段を結ぶ階段で、東側区画のほぼ中央に位置し、1・2号墓間から登って正面に8号墓がある。階段は幅約1.3mで、墓と同様に緑泥片岩系の石を各段横位に2～4個程度並べ、合計10段に作る。東側は縦位に3石を並べる。西側は石垣を積んでおり、逆L字形に下段側にも1m程作って擁壁としている。

1号積石遺構(図版61、第38図)

東区画の中段・上段間の斜面下端に沿って作られる。長さ9.8m、幅1.3m程で、自然石を横位に3～5段程度積み上げる。遺構の東半部は北の斜面側にも面を揃えていることから、擁壁のためではなく、中段と上段を区画する積石といえる。

さて、注目すべきなのは、遺構の最上段に中世の曹洞宗時代の3代から17代までの住職の墓碑を、東からほぼ順番に、表を下にした状態で並べ、積石の一部としていることである。それぞれの墓碑の石は近世の真言宗時代のものと比較すると小振りで、簡素な印象を受ける。順に、

第三代

(圭峰稻陰カ)

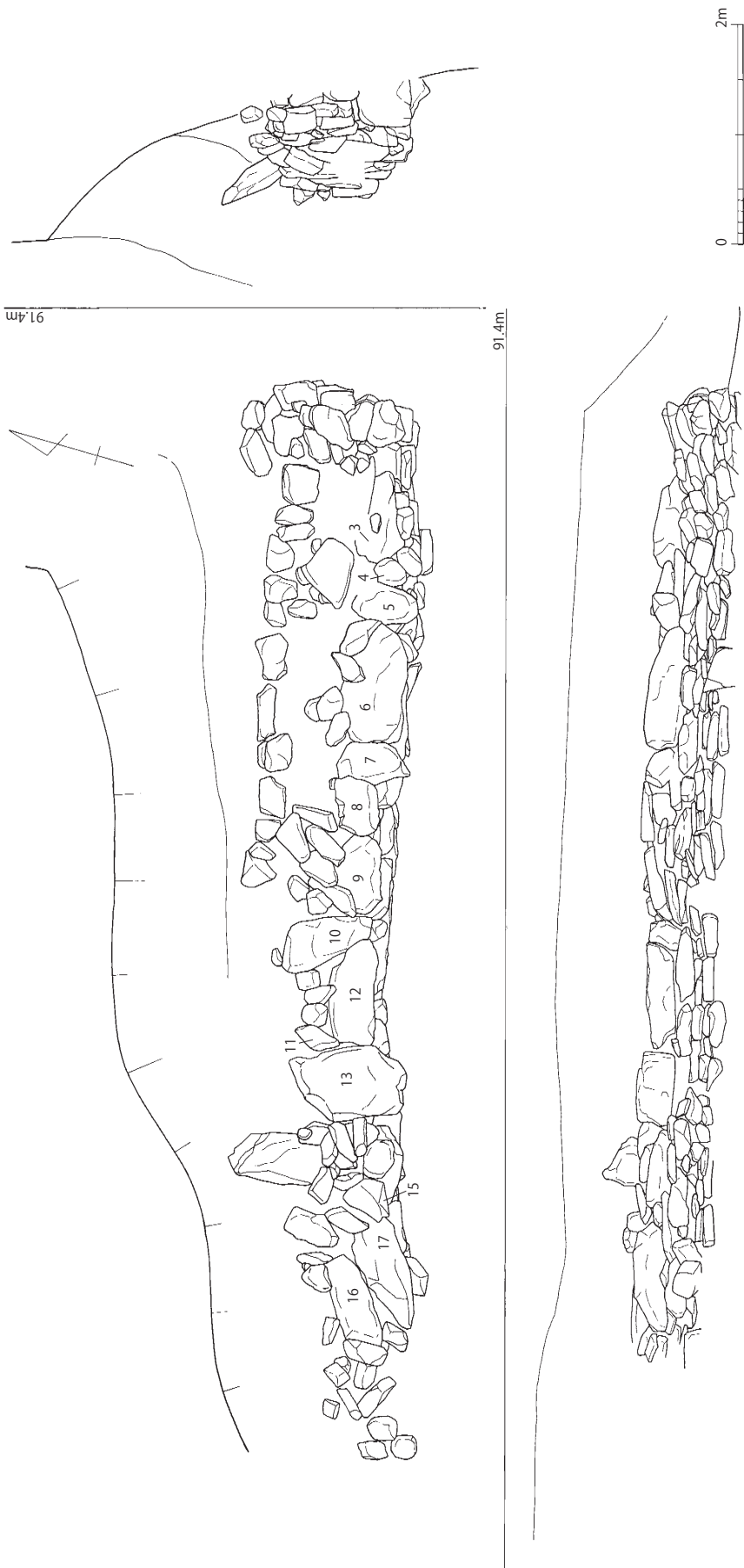
□□□□和尚(図版62-1)

第四世

方山和尚(図版62-2)

五代

南香怨山和尚(図版62-3)



第 38 図 1 号積石遺構実測図 (1/60)

六代

宙庵常宇和尚（図版 63-1）

七世

正泉宗澤和尚（図版 63-2）

八代

道可和尚（図版 63-3）

玄祝栄和尚（第九代、図版 64-1）

十代

諦庵宗察和尚（図版 64-2）

十一代

（紹曇カ）
□雲 和尚（図版 64-3）

十二代

華嶽陽和尚（図版 65-1）



積石遺構中の墓碑確認作業（左奥は南淋寺住職）

十三□
(心覚カ)
□ □ 固芳和尚 (図版 65-2)

(五カ)
十□代
幸雲慶和尚 (図版 65-3)

十六代
第翁麟及和尚 (図版 66-1)

十七代
(禪立カ)
□ □ 和尚 (図版 66-2)

と読める。初代、2代の墓碑は不明。14代の鷲伝のものも見当たらないが、縁起には「入寂不分明、里諺に言う、筑後国草野邑千光寺に転住すと云云」とあり、記述と符合し興味深い。曹洞宗最終18代の堯悦の墓碑は先述の通り9号墓の傍らにあり、積石遺構の西端にあったものが移動した可能性もある。ただ、縁起には「慶安元戊子年福府大湖山安国寺に転住せり。仍って当山に石碑なし」とある。本来墓碑ではなく、供養塔的なものであったのかも知れない。

これらの墓碑を積石遺構の最上段の石材として組み入れたことは、状況から判断して明らかに意図的である。近世のある時期に、それまで別の場所にあったこれらの墓碑を一箇所に集めて構築した遺構と考えられる。

それ以外に、上段西区画にも石が集中する部分があり、その中には五輪塔の一部も含まれる。積んだような形跡の箇所もあり、墓の存在も含めて遺構の存在が予想された (図版 66-3)。しかしながら、入念に遺構検出作業を行った結果、遺構の存在は確認できなかった。地形的に造成されていることは間違いないが、ここでは遺構としては取り扱わなかった。

その他のⅡ区出土遺物 (図版 68、第 37 図 18・19、39～55)

18・19は土師器杯の底部。器壁は薄く、底部は糸切り、18の内底部にはロクロ目が顕著に残っている。12号墓15の土器と同様のつくりである。

39～52は銅銭で、東区画の中段と下段から出土した。39は「元豊通宝」、40～48は「永楽通宝」、49～51は「宣徳通宝」、52は「寛永通宝」である。

53は西区画上段から出土した、無釉の大型の甕。内外面ハケメ調整で、固く締まる。備前系か。復元径部径 42.0cm、復元最大径 56.5cm。

54・55は東区画から出土した丸瓦である。2点とも、凹面に残るのは布の痕跡であろう。54は、目釘孔があり、軒瓦の可能性もある。54は須恵質で灰色、55は瓦質で器面が風化しており、灰褐色を呈する。

3) 小結

以上が南淋寺で実施した発掘調査の記録である。

I区は、『筑前国続風土記』の記述や『筑前国続風土記附録』の挿図によればこの辺りに山王社の祠があったとされており、建物の痕跡を始め手掛かりを掴もうと調査対象地とした。しかしながら、調査の結果ではこれに関する遺構・遺物とも出土していない。

II区は、残された墓碑の銘文から、主に近世の南淋寺歴代住職の墓地であることが確認できていた。寺側の意向では遺骨・墓石を含めて境内の納骨堂に移してお祀りしたいとのことであったので、調査は表土を除去し墓の配置を確認して現状を記録する事に止めた。しかし、既に骨壺が見えていた3号墓を含む2～4号墓と、形状が特殊な10～12号墓については、下部を掘削して構造と性格を確認することとした。

調査の結果、この墓域では、不確実な10号墓を含めて23基の墓を検出した。昭和30年代に改葬を終えているとのことだったが、その痕跡が確認できたのは3・8・16・23号墓の4基のみであった。

今回の調査で、銘文を持つ墓碑を29点検出した。それらによれば、南淋寺が現在地に移転して以来の中世の曹洞宗時代の住職墓碑は、東区画中央にある積石遺構の最上段の石材に組み込む形で集められていた。これらの墓が本来どこに設けられていたか、ここに集めた目的、遺構の性格ともに不明である。今回の調査範囲で中世に溯る遺構は、西側区画にある11・12号の2基3名分の墓であるが、これらと墓碑との関係もまた不明である。

それ以外は、天台宗時代の仁能の墓（供養塔か）は別としても、近世以降の真言宗時代に属するものと考えられる。住職墓は、初代（6号墓）、2代（15号墓）、3代（17号墓）、4代（20号墓）、5代（16号墓）、8代（8号墓）が残る。14号墓の玄瑜という僧侶は、8代覚栄の2年前に葬られたことになり、寺での立場等は不明。6代、7代と、9代以降の墓碑は見当たらないが、『南淋寺縁起』には、2・6・9・11代は後に別の寺に転院、10代は後に帰俗する、との記述がある。墓碑銘から判断する限り、8代を最後にこの墓地は少なくとも一旦は使用されなくなったようである。

さらに、足立宗温（医師）と、その妻を含む少なくとも3名の女性がここに葬られていると考えられ、墓地が南淋寺の歴代住職その他の僧侶だけのものではなかったことを示すものである。

以上、II区については原則的に墓を完掘しないという制約付きでの調査であったが、一定の成果は出し得たものと考えている。南淋寺は朝倉地域屈指の古刹として良く知られているが、その歴史については、主に『南淋寺縁起』と、現在寺に伝わっている仏像その他の文化財のみから語られている。今回の調査では、『南淋寺縁起』の内容と符合する部分が多い中でも、いくらかの齟齬も見られ、また新しい知見も提示できた。今後は、さらに多方面の資料を駆使しての検証が必要になるものと考えられる。

圖 版

1 竹林庵跡と広蔵山
(西から)



2 竹林庵跡と黒川院跡
(西から)



3 竹林庵跡と黒川下流
方面 (東から)





1 竹林庵跡と黒川上流方面（東から）



2 2・3・4区（上が北）



3 3区土層断面（南から）

1 5区2トレンチ
(西から)



2 同 (西から)



3 1トレンチ (北から)





1 同 (東から)



2 3トレンチ (東から)



3 同 (西から)



1 4 トレンチ (東から)



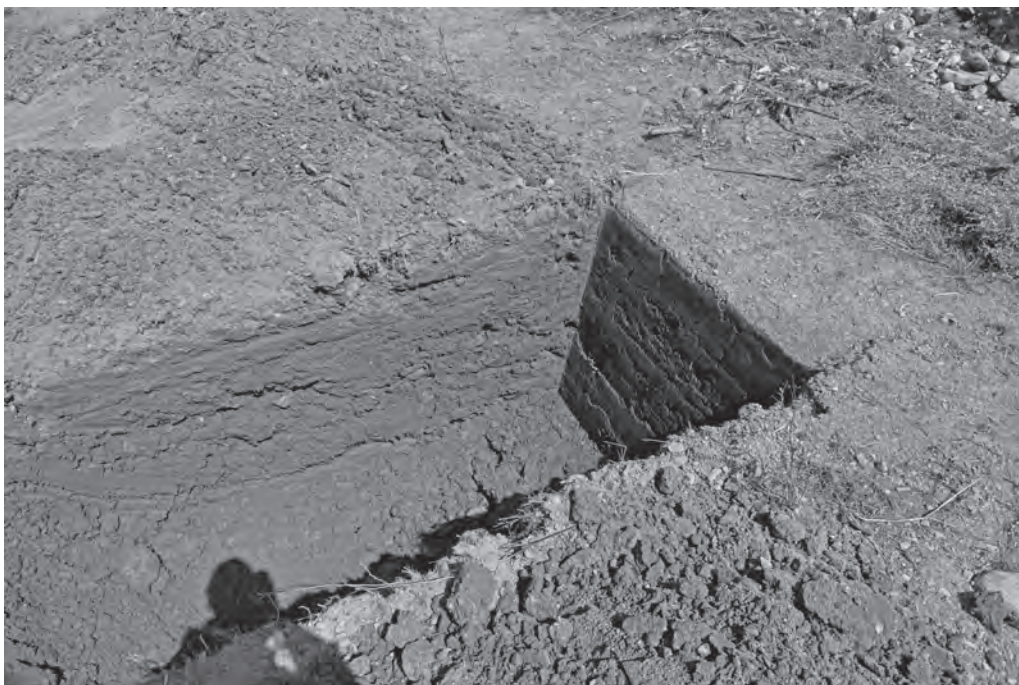
2 同 (東から)



3 5 トレンチ (北から)



1 同 (東から)



2 8区1トレンチ
(東から)



3 2トレンチ (南から)



1 1トレンチ (北から)



2 2トレンチ (東から)



3 3トレンチ (南から)



1 同 (西から)



2 7区1トレンチ
(東から)



3 同 (東から)

1 造成土上面
(上が東)



2 造成土土層断面
(西から)



3 造成土下層
(上が東)





1 同（西から）



2 同（南から）



3 同遺構検出面
（北から）

1 同（西から）



2 石垣下部（南から）



3 調査区北壁と
5区石垣
（南から）





1 9区第一段階検出
状況（西から）



2 27・29層上面
（西から）



3 同（東から）



1 完掘状況（西から）



2 同（東から）



3 調査区北壁土層
断面 1（南から）



1 同 2 (南から)



2 同 3 (南から)



3 同 4 (南から)

1 同5 (南から)



2 調査区北東壁土層
断面 (南から)



3 調査区西壁土層
断面 (東から)





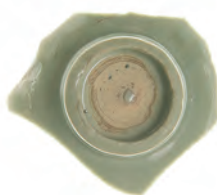
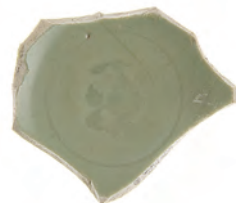
第10图1



第11图4



3



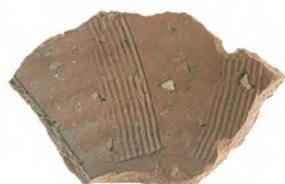
4

5

8



2



4

5

8

8



10

18



20



19



21



22



23



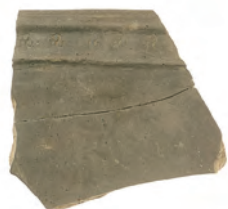
24



25



26



9



8

12



10



11



13



12



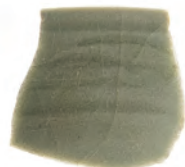
14



15



第11图1



7



16

1 黒川院跡遠景
(東上空から)

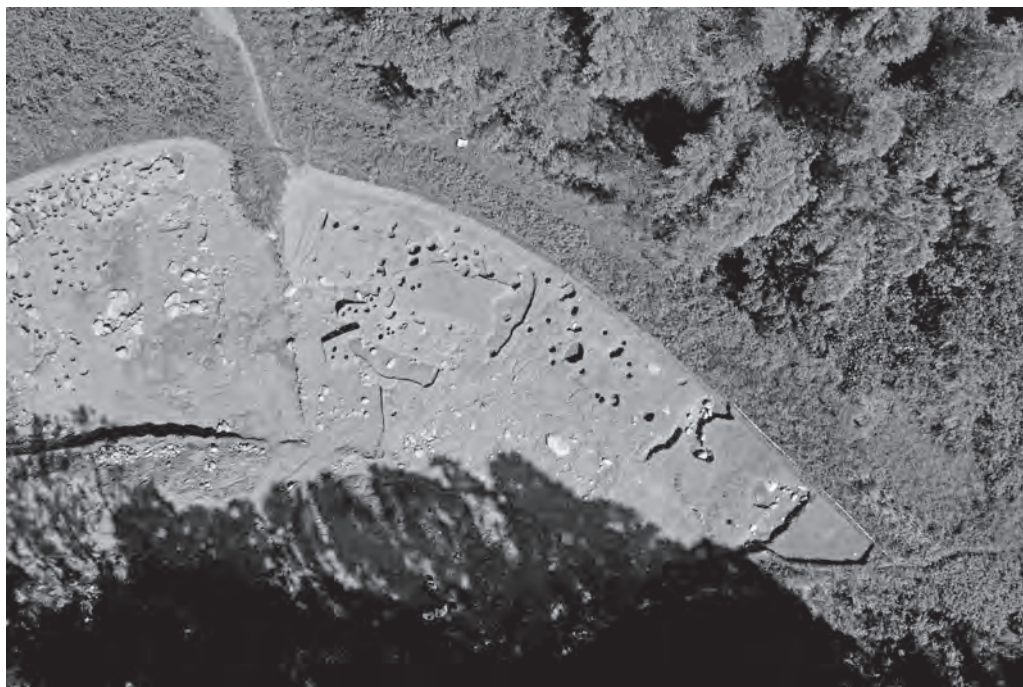


2 黒川院跡全景
(東上空から)



3 同 (上空から)

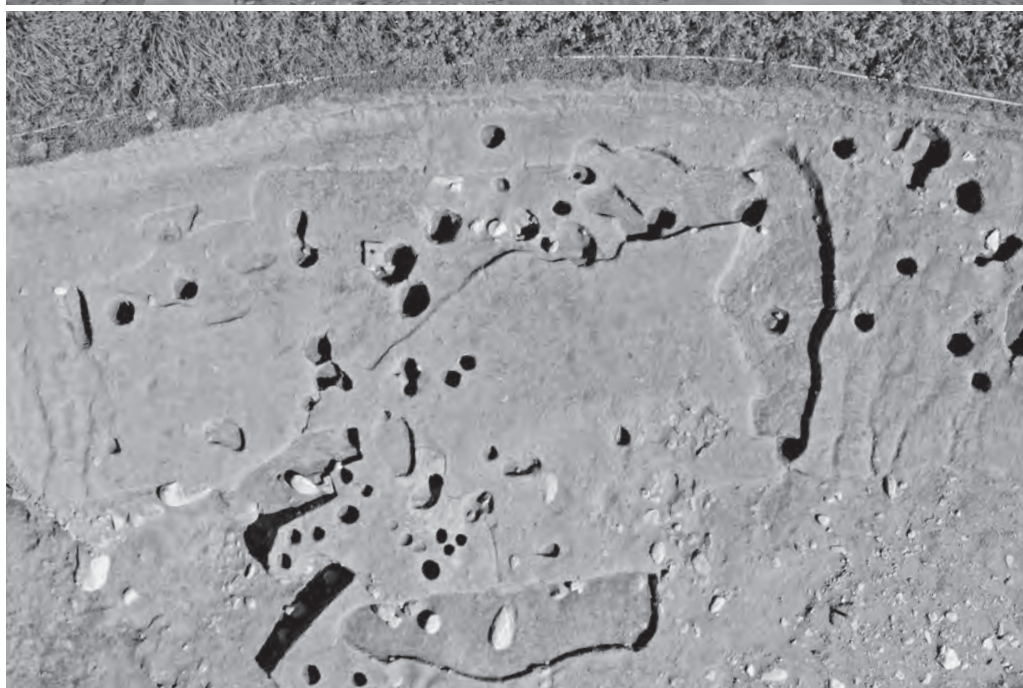




1 I区全景(上空から)



2 同(東から)



3 1号溝状遺構
(上空から)



1 同 (南から)



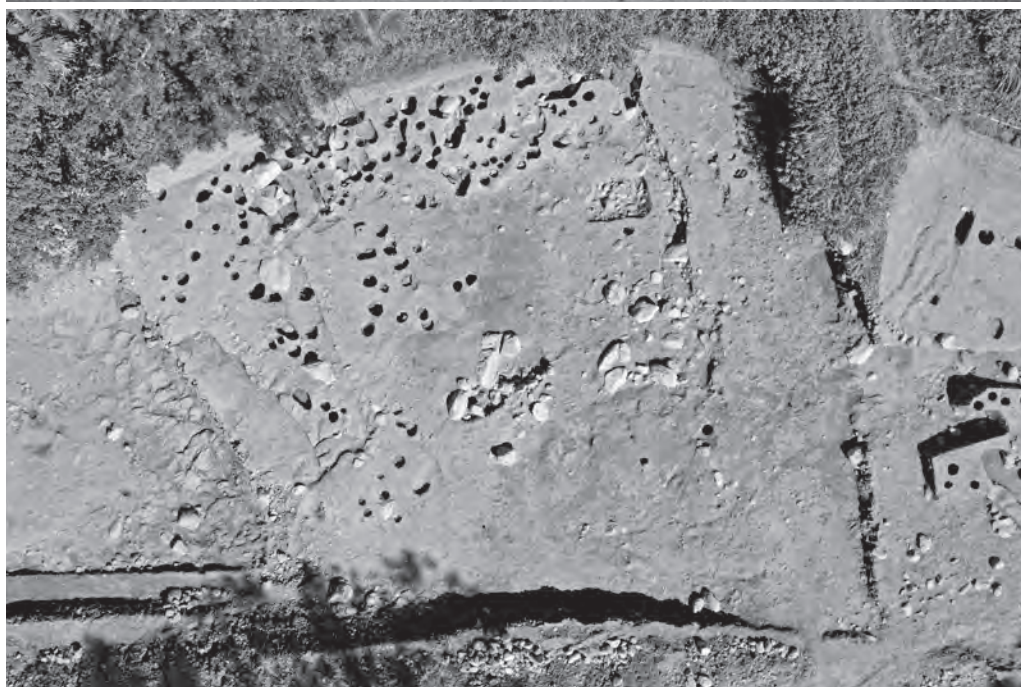
2 同 (東から)



3 1号溝土層断面A
(南東から)



1 同B (南から)



2 II区全景(上空から)



3 II区北壁土層
(南東から)



1 III区全景(西から)



2 調査区西部(北から)



3 調査区東部(北から)



1 P1,2,4,8 (西から)



2 P4 断面 (南から)



3 調査区東壁土層断面
(西から)

1 調査区北壁西半部
(南から)



2 調査区北壁東半部
(南から)



3 IV区・V区西部
(南から)





1 V区調査区壁土層
断面1(南から)



2 同2(南から)



3 同3(南から)

1 同4 (南から)

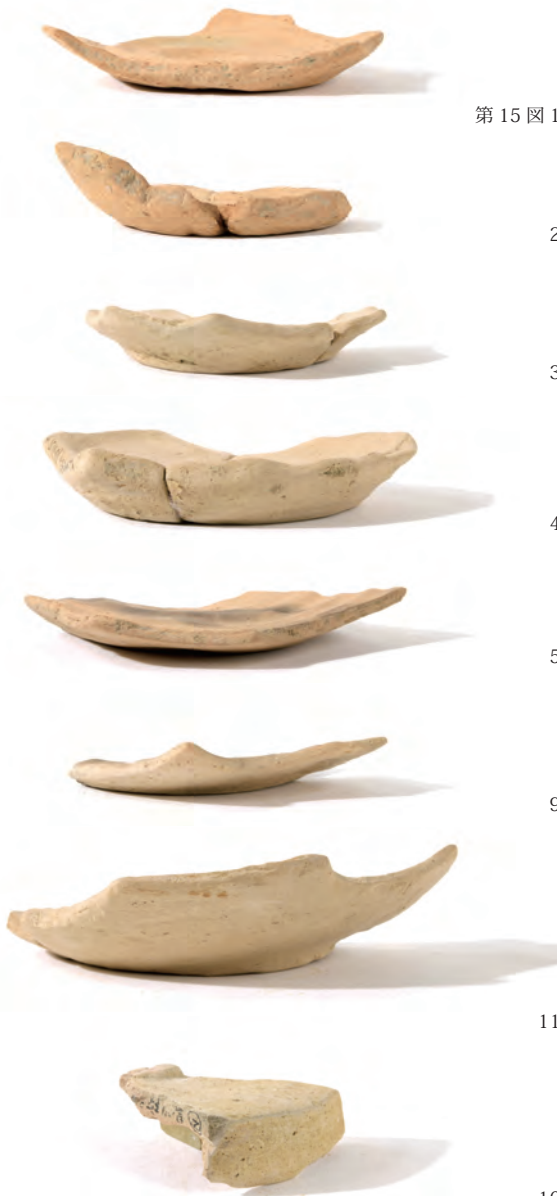


2 同5 (南から)



3 同6 (南から)





第15图 1

2

3

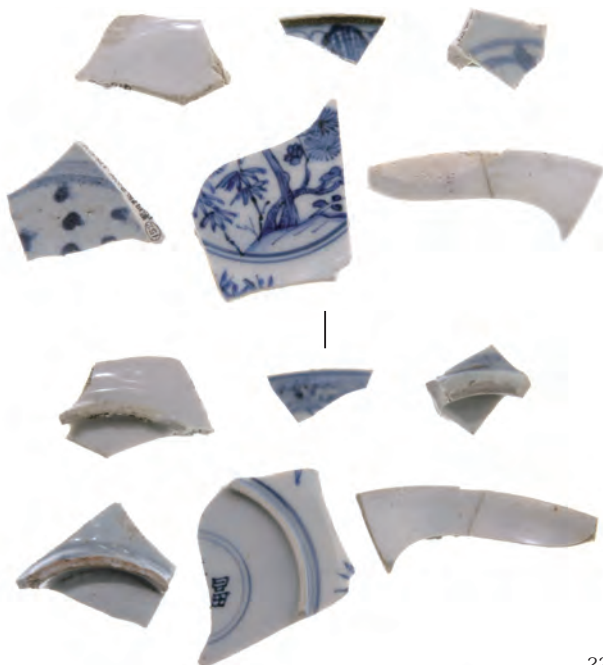
4

5

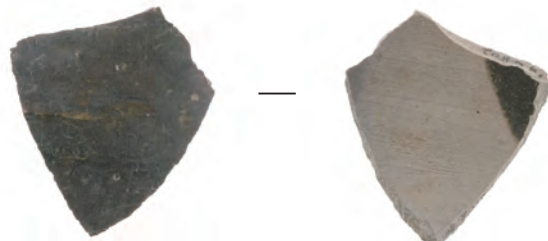
9

11

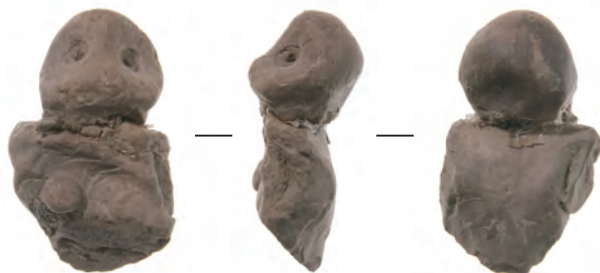
16



22-27



28



29



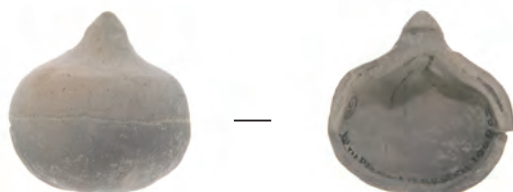
30



31



18-21



32



第15图 34



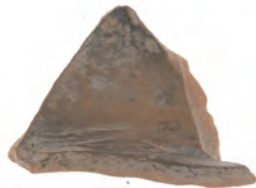
35



36



37



38



39



40

出土遺物 2



第16图 41



第17图 1



2



3



4



5



6



8



10



第 17 图 12



20



21



22



13



23



14



24



16



28



17



31



18



32



19



33



第 17 图 34-36



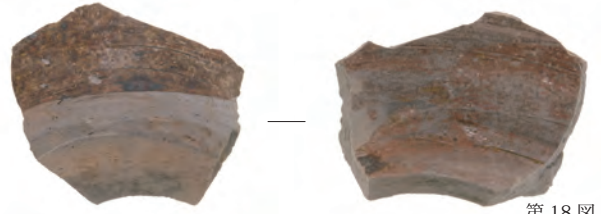
37



38-40



41·42
出土遺物 4



第 18 图 43



44·45



46~49



50



53·54



第19图 1



2



3



4



5



7



8



9



10



11

出土遺物 5



16



20



27



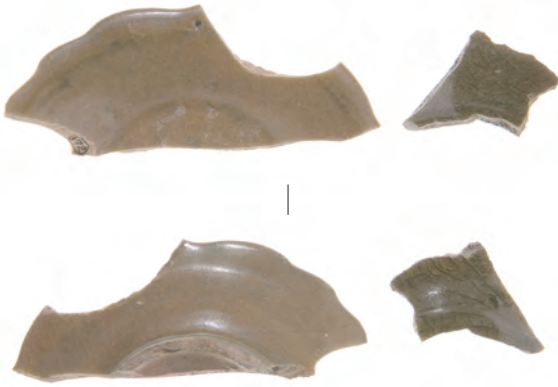
28



29



第 19 图 30 ~ 32



33 · 34



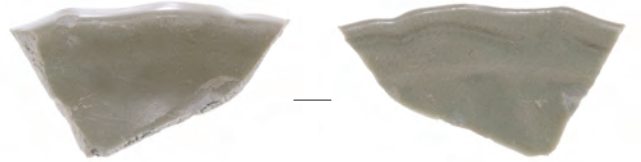
35 · 36



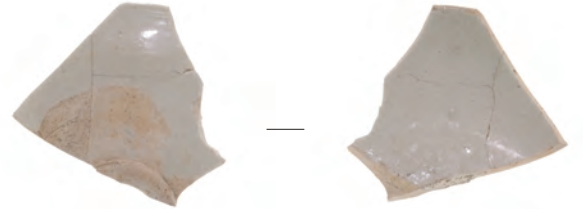
37
出土遺物 6



37



38



39



40 · 42 · 43



41



第 20 图 44



48 · 49



54



55 · 56



57
出土遺物 7



第 21 图 1



2



4



5



6



8



9



10



11



12



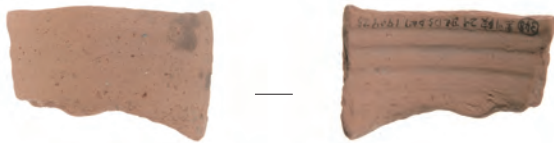
第21图 13



15



19



26



27

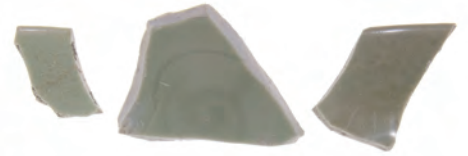


28

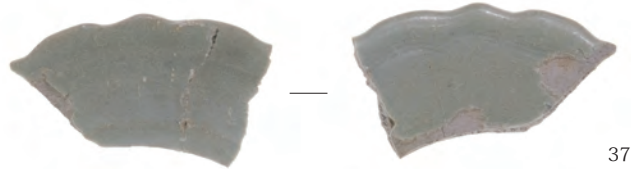


29

出土遺物 8



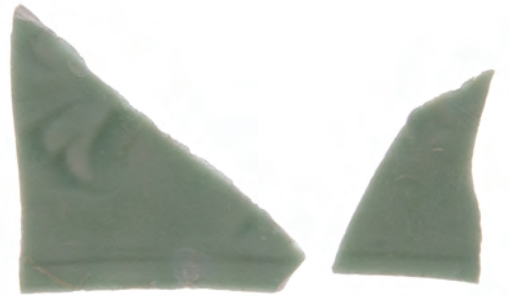
30 ~ 36



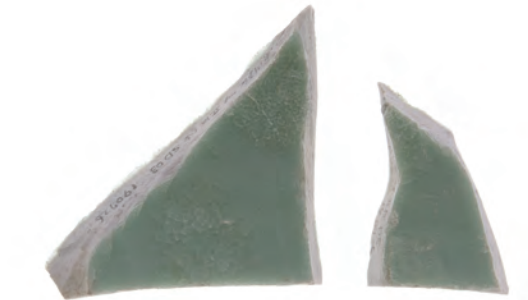
37



38



39



40

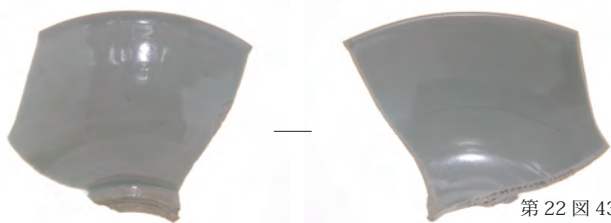




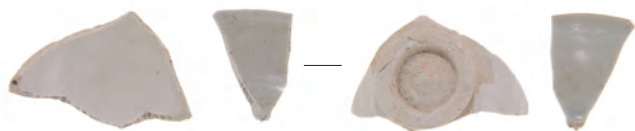
第21图 41



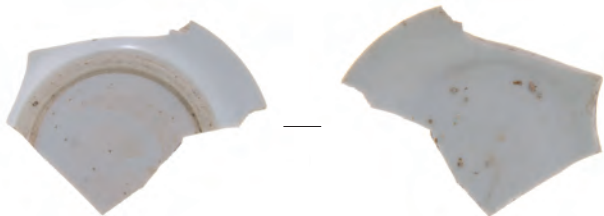
42



第22图 43



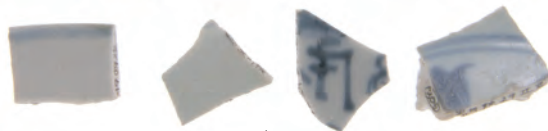
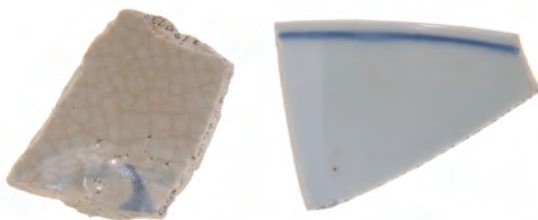
44·45
出土遺物 9



46



47



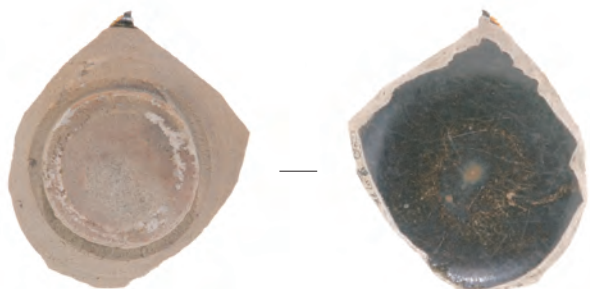
49 ~ 50



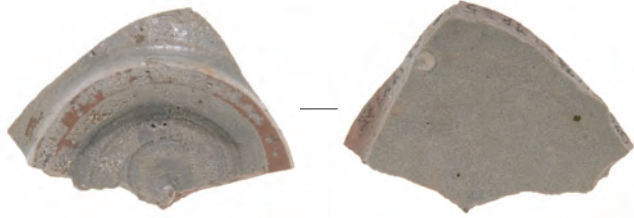
55



56



57



第22图 58



70



59·60



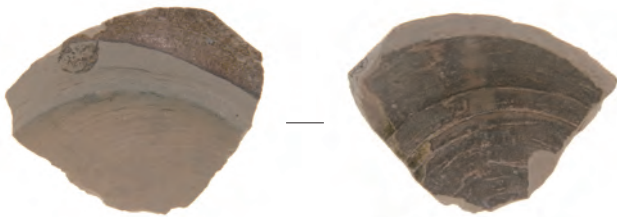
71



61



72·73



62



74~76



第23图 64~68



78



第 23 图 80



81



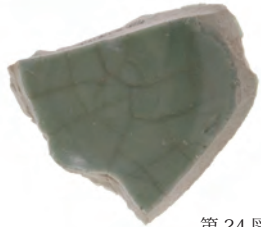
82·83



84



5



第 24 图 1



6



2



3



7



出土遺物 11



第27图3



6



第29图4



5



5



6



8



7



9



7



7



—



8



10



14



10



11



12



—



12



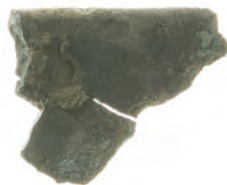
13



15



—



—



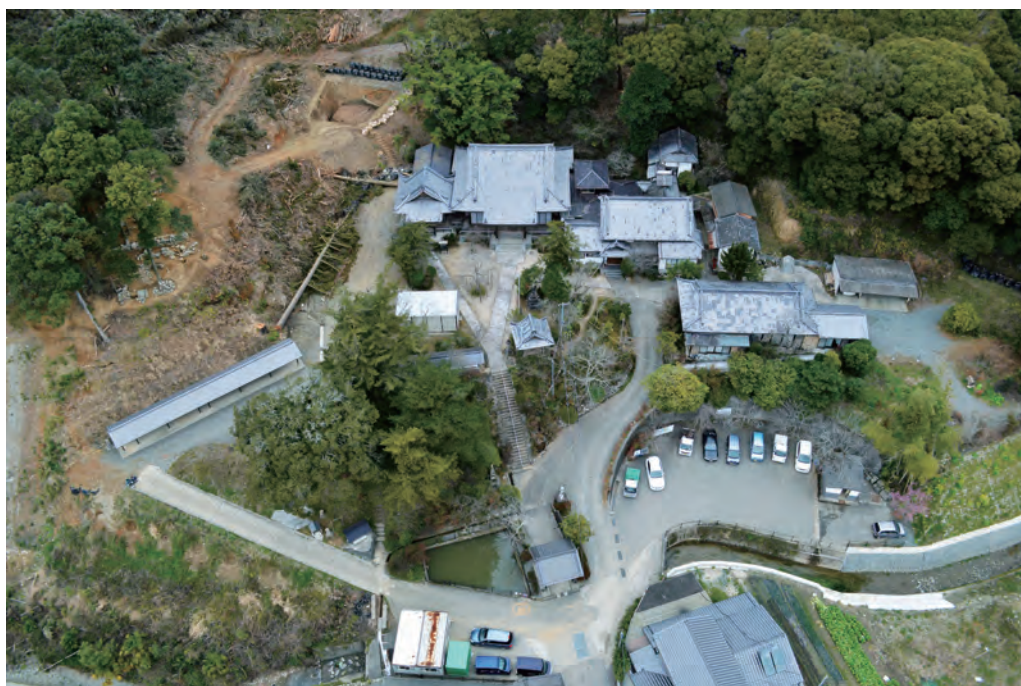
15



1 南淋寺遠景
(南東上空から)



2 南淋寺全景
(南上空から)



3 南淋寺と調査区
(南上空から)



1 I区全景（南から）



2 調査区北壁土層断面
（南から）



3 調査区西壁土層断面
（東から）



1 II区全景
(東上空から)



2 同(南上空から)



3 調査前状況
(北西から)

1 調査前状況
(下段、西から)



2 調査前状況
(中段、西から)



3 調査前状況
(上段、北東から)





1 1～4号墓(東から)



2 1号墓(南西から)



3 2号墓(南から)

1 同 (南東から)



2 3号墓 (南から)



3 4号墓 (南から)





1 同（南東から）



2 2～4号墓墓壙掘削
状況（南東から）



3 下段・中段間の階段、
石垣（南から）

1 中段検出状況
(東から)



2 5号墓 (南から)



3 6号墓 (南から)





1 同 (南西から)



2 7号墓 (南から)



3 8号墓 (南から)

1 墓碑 (南から)



2 9号墓 (北から)



3 墓碑 (北から)





1 9号墓隣墓碑
(北から)



2 10号墓 (西から)



3 同 (南東から)



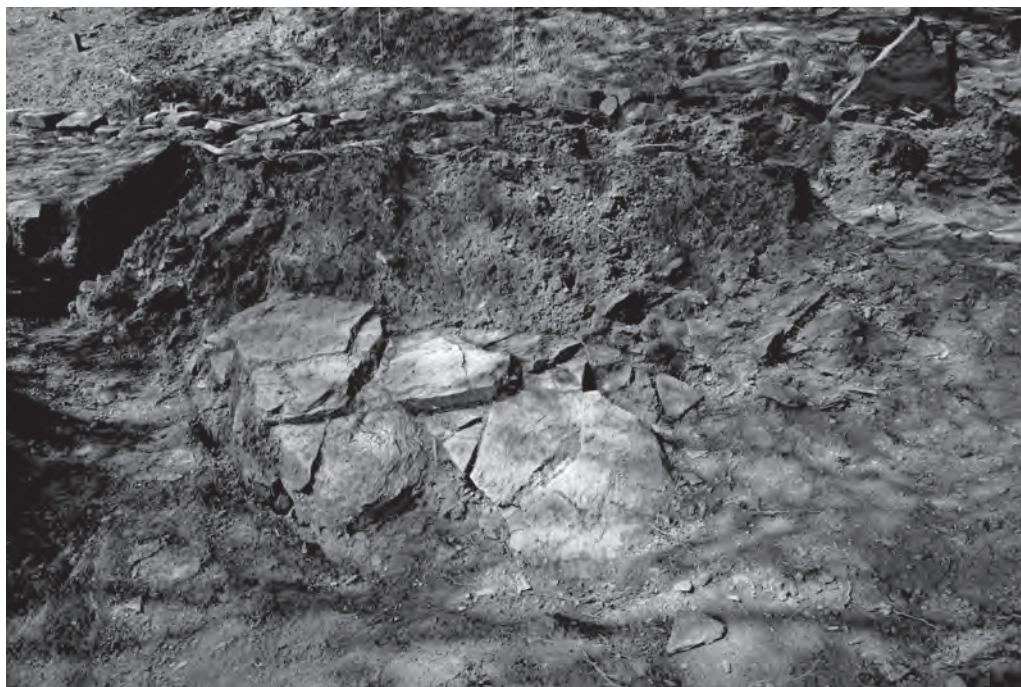
1 同土層断面(西から)



2 11・12号墓
(北東から)



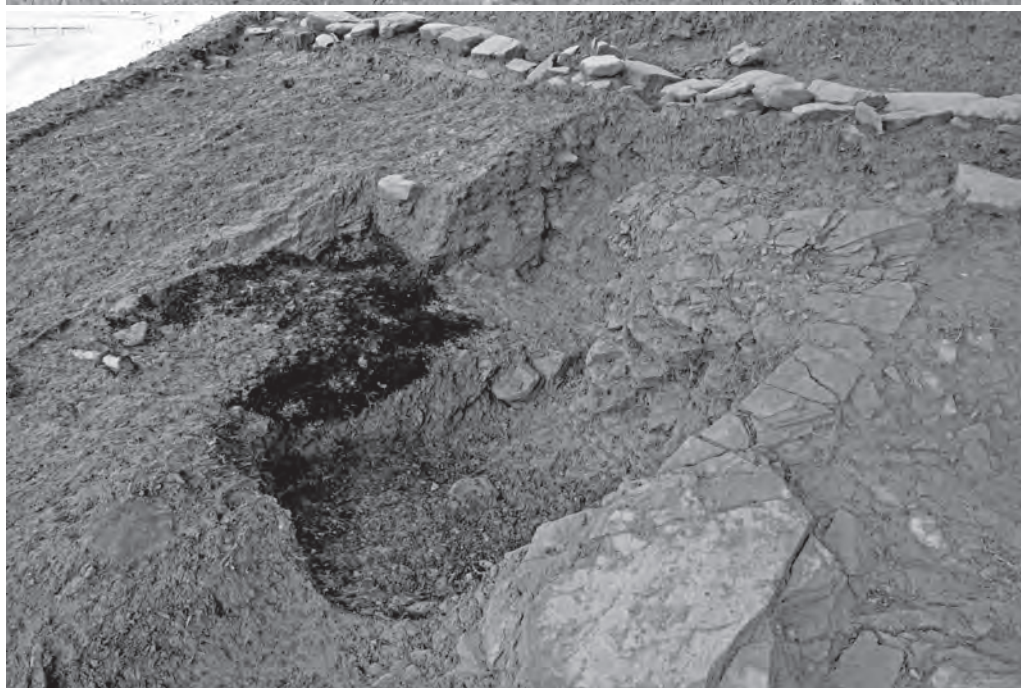
3 同 (北西から)



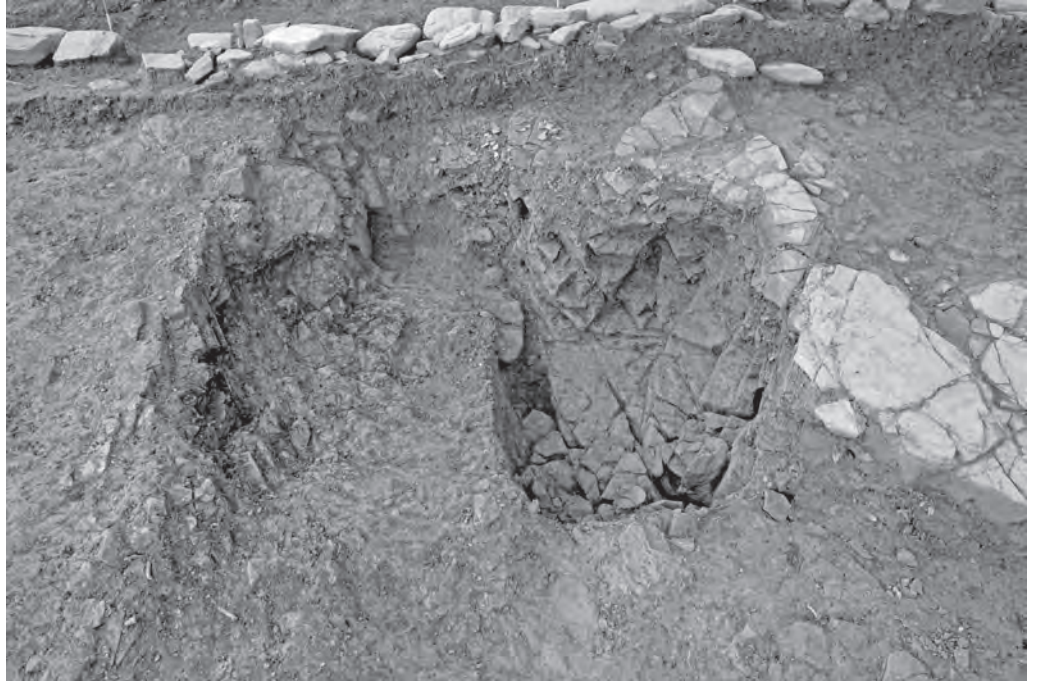
1 11号墓土層断面
(南東から)



2 火葬墓検出状況
(南から)



3 同 (南東から)



1 同完掘状況(南から)



2 同(西から)



3 遺物出土状況
(南東から)



1 12号墓断面土層
(南東から)



2 骨壺出土状況 1
(南から)



3 骨壺出土状況 2
(南から)

1 上段検出状況
(東から)



2 上段検出状況
(西から)



3 13号墓(北から)





1 墓碑



2 14号墓（北から）



3 墓碑（裏面）



3 墓碑（表面）



2 15号墓（北から）



3 墓碑（北から）



1 16号墓（南から）



2 墓碑（南から）



3 攪乱中の墓碑
（南から）

1 16・18号墓間の
墓碑（南から）



2 17号墓（南から）



3 墓碑（表面）





1 18号墓（南から）



2 墓碑（南から）



3 19号墓（南東から）

1 20号墓（南東から）



2 墓碑（表面）



3 21号墓（南東から）





1 墓碑



2 22号墓（南から）



3 墓碑



1 23号墓（南東から）



2 1号積石遺構
（南東から）



3 同（東から）



1 積石遺構中の墓碑
(三代)



2 同 (四代)



3 同 (五代)



1 同 (六代)



2 同 (七代)



3 同 (八代)



1 同 (九代)



2 同 (十代)



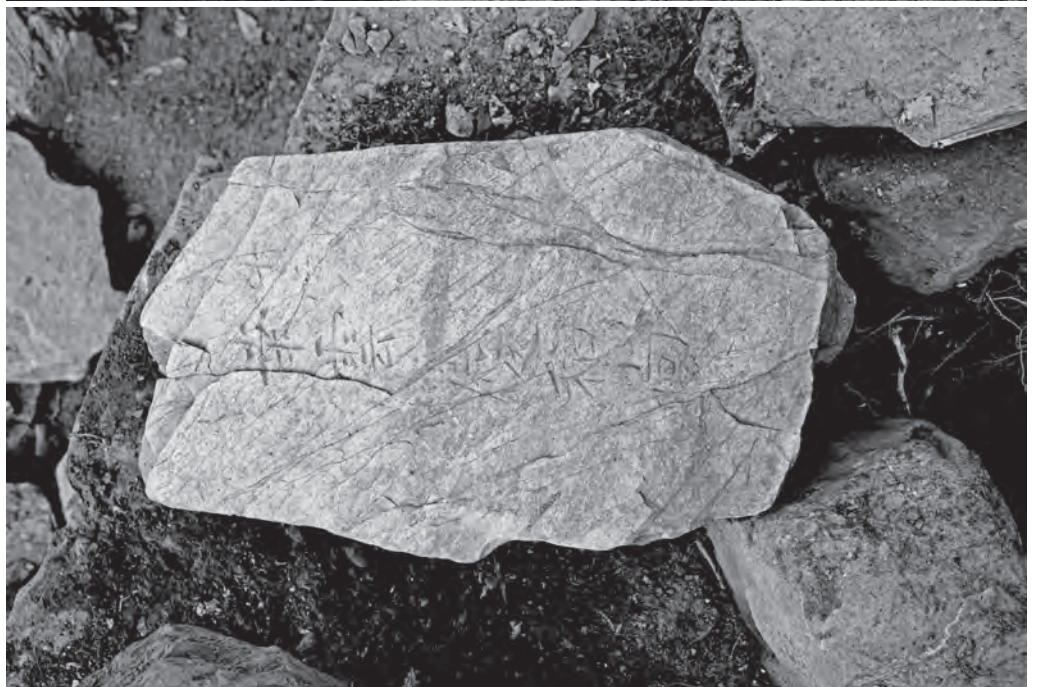
3 同 (十一代)



1 同 (十二代)



2 同 (十三代)



3 同 (十五代)



1 同 (十六代)



2 同 (十七代)



3 上段西区画
(東から)



第32图1



2



3



4



5



6



7



8

出土遺物 1



第37图2



3·4



10



11



12



第37图 16



33 ~ 38



39 ~ 52



17



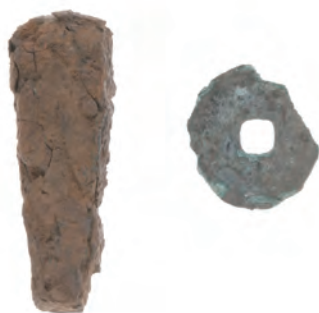
53



20 ~ 30



54



31 · 32



55

報告書抄録

ふりがな	ちくりんあんあと くろかわいんあと なんりんじ							
書名	竹林庵跡 黒川院跡 南淋寺							
副書名								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第275集							
編著者名	小川泰樹(編集) 岡田 諭							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒836-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3 TEL 0942-75-9575							
発行年月日	令和3(2021)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちくりんあんあと 竹林庵跡	ふくおかけんあさくらしくろかわ 福岡県朝倉市黒川 1593、2519	40228		33° 24' 26"	130° 47' 01"	2019.5.22 ～ 2019.7.31	530㎡	砂防ダム建設
くろかわいんあと 黒川院跡	ふくおかけんあさくらしくろかわ 福岡県朝倉市黒川 2202、2214-2、2216、 2268-1	40228		33° 24' 19"	130° 47' 00"	2019.6.13 ～ 2019.10.10	2,600㎡	
なんりんじ 南淋寺	ふくおかけんあさくらしみやの 福岡県朝倉市宮野 79-1、85、3135	40228		33° 24' 10"	130° 44' 36"	2020.1.17 ～ 2020.3.18	500㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
竹林庵跡	集落	縄文時代、中世	遺物包含層	土器、石器、 陶磁器		遺物包含層中から縄文時代と中世の遺物が出土した。		
黒川院跡	集落	中世	溝状遺構、土坑	土器、陶磁器		南北朝期～近世初頭の彦山座主の居所「黒川院跡」の一部。輸入陶磁器の一級品を含む多彩な遺物が出土した。		
南淋寺	寺院	中世～近世	墓	土器、陶磁器		平安時代から現在まで続く「南淋寺」の主に近世の歴代住職墓。		

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2120261
登録年度	登録番号
2	4

大黒川災害関連緊急砂防事業等文化財調査報告
竹林庵跡 黒川院跡 南淋寺

福岡県文化財調査報告書 第275集

令和3(2021)年3月31日

発行 九州歴史資料館

〒838-0106 福岡県小都市三沢5208-3

印刷 株式会社 四ヶ所

朝倉市馬田336